

年報

平成 24 年度



Oita University of Nursing and Health Sciences  
公立大学法人大分県立看護科学大学

## 平成24年度の年報発行にあたって

大分県立看護科学大学  
学長・理事長 村嶋 幸代

平成24年度は、第二期中期計画の1年目の年でした。私にとっては、学長・理事長としての活動1年目でした。平成23年度まで学長・理事長を務められた草間朋子名誉学長の後を受けて、新米ながら何とか1年間、務めることができました。これも、支えて頂いた多くの方々のご支援・ご尽力があったからだ感謝しています。

大分県立看護科学大学は、平成10年の開学後、毎年年報を作成・発行して参りました。平成15年度分からは、ホームページ上のみで公開してきましたが、本学のアクティビティを一冊にまとめた年報の重要性は変わりません。自己点検・評価の点では、むしろ、重要性が増していると思います。

1年間の活動がまとまった年報を眺めると、いくつか気が付きます。まず、14の委員会活動です。本学の委員会は教員と職員と一緒にチームとして活動し、成果を上げています。また、13のワーキンググループも重要な役割を担っているということが、改めて認識されます。この年報には掲載されていませんが、この他にSGと呼ばれるサポートグループがあります。SGは、若手の教員が当たることが多いですが、その働きが無いとイベント等が進みません。平成24年度の途中からカウントし始め、公平を期すようにしました。

次に気付くのが、教育活動に力が入れていることです。一つ一つの科目について教員が意図を持ち、かつ、学生の反応を見ながら教育内容・方法を改善している様子が見て取れます。

研究活動（学内プロジェクト、先端・奨励研究、研究助成金獲得状況）とその成果としての業績、更に、地域貢献の状況を見ますと、本学の教員が大分県内および全国で求められて講演していること、更に、大分県内の病院で研究指導を活発に行っていることが分かります。一方、講演に比して、学会発表は相対的に少なく、論文執筆はさらに限られることが分かります。研究活動の成果を世に問う方法は様々ですが、研究として認められ、評価されるためには、論文や著書として世に問う必要があると考えます。

本学は大分県の看護学の拠点として、教育・研究・社会貢献を通して、地域に暮らす人々がより良い生をおくることができるように、これからも着実に歩みを重ねていきたいと思えます。この年報は、次の一步を踏み出すための鏡となります。忌憚のないご意見、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

## 目次

1.	委員会／ワーキンググループの活動 .....	1
2.	学内行事の概要 .....	23
3.	教育活動 .....	26
4.	学内セミナー .....	105
5.	学内プロジェクト研究 .....	106
6.	先端研究 .....	109
7.	奨励研究 .....	111
8.	インターネットジャーナル「看護科学研究」 .....	112
9.	業績 .....	113
10.	地域貢献 .....	126
11.	助成研究 .....	141
12.	各種研究・研修派遣 .....	144
13.	学外研究者の受入 .....	146
14.	教職員名簿 .....	147

## 1 委員会／ワーキンググループの活動

### 1-1 理事会

委員 理事長：村嶋 幸代  
理事：市瀬 孝道、甲斐 倫明、戸田 太治（以上、学内理事）  
野口 隆之、小寺 隆、高橋 靖周（以上、学外理事）  
監事：神品 寛子、岩尾 隆志

理事会の役割は、法人の運営に関する重要事項を審議することである。

本年度は5回の理事会を開催し、教育研究審議会報告の後、年度計画に関する事項、地方独立行政法人法により知事の認可又は承認を受けなければならない事項、重要な規程の制定又は改正、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価などについて審議した。

なお、理事会構成員は、経営審議会の委員も兼ねており、審議内容も密接に関係することから、経営審議会と同時に開催した。

### 1-2 経営審議会

委員 理事長：村嶋 幸代  
理事：市瀬 孝道、甲斐 倫明、戸田 太治（以上、学内理事）  
野口 隆之、小寺 隆、高橋 靖周（以上、学外理事）  
立花 充康、本間 政雄、帆足 朋成、松原 啓子（以上、経営審議会委員）

本審議会の役割は、法人の経営に関する重要事項を審議することである。

本年度は5回の経営審議会を開催し、年度計画に関する事項のうち法人の経営に関するもの、地方独立行政法人法により知事の認可又は承認を受けなければならない事項のうち法人の経営に関するもの、重要な規程の制定又は改正に関する事項のうち法人の経営に関するもの、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価に関する事項のうち法人の経営に関するもの、組織及び運営の状況について自ら行う点検及び評価などについて審議した。

なお、理事会構成員は、経営審議会の委員も兼ねており、審議内容も密接に関係することから、理事会と同時に開催した。

### 1-3 教育研究審議会

委員 村嶋 幸代（学長）、市瀬 孝道（学部長）、甲斐 倫明（研究科長）、  
葉玉 哲生（学外委員）、各研究室代表者、各委員長、戸田 太治（事務局長）、  
事務局各グループリーダー

本教育研究審議会の役割は、大学の教育研究に関する重要事項の審議を行うことである。本年度は14回の教育研究審議会を開催し、各種委員会報告を行うと共に中期目標・中期計画に関する事項、学則の改正、学生の就業、進級判定、休学、復学、退学、学位の授与に関する事項、教員の人事及び評価に関する事項、教員の自己点検・自己評価に関する事項、各種諸規程等について審議・承認した。各回の教育研究審議会の議事内容は理事会にて報告された。

#### 1-4 教授会

構成員 村嶋 幸代（学長）、市瀬 孝道（学部長）各教授、助教授、講師、  
戸田 太治（事務局長）

本教授会の役割は、大学の教育課程の編成に関する事項、学生の入学、卒業、その他在籍に関する事項、学生の表彰及び懲戒に関する事項の審議を行うことである。本年度は5回の教授会を開催し、学部入試の合否判定、卒業判定および学生の表彰（学長賞、卒業研究の優秀賞、学生賞）に関する事項について審議・承認した。教育研究審議会で審議・承認された休学、復学、退学、進級判定についての事項は教授会で報告された。

#### 1-5 研究科委員会

構成員 村嶋 幸代（学長）、甲斐 倫明（研究科長）、各教授、各准教授、各講師

本委員会では、大学院の教育課程における学生の入学、修了、その他在籍に関する事項及び学位の授与に関する事項の審議を行った。

## 1-6 自己評価委員会

構成員 吉村 匠平、平野 亙、猪俣 理恵、小嶋 光明、福田 広美、朝倉 泰三

### FD活動

1) 新入職員研修を開催した。参加者15名。実施後、参加者対象に調査を行い、次年度のプログラムを修正した。2) 海外短期研修に3名を派遣した。3) 国内短期研修に5名を派遣した。4) 全教職員を対象とした科研費申請講習会を企画、実施した。平成25年度科学研究費補助金申請状況は、新規申請については41件、新規採択が6件、継続は10件だった。5) 実習を担当する新任教員を対象として、個別または集団で面接を実施した。6) 対象者の権利擁護、倫理委員会に提出する書類の作成に関する研修会を、教員、院生を対象に開催した。7) 自己評価委員会予算で、学内教員が希望する研修等に参加できる環境を整備した。8) 教員による授業の相互参観、講義録画サービスについて周知活動を行った。9) 少人数で行う検討会のサポート（スーパーバイザーの派遣）を行った。10) 希望者を対象に、双方向的な講義のコンサルテーションを行った。

### 授業評価

教員自身が授業改善に必要な資料を得る一助として、学生による授業評価を継続して行った。授業評価15名、実習評価11名。希望者を対象にオリジナルアンケートの作成を支援し、4名の教員が利用した。2年修了時および卒業時点での本学の教育に関する総合的なアンケートに関しては、調査項目を見直し実施した。

### 議事録整備

本年度より、委員会議事録の学内ウェブへの円滑なアップロードを促すため、年に3回アップロード状況を確認し、委員会に対応を依頼した結果、アップロード状況が改善された。

### 人権啓発・ハラスメント防止

4月4日に教職員を対象としたアカデミックハラスメントに関する研修を行った。8月3日には障がい者の人権をテーマに人権研修を行った。セクシュアルハラスメント等の防止等に関する現行規定を改定し、ハラスメントの防止等の規定とした。ハラスメント事案1件に対応した。

- 1) ハラスメント相談員だけでなく、調査委員に関しても外部委員1名を委嘱する形にする。
- 2) ティーチングポートフォリオ、発達障がい学生の理解など、学内で小規模の学習会を継続的に開催する。
- 3) アニュアルミーティングの実施形態について検討する。

## 1-7 教育研究委員会

構成員 市瀬 孝道、中林 博道、佐伯 圭一郎、梅野 貴恵、小野 美喜、藤内 美保、  
赤星 琴美、神崎 正太、甲斐 倫明（オブザーバー）、村嶋 幸代（オブザーバー）

本委員会は学生の教育と教員の研究を効果的かつ円滑に行うために教育・研究関連の活動と教育・研究予算の策定を行っている。本年度は11回の教育研究委員会を開催した。

- 1) 国家試験対策に関しては、解剖生理等の基礎試験を9月に実施し、国家試験の補講は例年と同じく12月上旬に実施した。模試については例年どおり国試直前まで実施、国試終了直後には国家試験対策に関するアンケート調査を実施した。平成24年は保助看の100%合格を達成した。
- 2) 看護学実習（第1段階～第5段階）に関しては、実習代表者会議のもとで全体の实習日程調整や教員・学生配置等を検討し、本委員会で最終決定した。実習関連WGに関する活動内容は下記に記述した内容によって看護実習の充実を図った。
- 3) 卒業研究に関しては、3月末に各研究室の卒論研究テーマを収集し、テーマや指導内容について調整を行った。また県立病院、大分日赤病院、アルメイダ病院における卒論研究の研究内容や調査フィールドが重複しないように調整した。例年どおり卒業研究関連の2つのサポートグループ（SG）を設置し、SGは卒業研究発表会要旨集と卒業研究論文集の作成、卒業研究発表会のサポートと、平成25年度の各研究室学生配置、看護研究の基礎 Iの講義のサポート（テキスト作成も含む）等の実務を行った。卒業研究の優秀賞を2件選別し卒業式に授与した。
- 4) 学部教育を看護師教育のみに特化した平成23年度カリキュラムが本年度で2年を修了した。平成24年度では23年度カリキュラムの若干の見直しを行い、生体薬物反応論、看護と遺伝、ケースマネジメント実習（4年次3単位）について、講義・実習の分割や開講時期の変更を検討し、教育研究審議会で承認のうえ文科省に届け出した。また自由科目に外部講習のスポーツ救護ナースを取入れ単位化することを決めた。
- 5) 4年次生を対象とした総合人間学の開講にあたっては講師の選定と企画を行い、SGの協力により10月1日より全8回の講義を実施し、外部からの参加者も多く見られた。
- 6) 進級試験は、進級試験WGによって試験問題を選別し平成24年2月28日に実施した。再試験は平成24年3月7日に実施した。
- 7) 研究予算関連では例年どおりプロジェクト研究、先端研究、奨励研究を予算化し、プロジェクト研究1件、奨励研究3件、先端研究4件を採択した。
- 8) 平成24年度前期・後期の科目等履修生の募集を行い、2名を履修生として受入れた。また平成24年度も研究生の募集を行ったが、本年度も応募者はなかった。
- 9) 本年度より看護技術支援システムWGを立ち上げ、看護技術修得プログラムのWeb上での使用やeラーニング化を検討した。既存のシステム(エルゼビアナーシングスキル日本版)を導入し、eラーニングとして活用することとし、来年度より本WGの検討内容は実習WGの中で行うこととなった。
- 10) 平成25年度のシラバス作成を行った。
- 11) 教育研究委員会が担当する平成24年度の年度計画に関しては、全て遂行し、100%達成することができた。

平成23年度よりスタートした新々カリキュラムについての全体的な評価と改正を本格的に検討する。

## 1) 国家試験対策WG

構成員 梅野 貴恵、小嶋 光明、赤星 琴美、井伊 暢美、石岡 洋子、桑野 紀子、河野 梢子、栗林 好子、後藤 成人、神崎 正太

平成24年度の国家試験受験対象者は看護師79名、保健師81名、助産師6名であった。保健師・助産師・看護師国家試験合格率100%をめざし国家試験対策WG会議を11回行った。教員は、学生の対策委員と連携し役割分担を決め計画を立案、実施した。具体的活動は、例年9月上旬に実施していた国家試験ガイダンスを総合実習終了直後の7月に実施、さらに、例年12月に実施している実力試験（解剖・生理を中心とした問題）を9月に実施し、学生の自覚を促した。また模試は、業者模試（看護師7回、保健師3回、助産師2回）、学内模試（看護師3回、保健師3回、助産師5回）を実施し、その結果を分析し、成績不振の学生に対して、個別面接を実施し学習・生活状況を確認し国家試験へのモチベーションを喚起した。今年度は学生の主体性を重視し、学生アンケート結果から補講科目を抽出し、12月に実施した。12月の卒論発表後から、WGの教員が成績不振学生数名に対して小グループでの学習支援を行い、卒論配置研究室の教室主任に現状を報告し、指導強化を求めた。3月25日に発表された合格率は、看護師、保健師、助産師ともに100%であった。

## 2) 実習代表者会議

構成員 村嶋 幸代、藤内 美保、江藤 真紀（9月まで）、赤星 琴美（9月～）、桜井 礼子、林 猪都子、梅野 貴恵、影山 隆之、高野 政子、小野 美喜、市瀬 孝道、甲斐 倫明

本会議は実習運営を行う研究室の責任者で構成しており、実習履修の単位認定に関すること運営に関する話し合いを毎月実施し、タイムリーな情報共有と問題解決にあたった。また、今年度は特に以下の検討を継続して実施した。

### 1. 実習指導体制の見直し

①学生が実習上で自律した行動がとれ臨地指導者の指導を受けられるようにすること、②学内の授業等の質をあげることを目的に1教員の实習週数を減らす方向で教員の实習配置の検討を行った。その結果、今年度から第4段階成人老年看護学実習は原則常駐体制を試みた。さらに平成25年度は1教員の实習週数は22～24週が概ね17週に減少する体制とした。来年度は新体制での実習運営について、学生の学習成果等を評価する必要がある。

### 2. 新新カリキュラム移行に伴う実習科目検討

①地域看護学実習等の科目が変更となるため、留年生の科目履修について検討を行い、単位取得に向けた科目履修の対応を整備した。  
②新科目となる「看護スキルアップ演習」、「第3段階看護技術演習」の科目目標や内容について協議した。



### 3) 実習関連WG

構成員 桜井 礼子、藤内 美保、赤星 琴美、石岡 洋子、石田 佳代子、植田 みゆき、  
大賀 淳子、草野 淳子、桑野 紀子、秦 さと子、中釜 英里佳→堀 裕子

実習関連WGは、教育研究委員会のもと、看護系研究室からそれぞれ1名を選出し、月1回の定例会議を開催し主に実習に関連し以下の活動を行った。

1. 実習センター及び各領域の実習施設の実習環境の整備等
2. 実習に関連する文書等の見直し
  - ・実習ガイドブック/個人情報の取り扱いに関するガイドライン/事故対応マニュアル等
3. 看護技術修得プログラムの企画・運営・評価
  - ・新カリ（第1段階～第3段階）の企画・運営・評価
  - ・新新カリ（第1段階）の企画・運営・評価
  - ・新新カリ（第2段階）の企画
4. 総合実習の企画・実施
5. 実習関連予算の管理
6. Webページの活用（看護学実習に関する資料）
7. 看護技術修得確認シートの作成
  - ・これまで使用したシートの再評価
  - ・新新カリ対応の新たなシートの作成

### 4) 進級試験WG

構成員 赤星 琴美、佐伯 圭一郎、石田 佳代子、松本 初美、定金 香里、田中 佳子

今年度試験作成のための出題基準・出題範囲を確認し、各教員に問題作成依頼を行い、学生へは7月13日進級試験ガイダンスを行った。平成25年2月28日に2年次生に対し進級試験を実施した結果、23名合格、59名が不合格となった。さらに不合格者に対し3月7日に再試験を実施した結果、1名が不合格となったため、教育研究委員会での不合格者対応につなげた。

### 5) 助産学選考WG

構成員 梅野 貴恵、佐伯 圭一郎、吉村 匠平、伊東 朋子、樋口 幸、石岡 洋子、安部 真紀

4月24日に平成25年度助産学実習履修許可者の選考を行った。教育研究審議会の議を経て9名に履修が許可された。履修を許可された者のうち2名が、助産学実習履修要件である助産学科目の未履修があり、履修を中止した。

## 1-8 学生生活支援委員会

構成員 桜井 礼子、宮内 信治、石岡 洋子、岩崎 香子、江月 優子、佐藤 俊実、関根 剛、  
津留 由美

学生生活支援委員会の主な活動として、学生生活が快適かつ充実したものとなるように、4月の全学オリエンテーションをスタートに、コンタクトグループ、新入生宿泊研修、交通安全実技講習会、スポーツ交流会、キャンパスクリーンデー、DV講演会などの行事の企画・運営を行った。また、学年担任制をとり、年間を通して、学生の留年、休学、復学及び退学に関する事、交通安全、健康管理に関する事、奨学金等に関する事、サークル活動、自治会活動に関する事などについて学生からの相談を受け対応した。また、学生生活実態調査を実施するとともに、学年担任を中心に学生への個別面談などを実施し、問題把握と解決に努めた。

今年度の課題となった点は、学生の留年、休学、退学をいかに減らすかである。特に、必修科目の確実な単位取得、進級試験の合格に向け、次年度は1年次・2年次の担任を複数とし、さらに学習支援方法について検討し実施する予定である。また、学生が気軽に相談できる体制も充実させていきたい。

## 1-9 就職支援委員会

構成員 林 猪都子、大賀 淳子、品川 佳満、首藤 信通、桑野 紀子、小川 三代子、  
戸田 太治、神崎 正太

学生の就職の円滑化と県内就職率50%以上を目指して、就職活動を支援し年間計画に沿って活動を行った。

1. 求人数、求人件数、求人訪問対応：求人数（件数）は、全国 19127人（539件）、大分県 421人（66件）であった。全国からの求人訪問対応は61件であった。
2. 学生の就職・進路状況：卒業生81名であり、就職決定者77名（保健師7名、助産師6名、看護師64名）、未定者1名、進学者3名であった。学生に対しては各委員が分担して、学生への個別支援を行った。必要な学生には個々にメールで情報を提供した。
3. 就職相談室の開設：就職相談室を新設して就職相談員1名を配置し、学生が県内就職について相談できる体制を構築した。学生の就職相談日を第2、4水曜日の午後として合計164名の相談を得た。就職相談員は3、4年次生全員に就職面接を実施し、学生の就職希望に関する実態を把握し相談にのった。本学HPに既卒者の県内Uターン就職相談について掲載し2名の相談を得た。
4. 県内施設就職説明会：4年次生と3年次生対象に県内施設就職説明会を2回開催した。（4/25；30施設参加、2013年2/27；28施設参加）説明会の方法は学生全体へ施設概要を説明し、その後個別相談を行った。卒業生の参加による勧誘も見られ好評であった。
5. 公務員対策講座：県内の保健師や県立病院への就職希望者のための公務員対策講座を、3年次生、4年次生、大学院生（広域看護学）対象に、6/16（土）、8/28（火）、12/1（土）、1/26（土）の4回開催し、合計73名の学生が受講した。
6. 就職ガイダンス：3年次生対象に就職ガイダンスを7/4（水）、平成25年2/20（水）の2回開催した。
7. 身だしなみ講座：4年次生希望者対象に、身だしなみ講座を7/4（水）に開催し、20名の参加を得た。スーツの基本的な着こなしについて学び、学生から多くの質問があり就職面接に役立てることができた。
8. 模擬面接：臨時面接を5回、定期面接を4回開催し、60名の学生に実施した。
9. 県内就職フォローアップ：7月から8月に湯布院厚生年金病院、大分大学附属病院、大分県立病院、臼杵市役所の4カ所を各委員が訪問し、勤務状況の調査や施設からのコメントを頂いた。
10. 県内施設インターンシップ：大分県看護協会が主催する県内のインターンシップに3年次生28名、4年次生1名が参加し、学生に就職選択に関する支援を行った。

本年度の県内就職率は42.9%であった。昨年から17.1%の増加がみられたが、施設訪問によって、4年次進級前に就職先を県内・県外と決定している学生がいる。3年次生の2月に県内施設就職説明会を開催し、就職相談員による1～2月の学生への面接と連携しながら、県内施設の情報を3年次生から与えていく必要がある。また、同窓会と連携しながら卒業生のUターン確保を検討していく必要がある。

## 1-10 広報・公開講座委員会

構成員 伊東 朋子、関根 剛、安部 眞佐子、松本 初美、小野 孝二、池辺 賢一、中野 麻梨子

### 1) 若葉祭

5月12日、13日に開催された若葉祭にて教員イベントの募集や調整をした。参加者は2日間で約1200名を超えており、大学の現在の姿を伝える場としては有用であった。実習室の廊下に掲示したパネルは、大学概要、カリキュラム、大学院概要、研究室紹介などで、変更が生じているものは更新した。教員イベントを学生とともに実施することで、学生と地域の人々とのふれあいの場もなっている。実習室・実験室、カレッジホールにて、高齢者、妊婦などの疑似体験、小児、成人対象の救急法の体験、放射線の解説、身体組成の解説などによって看護大学の教育内容や設備の紹介を行った。その他にアロマハンドマッサージのケア技術の実際や、猫車などで来場者に親しみを持ってもらうイベントなど地域住民が参加して楽しめるプログラムを展開した。教員の研究紹介では、4人のポスターの掲示を行い、7月のオープンキャンパスの案内チラシ、今年度版大学案内パンフレットを自由配布し、一般の方々や進学予定者にも大学の内容が伝わるように配慮した。

### 2) オープンキャンパス

平成24年度の開催は、夏休み中の7月22日（日）に実施し、参加者は289名で、本学について大いにアピールできた。講堂での説明会・体験イベントなど教職員全員と学生の協力者として取り組んだ。食堂も営業してもらい、保護者等来学者に利用してもらった。教育・研究の展示はパネル展示物を一部新規作成した。学生自治会によるTAKIOソーランや学生の話が聴ける合格体験発表や在学生からのメッセージ、教員による模擬授業などを企画した。在学生が相談コーナーや実習室への誘導を行うことで、高校生や保護者には在学生との交流の機会ともなり、入学後のイメージを深めることができたと思われる。

### 3) 地域ふれあい祭り

平成24年度の地域ふれあい祭りは、大分市主催の大分七夕祭りに参加する形で、県民との交流と本学の広報を目的として参加した。当日の参加者は教職員と学生と合わせて47名であった。学生および教職員は事前に踊りの先生の下で練習を行い、祭当日は駅前通りで、チキリンばやし、サンバチキリン、鶴崎踊りを披露した。みどりの王国で開催された「ななせの里まつり」11/4（日）に参加し、300人近い方の血圧測定、体成分分析、栄養評価などの健康指導・健康チェックを実施した。

### 4) 出前講義

看護系進学を希望する高校生を対象とした高校の出前講義に講師を派遣した。高校からの依頼で、助教以上の教員が参加した。杵築高校(7/12):梅野教授、中津南高校(7/18):吉村准教授、佐伯鶴城高校(7/26):桜井教授、別府鶴見丘高校(9/7):安部准教授、鶴崎高校(10/22):小野助教、竹田高校(10/30):赤星講師、舞鶴高校(2/21):伊東准教授、その他、中学生を対象とした中学の出前授業にも豊府中学(7/20):河野助教、巻野助手を派遣した。

### 5) 大学見学

オープンキャンパスに参加できなかった高校生や保護者の大学見学等の希望者、申し込みに随時対応した。日田市立戸山中学(9/28)生徒24名、教員3名の見学に対応した。

### 6) 大学オリジナルグッズの作成

大学名の入った大学オリジナルグッズを作成し、大学広報の1つとして活用した。クリアファイル(2000枚)、4色ボールペン(1000本)、風呂敷(50個)を追加で購入した。

### 7) マスメディアによる広報

新聞、テレビ、ラジオ等に情報提供や取材依頼を行い、記者及び取材班の対応を担当した。大学イベントや学生のボランティア活動などの社会貢献活動について、随時Webに公開した。また、定期的に県政記者クラブに情報提供を行い、情報発信を行った。また、大学HPで教員の研究紹介として、9件を掲載した。

#### 8) 大学案内パンフレット

5名の教員と委員会委員とでWGを運営した。2013年度版として次年度5月の完成に向かって作成中である。

#### 9) 大学広報誌

総括責任者を事務局長として、5名の教職員でWGを運営した。平成24年度、これまで毎年発行していた後援会通信を発展的に解消し、新たに大学広報紙「風のひろば」を作成した。教育活動、教員の研究紹介、地域への貢献事業などを掲載し、後援会、同窓生や地域社会との交流紙として、年2回の予定で、創刊号を発行した。

#### 10) 公開講座

「ストレス社会を生きる～健康に生きる10のヒント」と題した有料公開講座を7月20日（ストレスとうつ:影山教授）、7月27日（思春期とストレス:関根准教授）、8月3日（糖尿病とともに生きる:松本講師）、8月10日（家族の介護ストレス:赤星講師）の計4回、学内で開催した。参加者は延べ86名で、うち4名が全て出席し、修了証を授与した。事前にパンフレットを3,000部作成し、地域への広報に加えて、マスコミ（大分合同新聞・月間ぷらざ・シティ情報おおいた）や行政機関等、講座内容に関連のある団体等への参加を呼びかけた。

### 1) 大学案内パンフレットWG

構成員 江月 優子、小嶋 光明、田中 佳子、首藤 信通、森田 慶子

平成25年度版大学案内作成を7月から開始した。平成24年度版大学案内は5月上旬に完成し、若葉祭を始め、広く本学の広報活動に活用した。次年度の大学案内では「教育理念」、「教育目標」、「建学の精神」および「看護職教育の在り方」の他に「研究室紹介」も内容に盛り込み、横向き印刷とし、フルカラー、44ページの装丁で5,000部印刷とした。現在、5月完成に向けて最終段階の作業を行っている。

### 2) 英文大学案内パンフレットWG

構成員 Gerald T. Shirley、猪俣 理恵、岩崎 香子、桑野 紀子、田原 歩

本学の特徴と教育内容・活動を英文でまとめ、対象が主として海外の教育・研究関係者であることを考慮した“University Bulletin”を3年に1回の計画で改訂する。

### 3) 大学広報誌WG

構成員 戸田 太治、後藤 成人、朝倉 泰三、池辺 賢一、池邊 尚美、佐藤 めぐみ

平成24年度、大学広報紙の名称を公募し、「風のひろば」に決定した。地域との協働、地域への貢献、教育活動報告、教員の研究紹介などを掲載し、後援会や同窓生だけではなく、広く地域社会との交流紙として、1月に創刊号を発行した。

#### 4) 学外WebWG

構成員 品川 佳満、岩崎 香子、小野 孝二、田原 歩

学外Webサイトの情報の更新・掲載（大学案内、入試・入学案内、イベント案内・報告など）および管理・運営を行った。サイトは、1日約700～800人のアクセスを記録している。

#### 5) 英文WebWG

構成員 Gerald T. Shirley、猪俣 理恵、定金 香里、田原 歩

海外の利用者を重視した内容とし、学内行事等の報告掲載を随時行うことで、常に最新の情報を分かりやすく閲覧できるようにした。

## 1-11 国際交流委員会

構成員 Gerald T. Shirley、猪俣 理恵、李 笑雨、松本 初美、定金 香里、江本 華子、高波 利恵（6月30日まで）

国際交流委員会が平成24年度に行った活動は以下のとおりである。

### 1) ソウル国立大学校派遣学生受け入れと交流

ソウル国立大学校看護大学から大学院生2名、学部生5名および同行教員1名の計8名（7月22日～7月29日までの8日間）を本学に受け入れ、日本の医療・保健・福祉制度、看護について理解を深めた。本学では、学生および教員がサポートグループとして交流を支援した。

### 2) 本学の学部生および大学院生の派遣

大学院生2名、学部生4名および同行教員2名の計8名を（8月19日～26日までの8日間）ソウル国立大学校看護大学に派遣した。韓国の医療・保健・福祉制度、看護について視察等を行い、理解を深めた。報告はWebに掲載した。

### 3) 第14回看護国際フォーラムの開催

大分県看護協会と共催である看護国際フォーラムを平成24年10月27日（土）に別府ビーコンプラザ国際会議場にて開催した。本年は「看とりの看護」をテーマとし、オーストラリアから1名、韓国から1名、国内から1名の講師を招聘した。参加者は297名と盛況であった。

### 4) 第12回NP国際会議の開催

平成24年10月28日（日）に、本学にて、第12回国際会議をNPプロジェクトと協力して開催した。オーストラリアから1名、韓国から1名の講師を招聘した。

### 5) 第15回大分看護科学大学・ソウル大学研究交流会の開催

大分看護科学大学・ソウル大学研究交流会として、平成25年3月19日（火）に本学23講義室で開催した。姉妹大学の韓国ソウル国立大学校看護大学から各3名の講師を招聘した。海外講師3名および本学教員2名の計5名が講演を行い、参加者と共に活発に意見交換を行った。

平成24年度の計画を踏襲した計画を検討する予定である。基本的には、学生の国際的視野の育成と教員の研修の質のさらなる向上のため、国際交流の機会と内容を検討するよう試みる。そして、毎年、看護国際フォーラム後にアンケートを実施し、大分県内の看護職のニーズに沿ったテーマを選んで開催し、地域貢献にもつなげる。

## 1-12 図書委員会

構成員 小野 美喜、Gerald T. Shirley、福田 広美、樋口 幸、朝倉 泰三、白川 裕子、  
工藤 信二

毎月1回の委員会を開催し以下の活動を行った。

- 1) 休日開館日における学生、卒業生及び修了生への図書貸出を開始し、学習機会の拡充を図った。また卒業生や修了生への貸出冊数を5冊に増やし、教員・院生への視聴覚教材の貸出期間を延長するなど制限を緩和し、円滑な利用につなげた。
- 2) 電子ジャーナル導入に向けてトライアルでのCINAL、コクランの使用を開始し、来年度の正式導入を決定した。
- 3) 看護学会論文集の冊子体廃止に伴い、最新看護記事索引Webを導入した。
- 4) 研究室所蔵図書の移管等に伴い、発行年の古い図書や重複図書を整理するために除籍規定を整備した。
- 5) 新着図書情報をメール配信し、図書館の利用促進を図った。
- 6) 教員文献複写画面のレイアウト変更を行い入力容易となるよう改善した。
- 7) 図書館利用案内のパンフレットの改訂を行った。
- 8) 大分県大学図書館協議会の幹事校として年2回の研修会を開催した。

電子ジャーナルが円滑に利用されるために利用状況の確認と対応を行う。

## 1-13 入試委員会

構成員 構成員は非公開としている。

本委員会は、平成24年度に実施した入学試験に関するすべての事項について審議し、入学試験を統括した。

広報委員会と協力して、入学試験に関する広報活動を行った。業者・県看護協会等主催の進学説明会の参加は18箇所、高校教諭に対する進学説明会来場者は26名であった。この他、若葉祭及びオープンキャンパス会場に進学相談コーナーを開設した。

大学院入学試験は例年通り8月に実施した(8/25)。大学院博士課程(前期)の実技試験は行わないことを前年度決定していたので、筆記試験と面接試験のみを行った。博士課程(前期)の実践者養成(NP、広域看護学、助産学)と健康科学専攻、及び博士課程(後期)の健康科学専攻については二次募集を行い、入試を実施した(2/25)。

学部の特別入試(11/23)の志願者数は県内81名、県外21名、社会人2名で、前年度と同水準であった。学部の一般入試(前期2/25、後期3/12)の志願者数は前期162名(前年度より約30%増)、後期141名(前年度より約20%減)であった。本年度より編入学の募集は停止した。

前年度の大学入試センター試験で問題冊子の配布方法に誤りがあったことから、監督者等が説明会を欠席することがないように開催回数を増やし、実施要領等の周知徹底を図った。また、問題作成の段階毎にチェックリストを作成して、出題ミスの防止に努めた。

しかし後期試験の問題に脱字があったことから、引き続き再発防止方法について検討する必要がある。

入試の広報と運営方法の両面について、引き続き改善のための検討を重ねながら、年度計画に沿って活動を行っていく。



## 1-14 研究倫理・安全委員会

構成員 稲垣 敦、平野 互、赤星 琴美、秦 さと子、小嶋 光明、美登 弘美

- ・今年度は100件の申請を審査した。
- ・研究倫理・安全についての教育および研修については、新任教職員に対しては新任教職員研修会（4/3）、学生に対しては4年生対象の看護研究の基礎1（2/26）、大学院生に対しては看護研究特論／研究のすすめ方（4/16）で実施した。
- ・国立大学法人動物実験施設協議会（国動協）および公私立大学動物実験施設協議会（公私動協）主催の「動物実験に関する相互検証プログラムによる検証の申請実務に関する説明会」（京都4/25）に動物実験施設管理責任者を派遣し、報告を受けた。文部科学省は、平成23年に各機関に自己点検を行うように指導、外部評価については5年ごとに受けるよう推奨しており、本学の対応については教育研究審議会（5/9）において役員会に検討を依頼した。
- ・動物実験に関しては、「研究機関等における動物実験等の実施に関する基本指針（文部科学省）」、「動物実験施設 利用の手引き」、「研究計画の申請に関する手引き」の学内規定に基づき審査を実施している。また、動物実験施設の全般的な管理運営は動物実験施設管理責任者が「動物実験施設 利用の手引き」に基づいて実施している。本年度の動物を対象とする研究の審査件数は15件であり、全てが採択された。研究計画書に記載された使用動物は1,642匹（マウス1,642匹）であった。
- ・ Web申請画面に大学院生専用の指導教官チェック欄（学生が入力）を配置する。
- ・ 依頼文における必須項目を検討し、学内Webに掲載する。
- ・ 検診データ等を使う場合の申請書作成上の注意点を検討し、学内Webに掲載する。

## 1-15 情報ネットワーク委員会

構成員 佐伯 圭一郎、品川 佳満、井伊 暢美、河野 梢子、小玉 富端

本学の情報ネットワークの管理運用を継続的に実施した。また、情報セキュリティ対策の推進や教職員のICTスキル向上のための活動を継続した。特に今年度は、

- 1) 教職員用クライアントPCの更新計画の策定および更新作業（平成24年度末～平成25年4月）
  - 2) 情報セキュリティポリシーを改訂し、「情報セキュリティ基本方針に関する規程」として策定した。
  - 3) 学生および教職員用WebメールシステムのGmail環境への移行を完了した。
  - 4) サイボウズのクラウド化を行った。
  - 5) 限定的であったタブレット端末の学内無線LANへの接続を可とし、接続申請手続きの改訂を行った。
  - 6) 教員教育情報の更新を行い、学外Webに公開した。
- 等を行った。

今後も情報ネットワークの運用管理を安全で効率的なものとして遂行するが、特に平成25年度においては、

- ・ 情報セキュリティ対策基準の改訂
  - ・ ICT環境の維持管理に関わる総コストの検討
- を進める予定である。

## 1) ネットワークシステムWG

構成員 品川 佳満、小嶋 光明、甲斐 倫明、佐伯 圭一郎

サーバ群（WWW、メール、グループウェア、ファイル、計算機など）およびネットワーク全般（インターネット・イントラネット）の管理・運営を行った。また、サーバのクラウド化を検討し、Webメールシステムおよびグループウェアについてはクラウド移行を行った。

## 2) WindowsユーザーサポートWG

構成員 首藤 信通、佐伯 圭一郎、河野 梢子、井伊 暢美、小玉 富端

学内（教職員、情報処理教室、メディアセンター・教材作成室、看護研究交流センター、CALL用ノートPC）の管理およびユーザーサポートを行った。また、年度末から翌年度初頭にかけての教職員用クライアントPC更新作業において、進行管理および各種作業を行った。

## 3) MacユーザーサポートWG

構成員 小嶋 光明、小野 孝二

教職員用および学内に設置しているMac PCの管理（トラブル対応、システムやソフトウェアの更新）を行った。

## 1-17 研究科教育研究委員会

構成員 甲斐 倫明、藤内 美保、梅野 貴恵、吉村 匠平、江藤 真紀、神崎 正太、  
村嶋 幸代（オブザーバー）

大学院研究科の運営および計画に関する次の事項について審議・実施した。

- 1) 実践者養成、研究者養成のカリキュラムの見直しを行った。
- 2) 管理コースの名称を平成25年度からリカレントコースに変更すると共に、中堅保健師のリカレントコースとしてカリキュラムを編成した。
- 3) チラシの作成や医療機関の訪問などによる広報を行った。
- 4) 研究指導の強化を行うために、看護科学研究特論の必修化と研究指導について検討した。
- 5) 研究計画報告会、研究中間報告会、研究成果報告会の企画・運営を行った。
- 6) 広域看護学コースと助産学コースのカリキュラムの変更に伴い、保健師及び助産師の指定校申請を行い、承認を得た。

## 1-18 看護研究交流センター運営委員会

構成員 高野 政子、甲斐 倫明、戸田 太治、安部 眞佐子、草野 淳子、佐藤 弥生、  
宮添 春彦、村嶋 幸代（オブザーバー）

### 1. 地域貢献・地域交流事業

看護職者等を対象として研究支援・技術支援のための講師派遣：大分県看護協会の教育事業、大分県福祉保健部医療政策課の教育事業への協力として講師派遣を実施した。

### 2. 研究指導等

#### 1) 施設への講師派遣

県内7施設（大分県立病院、大分赤十字病院、大分市医師会立アルメイダ病院、国立病院機構大分医療センター、国立病院機構西別府病院、中津市民病院）に、基礎系と看護系の講師2名1組として研究支援を実施した。また、継続教育支援として大分健生病院に講師1名を派遣した。

#### 2) 統計・情報処理相談窓口の開設

今年度の相談窓口の件数は、4件であった。

#### 3) 研究成果報告会（アニュアルミーティングの公開）

全研究室からの20演題、大学院教育について3演題、大分県立病院看護部長の報告で、学外から3名の参加があった。

#### 4) 訪問看護認定看護師教育課程の開講

開講期間は平成24年9月3日から平成25年2月末の6か月間、受講生8名が全員修了した。教育課程は平成24年度をもって閉講する。

#### 5) 認定看護師教育課程公開講義の開催

日時は9月29日、講師は真田弘美先生（東京大学）、テーマは「在宅看護に必要な褥瘡看護の最前線」参加者は131名であった。

### 3. 国際協力・交流事業

韓国のChandang大学の学生40名と教員2名、ガイド2名の訪問を受け入れた。「日本の保健・医療・福祉システム」という講演と施設訪問2か所（健寿荘、別府リハビリテーションセンター）を行った。

### 4. 継続教育事業

#### 1) 卒業生への就業状況調査

新卒者に対する年3回（卒後3か月、6か月、12か月後）の就業状況調査を実施した。卒業生の把握と支援のための情報収集となっている。不達者を減らし調査に協力を得ることが課題である。

#### 2) ホームカミングデイ

今年は次年度からホームカミングデイ実施計画を検討した。日程は若葉祭実行委員会と検討し、5月12日午前中に、大分トリニータの青野浩志氏を講師依頼した。

・看護研究交流センター運営委員会はセンターの体制変更に伴い平成24年度で閉じた。

## 1) インターネットジャーナルWG

構成員 甲斐 倫明、平野 互、Gerald T. Shirley、定金 香里、首藤 信通、河野 梢子、  
秦 さと子、高波 利恵（6月まで）

広報チラシの作成、学会等各種イベントでの広報、「看護科学研究」第10巻第1号および第10巻第2号の審査・編集に関する実務を行った。

## 2) 認定看護コースWG

構成員 甲斐 倫明、高野 政子、佐藤 弥生、尽田 和、江藤 真紀、岡本 香代、  
河野 智子（外部委員）、木元 ちはる（外部委員）

訪問看護認定看護師教育課程に関して、研修生の入学、終了、カリキュラムの検討や教育課程の運営等に関して検討した。

### 1-19 衛生委員会

構成員 戸田 太治（1号委員）、角 匡幸（2号委員）、江藤 真紀（3号委員）、  
影山 隆之、佐藤 俊実（以上、4号委員）、津留 由美（オブザーバー）

本年度、2回の衛生委員会を開催し、苦情相談および健康相談等について再確認するとともに、定期健康診断結果の概要報告や職場巡視を行った。

定期健康診断の結果、生活習慣病の有所見者が多いことから、メタボリックのフォローアップのため、教職員からのアイデアを募集し、その提案を基に新規事業として『健康増進活動支援事業』を実施し、教職員48名が参加した。

また、職場巡視で指摘された地震等へ防災対策（避難経路確保や転倒防止対策）について、衛生委員会委員長名で全教職員に周知を図った。

### 1-20 評価委員会

構成員 市瀬 孝道、甲斐 倫明、戸田 太治、藤内 美保

教育、研究、社会貢献及び大学運営における評価のウエイトを変更（研究のウエイトを大きくする）することを教育研究審議会で承認の上、前年度と同じ評価方法に従って実施した。学長指名の教員評価委員に藤内教授が指名された。1月18日を評価書の提出期限として、教員評価結果を2月1日に学長報告し、最終評価結果を2月8日に各教員に配付した。

## 1-21 NPプロジェクト

構成員 村嶋 幸代、藤内 美保、江藤 真紀、小野 美喜、石田 佳代子、甲斐 倫明、  
佐伯 圭一郎、草野 淳子、桜井 礼子、佐藤 俊実、中林 博道、高野 政子、  
戸田 太治、福田 広美、松本 初美、江月 優子、宮内 信治

NPプロジェクトは平成24年度年度計画を掲げ、1) カリキュラム部会、2) 修了生フォローアップ部会、3) 研究・広報部会の3部会を設定した。また、厚労省のチーム医療推進会議などの国の情勢を常に把握しながら対応した。

### 1) カリキュラム部会：

(1) 実習関連：修士1年次生は5名、修士2年次生は7名で老年NPのみの学生であった。修士1年次生は今年から初めて修了生が活動する施設で修士1年次生で1週間の実習を実施した。年度末に初めての進級試験を実施した。修士2年次生は、実習前試験、14週間の実習、課題研究、修了試験とハードなスケジュールをこなした。学生の実習施設の交通費などの検討を行った

(2) 老年NPの実習施設の指導者との合同会議を実習前と実習終了後に2回実施した。1期生が活動報告をしたが、多くの実習指導者から非常にレベルが高いとの評価だった。

(3) 9月には韓国におけるNP研修を行った。

(4) 就職支援は、県内・県外の施設を訪問して院長・看護部長の理解が得られるように説明とお願いをした。

### 2) 修了生フォローアップ会議

(1) 修了生のフォローアップ会議を5回開催した。県外の修了生の参加もあった。それぞれの活動の近況報告、厚労省の業務調査試行事業の指定の進捗状況を報告したり、大学への要望などの意見を聞き、可能な限り対応できるようにした。

(2) 修了後2年目の特定看護師を対象に国立長寿医療研究センター（名古屋）で研修ができるようプログラムを組み、高齢者総合診療コース、認知症コースを1週間ずつ各2回実施した。

(3) プロトコールの活用方法について検討した。

(4) 来年度のフォローアップ会議がより有意義となるための会議内容と年間計画を検討した。

### 3) 研究・広報部会

(1) 以下の5つの研究を推進した。①老健施設における特定看護師の効果に関する研究、②医行為に関する研究、③修了後1年目のon the job trainingの研修に関する研究、④修了後2年目の継続研修に関する研究、⑤診療報酬に関する研究を実施し、学内教員を対象に3月に研究報告会を実施した。

(2) 広報については、雑誌、学会発表、日本看護科学学会での交流集会、講演会などで推進した。また本学のインターネットジャーナルに特定看護師の特集号を掲載するための準備を行った。

(3) 10月28日国際会議を実施した。講師はKwon先生、O' Connor先生の2名が各40分講義し、ディスカッションを行った。

### 4) 制度化のための活動

(1) 厚労省の「チーム医療を推進する検討会」に引き続き「チーム医療推進会議」が継続され、看護師業務実態調査に指定を受け実施した。

(2) 日本NP協議会を年4回開催し、制度化に向けた活動、また学生の質担保の教育のための協議を行った。

(3) 日本NP協議会は、本年度に修了するプライマリケア領域成人・老年、プライマリケア領域小児、クリティカルケア領域のNP資格認定試験を実施することとしNP資格認定試験ワーキンググループが準備を行い、3月10日に試験を東京で実施した。本学学生は6名受験し全員が合格した。この試験の質保証のため、NP資格認定試験評価委員会を開催した。

(4) 日本NP協議会を法人化するための計画、法人化に伴い本学を事務局とするよう準備を行った。

平成25年度は、看護研究交流センターにNP部門の専任教員が配属されたため、カリキュラムに関すること、研究に関することを重点的に活動する。

## 1-22 健康増進プロジェクト

構成員 稲垣 敦、桜井 礼子、赤星 琴美、河野 梢子、田中 佳子、岡元 愛、小田 千尋

### 【研究活動】

- ・ お元気しゃんしゃん体操の効果
- ・ 車椅子利用者の自律神経活動への森林浴の影響
- ・ 脳血管疾患患者の腔装具装着による歩行改善
- ・ レジスタンストレーニングによるボディイメージの変化
- ・ 楽器演奏のストレス低減効果
- ・ 大分県介護予防運動「めじろん元気アップ!!体操」の研究・開発
- ・ 介護予防運動機能向上標準プログラム（大分県版）の効果
- ・ 登山の健康効果

### 【事業・研究協力】

- ・ 介護予防二次予防事業（大分県高齢者福祉課）
- ・ 健康づくり事業（姫島村健康推進課、同診療所）
- ・ 森林セラピー事業（大分市産業振興課）
- ・ 森のセラピー事業（森ネットおおいた、県民の森セラピーツーリズム研究会）
- ・ スポーツ救護ナース及びスポーツ救護士の育成事業（大分県スポーツ学会、大分県看護協会）
- ・ 大分市社会福祉協議会介護予防事業
- ・ Smart Life Project（厚生労働省）
- ・ 医科歯科連携研究（湯布院厚生年金病院、西別府病院）
- ・ 大分空港施設改善プロジェクト（大分県、㈱大分空港サービス、日本文理大、芸短大ほか）
- ・ 温泉と運動プログラム研究会（大分県、別府市、別府大、別府リハビリテーションセンター、畑病院、別府中央病院、黒木記念病院ほか）
- ・ 健康づくりプログラム事業（大分トリニータ）
- ・ 大分市誕生100周年記念事業森林セラピートレイルランニング大会（大分市）

### 【地域貢献・社会貢献】

- ・ 転倒予防教室：野津原地区（上詰、新町、原村、竹ノ内）、植田地区（田島）
- ・ 高齢者世帯健康調査の支援、解析、報告（佐賀関こうざき校区社会福祉協議会）
- ・ 講演・研修会：スポーツ救護講習会（4/28、9/30）、大分市社会福祉協議会いきいき健康教室（5/18）、姫島村健康づくり事業研修会（6/21、7/12）、竹田市高齢者ふれあい交流会（6/23）、竹田市ヘルスサポーター養成講座（6/28）、大分丘の上病院sports day（7/26）、大分県運動機能向上プログラム機能強化研修会（8/31）、大分市社会福祉協議会介護予防事業講演会（11/8）、ソニーセミコンダクタ九州大分TECヘルスアップセミナー（11/22）、佐賀関こうざき校区高齢者世帯調査報告会（1/20）、大分県二次予防強化研修会（1/21）、杵築市健康と介護を考えるつどい（1/26）、大分県森のセラピー効果検証実験報告会（2/8）
- ・ 健康チェック等：本学若葉祭（5/12-13）、本学オープンキャンパス（7/22）、大分丘の上病院sports day（7/26）、大分わくわく館（9/17）、おおいたスポーツ広場（10/8）、富士見が丘団地自治会体育祭（10/21）、大分トリニータホームゲーム（11/4）、大分市野津原地区ななせの里まつり（11/4）、佐賀関こうざき校区社会福祉協議会健康福祉祭（1/20）、森林探検ウォーキング（3/31）
- ・ 研究指導（県立病院、湯布院厚生年金病院、西別府病院、別府リハビリテーションセンター）
- ・ 姫島村「ウォーキング・パンフレット」監修
- ・ 本学健康増進活動支援事業：教職員の身体活動量の測定（1/15～2/13）および解析
- ・ 大分市森林セラピーロードの代謝測定（10/30～2/15、計10回）および解析
- ・ 大分空港美術館の提案（9/21）および県との交渉開始（2/26～）
- ・ 森林セラピートレイルランニング大会実行委員（3/29～）および救護班（3/3）

### 【広報】

- ・ ケーブルテレビで講演を12回放映（姫島7/12～）
- ・ 若葉祭（5/12-13）、オープンキャンパス（7/22）でパネル展示
- ・ 日本体育学会第63回大会シンポジウムで研究成果を紹介（藤沢8/23）
- ・ 第71回日本公衆衛生学会総会の紹介ブースで活動を紹介（山口10/24-26）

- 本学のパンフレット及び広報誌「風のひろば」で活動を紹介
- 森林浴の効果（月刊セーノ7月号）
- 草間前学長の退任記念誌で活動を紹介

## 1-23 看護系全体会議

構成員 村嶋 幸代（学長）、市瀬 孝道（学部長）、甲斐 倫明（研究科長）、看護系教員全員

看護系全体会議は例年3回開催していたが、今年度は4月、5月、8月、12月を4回実施した。新たな取り組みとして、4月に実習に関するフリーディスカッションを行い、実習に関する現状の課題を明らかにした。特に、学生の成長段階に応じて、実習担当教員が関わりの程度を変化させ、徐々に見守っていく体制へ移行する方針を確認した。本指導体制を4段階実習の成人・老年看護学実習で試行し、来年度さらに進めていく計画である。

### 第1回看護系全体会議（4月）

村嶋新学長が4月着任し、大分県医療政策課、県内実習関連病院等に挨拶に回ったことが報告された。

5月以降に実施される実習に関する報告が行われた。2年生は平成23年度改正カリキュラムで初めての实習を実施する。4年次の在宅看護学実習Ⅱは平成21年度改正カリキュラムで初めての実習となる。老年看護学実習Ⅰ・在宅看護学実習Ⅰは平成21年度改正カリキュラムで評価が良かったことから、平成23年度改正カリキュラムでも踏襲する。大学院の実習では、老年NPコース 修士1年次生においてNP修了生の施設で実施する新たな実習を1週間加え、15単位の実習とした。広域看護学コースでは、学生3名が地域生活支援実習、地域マネジメント実習を実施予定である。

助産コースもNICU課題探究セミナー・妊娠期課題探究セミナー・継続事例などが予定されている。

実習関連ワーキンググループから、看護技術修得プログラムは平成23年度改正カリキュラムで初めて看護アセスメント学実習の前の12月に第1段階技術チェックを新たに加え、これまで3段階だったものを4段階の技術チェックとした。また、実践能力評価のための看護技術習得確認シート作成を今年度中に行う

看護学実習・実習指導体制のフリーディスカッションでは、実習施設の指導の特徴など指導体制の改善に向けて全教員にアンケートを実施し、結果を5月の看護系全体会議で報告し方向性を決めることとした。

### 第2回看護系全体会議（5月）

学長より、教員面談の結果、実習指導体制見直しに関する意見が多く寄せられたこと、意見は前向きなもの、実習指導の上での大切なことなどが含まれていたことが報告された。実習に関する意見の概要をまとめ、実習施設の実習運営委員会で以下のことを依頼することが決められた。1) 県立病院の運営委員会で、今回の会議の内容を基に、実習体制の検討を重ねたいという申し入れを行う。県病からの自主的な意見を出してもらいながら徐々にすすめ、4段階実習開始までを目途とする。2) 自律的な学生を育てる具体的な実習指導方法については、実習指導者・教員交流会で話し合っていく。

### 第3回看護系全体会議（8月）

学長からの発言で、実習に関してみんなで考えようという気運が高まり、学生の学びを最優先として患者のことも考え、教員の時間や疲労感軽減、効力感をアップするようという効果的な方向に進んでいるとの報告があった。5～7月に行われた老年Ⅰ・在宅Ⅰ看護学実習（新カリ3年）、地域看護学実習（新カリ4年生）、初期体験実習（新カリ1年生）が無事に終了したことが報告された。また9月から実施する専門看護学実習について計画が述べられた。成人・老年看護学実習は、指導体制の試行を行うため、担当教員・副担当教員制を導入すること、学生に多重課題（複数の患者をみる）を課すことなどが変更点である。母性看護学実習では、アルメイダ病院を実習施設として追加する旨、報告があった。

実習関連ワーキンググループより、総合看護学実習終了の報告、看護技術修得プログラム、看護技術習得確認シートの進捗状況などが報告された。

本学と県立病院、大分赤十字病院、アルメイダ病院との実習指導者・教員交流会の報告があり、充実した成果が得られた。



#### 第4回看護系全体会議（12月）

学長から、長期間の実習も無事に終える事が出来た。望ましい体制に向けて少しずつ実習を動かしてきている。いろんな教員が意見を出し合い、それを現場に生かすような文化を築いていきたいと報告があった。

9月～12月までの実習報告があった。成人・老年Ⅱ看護学実習は、「原則」常駐という指導体制および患者を複数担当するなどの多重課題を導入した。大部分は達成感があったようだ。小児・母性・精神看護学実習はほぼ例年通りで、無事に実習が終了した。大学院のNPコース、助産コース、広域看護学コースの実習報告を行った。

実習関連WGより、看護技術修得プログラムの1stステップは初めての取り組みであるが、学生は熱心に取り組んでいる。来年度の2ndステップの事例は成人・老年の他、小児や母性も取り入れていく方針が示された。新新カリ看護技術確認シートは作成中で、AA（すべての学生が一人でできる）を加え、177項目のうち、46項目がAAに該当する。

平成25年度教員配置の方針の説明をした。20週ルールを見直し担当教員の専門領域を生かしながら、領域の枠を超えて実習指導する。学生の学習到達度を基本に考え、学生指導の質を落とさないよう教員配置を考慮することが確認された。

今年度試行で行った実習指導体制の評価を生かし、さらなる改善を図る。実習カリキュラムの見直しについて、多くの教員からの意見を吸い上げ反映させる。

## 2 学内行事の概要

### 2-1 学年暦

#### 前期

#### 4月

6	入学式
9	全学オリエンテーション
9,18	健康診断
10,11	新入生オリエンテーション
10	2～4年次生授業開始
12～20	前期履修登録
12	1年次生授業開始
18	交通安全講座(自動車)
22	全学スポーツ交流会

#### 5月

7～6/15	地域看護学実習, 老年看護学実習Ⅱ(4年次生)
9	キャンパスクリーンデー
12,13	若葉祭
19	交通安全講座(自動二輪、原付)
28～6/1	老年看護学実習Ⅰ(3年次生)

#### 6月

4～8	在宅看護学実習Ⅰ(3年次生)
11	前期後半授業開始
13	学生大会
19	開学記念日
18～29	総合実習(4年次生)
18～8/10	助産学実習・前半(4年次生選択)

#### 7月

10～18	初期体験実習(1年次生)
22	オープンキャンパス
23	夏期休業開始

#### 8月

27～31	助産学実習・後半(4年次生選択)
25	大学院入学試験

#### 9月

5	夏期休業終了
7～	成人, 老年Ⅱ, 小児, 母性, 精神看護学実習 (3年次生)
28	前期授業終了

#### 後期

#### 10月

1	後期授業開始
1～12	後期履修登録
27	看護国際フォーラム

#### 11月

23	特別選抜試験(推薦・社会人)
～30	成人, 老年Ⅱ, 小児, 母性, 精神看護学実習(3 年次生)
30	卒業研究要旨提出締切(4年次生)

#### 12月

3	後期後半授業開始
7 正午	卒業研究要旨提出締切(4年次生)
10,11	卒業研究発表会
24	冬期休業開始

#### 1月

7	冬期休業終了
11～29	基礎看護学実習(1年次生)
18	大学入試センター試験準備(2,3,4年次生休講)
19,20	大学入試センター試験

#### 2月

4～20	看護アセスメント学実習(2年次生)
下旬	看護師・保健師および助産師国家試験
25	一般選抜試験(前期)および特別 選抜試験(私費外国人留学生)(休講)
28	後期授業終了
28	進級試験(2年次生)

#### 3月

1	春期休業開始
12	一般選抜試験(後期)
18	卒業式

## 2-2 オープンキャンパス

平成24年度の開催は、夏休み中の7月22日（日）に実施し、参加者は289名で、本学について大いにアピールできた。講堂での説明会・体験イベントなど教職員全員と学生の協力者として取り組んだ。食堂も営業するようにし、保護者等来学者の利用の便宜を図った。教育・研究の展示はパネル展示物を一部、新規作成した。学生自治会によるTAKIOソーランや学生の話が聴ける合格体験発表や在学生からのメッセージ、教員による模擬授業などを企画した。在学生が相談コーナーや実習室への誘導を行うことで、高校生や保護者には在学生との交流の機会ともなり、入学後のイメージを深めることができたと思われる。

## 2-3 公開講座

「ストレス社会を生きる～健康に生きる10のヒント」と題した有料公開講座を7月20日（ストレスとうつ:影山教授）、7月27日（思春期とストレス:関根准教授）、8月3日（糖尿病とともに生きる:松本講師）、8月10日（家族の介護ストレス:赤星講師）の計4回、学内で開催した。参加者は延べ86名で、うち4名が全て出席し、修了証を授与した。事前にパンフレットを3,000部作成し、地域への広報に加えて、マスコミ（大分合同新聞・月間ぷらざ・シティ情報おおいた）や行政機関等、講座内容に関連のある団体等への参加を呼びかけた。

## 2-4 第14回看護国際フォーラム

大分県看護協会と共催である看護国際フォーラムを本年は「看とりの看護」をテーマに、平成24年10月27日（土）に別府ビーコンプラザ国際会議場で開催した。オーストラリアから1名、韓国から1名、国内から1名の講師を招聘した。参加者は297名と盛況であった。

## 2-5 第14回NP国際会議

平成24年10月28日（日）に、本学にて、第14回国際会議をNPプロジェクトと協力して開催した。オーストラリアから1名および韓国から1名の講師を招聘した。

## 2-6 第15回大分看護科学大学・ソウル大学研究交流会

今年度は、平成25年3月19日（火）に本学23講義室で第15回大分県立看護科学大学・ソウル大学研究交流会を開催した。姉妹校韓国ソウル国立大学校看護大学の講師3名および本学教員2名の計5名が講演を行い、参加者と共に活発に意見交換を行った。

## 2-7 姉妹校学生交流

ソウル国立大学校派遣学生受け入れと交流：

ソウル国立大学校看護大学から大学院生2名、学部生5名、教員1名（7月22日～29日までの8日間）を本学に受け入れ、日本の医療・保健・福祉制度、看護について理解を深めた。本学では、学生および教員がサポートグループとして交流を支援した。

本学の学部生および大学院生の派遣：

大学院生2名、学部生4名と同行教員2名を短期派遣（8月19日～26日までの8日間）としてソウル国立大学校看護大学に派遣した。韓国の医療・保健・福祉制度、看護について視察等を行い、理解を深めた。報告はWebに掲載した。

## 2-8 若葉祭（大学祭）

5月12日、13日に開催された若葉祭にて教員イベントの募集や調整をした。参加者は2日間で約1200名を超えており、大学の現在の姿を伝える場としては有用であった。実習室の廊下に掲示したパネルは、大学概要、カリキュラム、大学院概要、研究室紹介などで、変更が生じているものは更新した。教員イベントを学生とともに実施することで、学生と地域の人々とのふれあいの場ともなっている。実習室・実験室、カレッジホールにて、高齢者、妊婦などの疑似体験、小児、成人対象の救急法の体験、放射線の解説、身体組成の解説などによって看護大学の教育内容や設備の紹介を行った。その他にアロマハンドマッサージのケア技術の実際や、猫車などで来場者に親しみを持ってもらいイベントなど地域住民が参加して楽しめるプログラムを展開した。教員の研究紹介では、4人のポスターの掲示を行い、7月のオープンキャンパスの案内チラシ、今年度版大学案内パンフレットを自由配布し、一般の方々や進学予定者にも大学の内容が伝わるように配慮した。

## 2-9 地域ふれあい祭

平成24年度の地域ふれあい祭りは、大分市主催の大分七夕祭りに参加する形で、県民との交流と本学の広報を目的として参加した。当日の参加者は教職員と学生と合わせて47名であった。学生および教職員は事前に踊りの先生の下で練習を行い、祭当日は駅前通りで、チキリンばやし、サンバチキリン、鶴崎踊りを披露した。また、みどりの王国で開催された「ななせの里まつり」11/4

（日）に参加し、300人近い方の血圧測定、体成分分析、栄養評価などの健康指導・健康チェックを実施した。

## 2-10 アニュアル・ミーティング

本年度のアニュアルミーティングは、3月21日の1日間で実施した。基礎人間科学10題、看護学13題の合計23演題と大分県立病院副院長兼看護部長の報告を外部からして頂いた。今年の特徴は、大学院実践者教育の広域看護学、助産学、リカレント各コースについても発表し、教員間の情報共有する機会とした。

### 3 教育活動

#### 3-1 平成25年度入学者選抜状況

##### 1) 概要

選抜の区分及び募集人員、入学者選抜試験の概略は次表のとおりである。

##### 選抜の区分及び募集人員

学部	学科	入学定員	募集人員					
			一般入試		特別入試			
			前期日程	後期日程	推薦		社会人	私費外国人留学生
県内	県外							
看護学部	看護学科	80人	35人	10人	35人	注1) 5人以内	注1) 若干名	注2) 若干名

注1) 推薦県外の「5人以内」及び社会人の募集人員「5人以内」は推薦の(県内)35人に含める。

注2) 私費外国人留学生の募集人員「若干名」は前期日程の35人に含める。

##### 入学者選抜試験の概略

(単位：人、倍、%)

区分		志願者	受験者	合格者	競争率	入学者			
						計	県内(率)	男(率)	
特別	推薦	県内	81	81	30	2.7	30	30(100.0)	3(10.0)
		県外	21	21	5	4.2	5	0(0.0)	0(0.0)
	社会人	2	2	0	0.0	0	0(0.0)	0(0.0)	
	計	104	104	35	3.0	35	30(85.7)	3(8.6)	
一般	前期	162	151	42	3.6	35	16(45.7)	3(8.6)	
	後期	141	76	12	6.3	9	3(33.3)	1(11.1)	
	計	303	227	54	4.2	44	19(43.2)	4(9.1)	
合計		407	331	89	3.7	79	49(62.0)	7(8.9)	

##### 試験教科等

区分		教科	試験期日	出願期間
特別	推薦	総合問題、面接	平成24年 11月23日(金)	平成24年 11月1日(木)～11月7日(水)
	社会人			
一般	前期	総合問題、面接	平成25年 2月25日(月)	平成25年 1月28日(月)～2月6日(水)
	後期	総合問題、面接	平成25年 3月12日(火)	

##### 2) 特別入学試験

###### ① 推薦入試

大分県内外の高等学校卒業見込者の中から、各高等学校長が推薦した生徒を対象に、「総合問題」と「面接」により実施した。

## ② 社会人入試

社会人としての実体験から看護学への強いモチベーションを持った学生を確保することにより、教育・研究への活性化を図るため、また、生涯学習の要請に対応するため、社会人入試を実施した。

年齢が満 24 歳以上で、社会人の経験を 3 年以上有し、大学入学資格を有する者を対象に、「総合問題」と「面接」により実施した。

## 3) 一般入学試験

平成 25 年度大学入試センター試験で本学が指定する教科・科目（下表参照）を受験した者について、分離分割方式（前期日程、後期日程）により試験を実施した。なお、本学で実施する試験は、前期日程、後期日程ともに「総合問題」と「面接」により実施した。

日 程	教科名	科 目 名		教科・科目数
前 期 日 程	国 語	『国語』（近代以降の文章）		4 教科 6 科目
	数 学	『数学Ⅰ・数学A』、『数学Ⅱ・数学B』		
	理 科	「物理Ⅰ」、「化学Ⅰ」、「生物Ⅰ」から 2 科目を選択		
	外国語	『英語』（リスニングを含む）		
後 期 日 程	国 語	『国語』（近代以降の文章）		4 教科 4 科目
	地理歴史 公 民	「世界史A」、「世界史B」、「日本史A」、 「日本史B」、「地理A」、「地理B」、 「現代社会」、「倫理」、「政治・経済」『倫理、政治・ 経済』から 1 科目を選択		
	数 学	『数学Ⅰ・数学A』、『数学Ⅱ』、 『数学Ⅱ・数学B』から 1 科目を選択		
	理 科	「物理Ⅰ」、「化学Ⅰ」、「生物Ⅰ」 から 1 科目を選択		
	外国語	『英語』（リスニングを含む）		

注 1) 「国語」については、「近代以降の文章」の得点のみを合否判定に用います。

注 2) 「地理歴史・公民」、「数学」及び「理科」において、複数科目を受験した場合は、高得点の科目をその教科の得点とし、合否判定に用います。なお、後期日程については、「国語」、「地理歴史・公民」、「数学」及び、「理科」の全ての教科を受験した場合には、高得点の上位 3 教科を合否判定に用います。

注 3) 前年度大学入試センター試験の結果は利用できません。

注 4) 上の指定科目をすべて受験していなければ、本学が実施する個別試験を受けられません。

### 3-2 平成25年度大学院看護学研究科博士課程（前期）入学試験状況

#### 1) 看護学専攻

##### 概要

看護職の指導的役割を担う人材を育成し、地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、大学卒業者等を対象に、「総合問題」、「専門問題」（実践者養成のみ）、「実技試験」（実践者養成助産学のみ）及び「面接」により実施した。

##### 募集人員

研究科名	課程名	専攻名	専攻領域		募集人員
看護学研究科	博士課程（前期）	看護学専攻	研究者養成		3名
			実践者養成	NPコース	5名
				管理コース	2名
				広域看護学コース	5名
				助産学コース	10名

##### 試験の概略

（単位：人、倍、％）

区分	志願者	受験者	合格者	競争率	入学者		
					計	県内（率）	男（率）
修士課程	21	20	18	1.1	16	11( 69.0)	3( 19.0)

##### 試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 専門問題 実技試験 面接	平成24年 8月25日（土）	平成24年 8月1日（水）～8月8日（水）

#### 二次募集

##### 概要

8月に実施した看護学専攻実践者養成（広域看護学・助産学コース）の試験結果、合格者が募集人員に満たなかったため、再度募集を行った。

##### 募集人員

研究科名	課程名	専攻名	専攻領域		募集人員
看護学研究科	博士課程（前期）	看護学専攻	実践者養成	NPコース	若干名
				広域看護学コース	4名
				助産学コース	7名

## 試験の概略

(単位：人、倍、%)

区分	志願者	受験者	合格者	競争率	入 学 者		
					計	県内(率)	男(率)
修士課程	4	4	2	2.0	2	2(100.0)	0(0.0)

## 試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 専門問題 面接	平成25年 2月25日(月)	平成25年 1月21日(月)～2月6日(水)

## 2) 健康科学専攻

### 概要

看護の基礎科学の教育・研究に携わることのできる人材(看護職及び非看護職)を育成すること、および医療・保健・福祉の領域で看護学を十分に理解し、チーム医療を支える非看護職の人材を育成することを目的として、大学卒業者等を対象に募集したが、出願者がなく試験は実施しなかった。

### 募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程(前期)	健康科学専攻	2名

## 試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	平成24年 8月25日(土)	平成24年 8月1日(水)～8月8日(水)

## 二次募集

### 概要

8月に実施した健康科学専攻の試験結果、合格者が募集人員に満たなかったため、再度募集を行ったが出願者がなく試験は実施しなかった。

### 募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程(前期)	健康科学専攻	2名



### 試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	平成 25 年 2 月 25 日 (月)	平成 25 年 1 月 21 日 (月) ~ 2 月 6 日 (水)

### 3-3 平成 25 年度大学院看護学研究科博士課程（後期）入学試験状況

#### 1) 看護学専攻

##### 概要

より高度な専門性を有し、看護職の指導的役割を担う人材を育成し、もって地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、修士の学位を有する者等を対象に、「総合問題」と「面接」により実施した。

##### 募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻	2名

##### 試験の概略

(単位：人、倍、%)

区分	志願者	受験者	合格者	競争率	入学者		
					計	県内(率)	男(率)
博士課程	4	4	3	1.3	3	2( 66.7)	0( 00.0)

### 試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	平成 24 年 8 月 25 日 (土)	平成 24 年 8 月 1 日 (水) ~ 8 月 8 日 (水)

#### 2) 健康科学専攻

##### 概要

看護の基礎科学の教育・研究に携わることのできる人材(看護職及び非看護職)を育成すること、および医療・保健・福祉の領域で看護学を十分に理解し、チーム医療を支える非看護職の人材を育成することを目的として、修士の学位を有する者等を対象に、募集したが、出願者がなく試験は実施しなかった。

## 募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	健康科学専攻	2名

## 試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	平成24年 8月25日（土）	平成24年 8月1日（水）～8月8日（水）

## 二次募集

### 概要

8月に実施した健康科学専攻の試験結果、合格者が募集人員に満たなかったため再度募集を行った。

## 募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	健康科学専攻	2名

## 試験の概略

（単位：人、倍、％）

区分	志願者	受験者	合格者	競争率	入学者		
					計	県内（率）	男（率）
博士課程	3	3	1	3.0	1	0( 00.0)	1( 100.0)

## 試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	平成25年 1月25日（月）	平成25年 1月21日（月）～2月6日（水）

## 進学相談

### 概要

本学に進学を希望する高校生等に本学の入試情報や受験についてPRするため、看護協会や業者主催の進学相談会に参加し、県内18カ所に教員及び職員を派遣した。全体の来場者は、7,806人であり、本学の説明を受けた学生及び保護者は、258人であった。

また、高大連携の観点から、県内外の高校等の進路指導担当教員を招いて学内で進学説明会を開催した。来場者は26人であった。

この他、若葉祭、オープンキャンパス等の会場に進学相談コーナーを開設した。

3-4 在学生の状況（平成24年4月1日現在）

学生総数 381名（学部生336名、院生45名）

（単位：人）

	学 生 数				
	計	県 内	県 外	男	女
1 年 次 生	91	59	32	13	78
2 年 次 生	87	51	36	10	77
3 年 次 生	77	50	27	12	65
（うち編入学生）	(2)	(2)			(2)
4 年 次 生	81	43	38	8	73
（うち編入学生）	(2)	(2)			(2)
計	<b>336</b>	<b>203</b>	<b>133</b>	<b>43</b>	<b>293</b>
割 合 (%)	100.0	60.4	39.6	12.8	87.2
大学院博士前期（1年次生）	15	10	5	4	11
大学院博士前期（2年次生）	14	7	7	3	11
大学院博士後期（1年次生）	5	4	1	1	4
大学院博士後期（2年次生）	2	2		1	1
大学院博士後期（3年次生）	9	6	3		9
計	<b>45</b>	<b>29</b>	<b>16</b>	<b>9</b>	<b>36</b>
合 計	<b>381</b>	<b>232</b>	<b>149</b>	<b>52</b>	<b>329</b>

### 3-5 教育活動

#### 3-5-1 生体科学研究室

##### 1 教育方針

優秀な看護職を育てるという本学の第一の使命に沿って、本研究室では生体（人体）の構造やしぐみ、はたらきを十分に理解した看護職を育てるということを教育目標に掲げている。

##### 2 教育活動の現状と課題

現状においては、学部1年次生ならびに大学院生に対しての生体科学（構造、生理、代謝）についての教育効果は十分であると考えます。今後の課題としては、学部1年次生の学習習熟度をさらに向上させることである。

##### 3 科目の教育活動

###### 1) 生体構造論

1年次前期

中林 博道、岩崎 香子

学部1年次生に対して生体（人体）の構造（解剖学）についての講義を行った。

###### 2) 生体機能論

1年次前期

中林 博道、岩崎 香子

学部1年次生に対して生体（人体）のはたらき（機能）についての講義を行った。

###### 3) 生体代謝論

1年次後期

安部 眞佐子

生化学と栄養学の教科書を用いて講義した。生体分子の種類、性質、機能について講義した。生体での反応がイメージできるように、低分子から高分子へと話しを進め、酵素、ビタミン、ミネラル、生理活性物質について解説を加えた。クエン酸回路、電子伝達系、酸化リン酸化によるエネルギー代謝を生化学と、マクロな視点から栄養学で講義した。栄養の中では、対象者に対して食事指導ができるように、食事バランスガイドや食品についての内容も加えている。

#### 4) 生体科学特論

4年次前期

安部 眞佐子

疾病時とライフステージでの栄養学をとりあげ、食事療法について代謝メカニズムからの解説を加えた。栄養補給ルート、循環器疾患の栄養、消化器疾患の栄養、代謝性疾患の栄養、人疾患の栄養、妊娠期と授乳期の栄養について講義した。

#### 5) 健康科学実験 I 組織学 1

中林 博道

学部2年次生に対して人体の代表的な8つの組織（肺、胃、肝臓、膵臓、甲状腺、腎臓、精巣、卵巣）について概説した上で実際に顕微鏡下に組織を観察しスケッチし、人体の組織についての学生の理解を深めた。

#### 6) 健康科学実験 II 心電図

松本 佳那子、安部 眞佐子、岩崎 香子

心電図が意味する生体情報について解説を行い、正常波形の読み取りおよび異常波形との区別を講義した。また学生全員が個人の12誘導心電図を測定し、電気軸の測定を行った。

### 4 卒業研究

1. 悪性グリオーマ細胞に対するNF- $\kappa$ B inhibitor IV の抗腫瘍効果について
2. 悪性グリオーマ細胞に対するApigenin の抗腫瘍効果について
3. 保育所の食物アレルギー児への対応の実態
4. 妊婦の葉酸摂取の実態について
5. 骨芽細胞の副甲状腺ホルモン反応性に対するフランジカルボン酸の影響
6. カルボキシメチルリジンがもたらす骨芽細胞障害に関する検討

### 3-5-2 生体反応学研究室

#### 1 教育方針

生体反応学研究室では病理学、薬理学、免疫微生物学といった看護の専門基礎分野の科目を看護の視点から理解させることを目標として教育を行っている。外的・内的要因に対する生体反応、これによって発症する様々な疾病、その発生メカニズム、薬の作用、病原微生物による生体反応を科学的に理解することによって、体の変調や病気の成り立ち、回復過程を科学的に捉え、これらから得た知識が1年次～4年次に行われる看護実習や将来の看護実践に結びつけられるように看護の基盤教育を行っている。

## 2 教育活動の現状と課題

本年度は平成21年度カリキュラム（病態特論：4年次生）と平成23年度カリキュラム（生体反応学概論、生体反応学各論、微生物免疫論：1年次生、生体薬物反応論：2年次生）の中で講義を進めている。看護学を学ぶ学生はこれらの専門基礎分野の科目の理解度が低く、2～4年次での実習に結びつけられていない場合が多い。また2年次で行なっている進級試験でもこれらの科目の正答率は低い。それ故に、看護実践を行ううえで、様々な外的、内的要因によって起こる疾病・病態や薬理作用を十分に理解しておくことの重要性を認識させ、より看護の視点からこれらの科目を理解できるように講義を進めることが重要である。教育上の工夫として、生体薬物反応論では基礎的な薬物の作用から臨床に用いられている薬物について幅広く講義を行なっている。しかしながら現状では3年、4年になっても生体薬物反応論の単位が取得できない学生がいる。マンツーマン方式で学生が理解できるまで教育、再試験を行っている。生体反応学各論では、看護専門基礎の看護疾病病態論の講義に繋げるために、系統別疾患を病理学総論の病気の基本事項と結びつけて理解させるのに努めている。

## 3 科目の教育活動

### 1) 生体反応学概論

1年次後期

市瀬 孝道

病理学総論として、病気の本体や成り立ち、修復過程が理解できるように、以下に示す病気の基本となる病変について具体的な疾患名や臨床症状等を挙げながら講義を進めた。学生が各種疾病の成り立ちや病態を理解し易い内容の易しい教科書を選択し、更に教科書を分かりやすく整理したプリント配布して講義を進めた。講義内容は以下に示すとおりである。退行性病変、進行性病変、代謝障害、循環障害、炎症、免疫、感染症、腫瘍、先天異常、小児・老人性疾患。

### 2) 生体反応学各論

1年次後期

市瀬 孝道

病理学各論として、系統別に発生する疾病（病理学各論）についての講義を行った。病理学総論から各論へと疾病の基本から系統別疾患の病態を十分に理解させるのに努めた。講義内容は以下に示すとおりである。消化器疾患、循環器疾患、呼吸器疾患、泌尿器疾患、生殖器疾患、内分泌疾患、血液疾患、脳・神経疾患、運動器、感覚器。

### 3) 微生物免疫論

1年次後期

吉田 成一、西園 晃

微生物と生体、環境との関わり、特に微生物感染症について、および病原微生物に対する生体の防御反応について、理解させることを主要な目標として、以下の項目について講義した。微生物の特徴、消毒・滅菌法、感染症、各種感染症とその原因、免疫学、アレルギー、自己免疫疾患、腫瘍と免疫。講義プリントを配布することで学生の学習がしやすくなるよう努めた。

講義内容は、大きく変化しなかったが、学生の理解度が想定より高くならず、全体的に成績不良の学生が多かった。また、過年度単位未拾得者で本年度、本講義を再受験科目として履修した学生に関しては、昨年度と同程度の成績の学生が多く、今年度も単位修得ができない学生が生じ、当該学生はシラバスの通り、上級学年への進級ができないことになった。教員及び学生が本科目は進級に必須の科目であることを再度理解し、今後より一層、学習効果を高める方策が必要となる。

## 5) 生体薬物反応論

2年次前期

吉田 成一

疾病の薬物治療に用いる医薬品の作用原理に主眼を置き、薬物を投与した際の生体反応（主作用及び副作用）を中心に講義した。特に総論を始め、薬理作用の基礎知識の正しい理解が可能なような講義を行った。教科書を2冊指定するとともに、臨床での話題を織り交ぜたが、2年次生が医薬品に関する事柄を実習で体験していないため、効果は不十分であった。

そこで、次年度より、本科目の基礎的な内容を2年次に行い、より専門的な内容を3年次に行うよう科目構成を変えることとした。

## 6) 病態特論

4年次前期後半

市瀬 孝道

本講義では臓器の肉眼観察や、組織の顕微鏡観察をすることによって、より深く病気を理解させることを目的として行っている。例年どおり、県立病院の臨床検査部において、1回目、2回目の講義では炎症や代謝障害を起した臓器、種々の臓器に発生した良性腫瘍や悪性腫瘍の肉眼観察や病理組織標本の観察を行い、実際に眼下に起きている病態を理解させた。3回目の講義では県立病院病理部ト部先生によるスライドによるプレゼンテーションも取入れた。

## 7) 健康科学実験 III 血液検査

定金 香里

貧血・感染症に関わる血液検査のうち、ヘマトクリット値の測定、CRP検査、赤・白血球数測定、末梢血血球・組織球の形態観察を行った。実習では、ラット静脈血を検体としたが、検査方法はヒトの血液検査に準じて行い、それぞれマイクロヘマトクリット法、CRP定性測定法、視算法（マイクロピペット法による）、ディフクイック染色法を用いた。学生各自が標本作製を行ったのち、貧血かどうか診断した。また診断基準に関する考察や計算演習も行った。

## 8) 健康科学実験 IV 基礎微生物学実験

吉田 成一

環境中に細菌が存在することを確認させる目的でヒトの表皮、日用品に常在する細菌を培養し、観察した。さらに手洗いによる指先に付着している細菌数の変化を測定した。また、温度によって細菌の増殖に差があることを視覚的に認識した。細菌が抗生物質により発育が阻止されることを認識させる目的で薬剤感受性試験を行った。各種病原微生物の抗生物質に対する感受性を測定し、臨床使用時での使い分けについて考察した。

## 9) 健康科学実験 V ラットの解剖

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

ヒトの構造を知る一手段としてラットの解剖を行った。例年と同様にラットを開胸、開腹後、系統立てて臓器・器官を観察し、臓器の相対的位置や相互の関連性について理解させた。また、各臓器を摘出して、色、大きさ、重さ等を測定、スケッチすると共に生きた臓器を実際に触れてその形状や感触を理解させた。スムーズに解剖が進行する工夫として、先にデモンストレーションを行いながら十分に方法や内容を説明した。また、心脈管系の図を白板に詳しく描き、実物と比較しながら理解させた。

## 4 卒業研究

1. ベンツ (a) ピレン低用量経口曝露によるアトピー性皮膚炎増悪作用
2. アトピー性皮膚炎を増悪する手指消毒薬、増悪しない消毒薬の作用機序
3. 黄砂に付着した大気汚染物質由来タール成分の気管支喘息増悪作用
4. 黄砂に付着した大気汚染物質由来タール成分のスギ花粉症増悪作用
5. 黄砂に付着した有機化合物による雄性生殖機能への影響
6. 運動精子を用いた黄砂およびその構成成分の精子性状に与える影響

### 3-5-3 健康運動学研究室

#### 1 教育方針

- ① 体を動かすことの楽しさを体感する
- ② 健康・体力を増進するための運動量、運動強度を確保する
- ③ 人間が機能を正常に維持するには運動が必要であることを知り、個人、社会、人類にとって運動が重要であることを理解する
- ④ 自分に合った運動を見つける
- ⑤ 運動習慣を身につける
- ⑥ 科学自体や科学的なものの見方や考え方などを知る
- ⑦ ボランティアを通して様々なことに気づき、考える

#### 2 教育活動の現状と課題

授業では、看護系の授業や実習を視野に入れて、学生のレディネスにも配慮しながら、授業を構成してきた。今後も、自己から他者へ、過去から未来へ、体験から指導へ、経験から理論へ、個から集団へ、基礎から専門へという流れを考慮して、体験と科学的知見に基づいた教育を進めることを意識している。

一人暮らしになると、食事、運動、休養等がおろそかになりがちである。特に、高校時代と比較すると体を動かす授業も激減するので、体力の低下、体脂肪率の増加、ストレス、自律神経活動の低下やアンバランス等も心配される。このような点を考慮して、授業では実習を入れて体を動かす機会を増やす努力をしている。今年は健康増進プロジェクトを介しても、学生の健康増進活動を進めて行く予定である。

健康運動ボランティア演習も2年目を迎え、多くの教職員の支援の協力で22のイベント（昨年は12）に学生がボランティアとして参加した。当日の学生の様子やレポートから有意義な体験が出来ていることが伺える。この授業では、学生が複数のボランティア体験から何かを見つけ出す、いわゆる発見学習であり、帰納的プロセスを重視しているのが特徴である。これは科学的思考の発達にもつながる。ボランティアは休日等に行うため、あまり学生の負担にならないように注意が必要である。



### 3 科目の教育活動

#### 1) 身体運動科学

2年次

稲垣 敦

はじめに科学についての授業を行い、人間固有ともいえる二足歩行や人間にはできなかった飛行について考えた。また、生物の進化に伴う形態や機能の変化、加齢や不活動による体力の低下などに関する科学的根拠に基づいて、体力や運動の重要性や健康との関連性を講義した。さらに、骨密度、身体部位別の体脂肪率・筋量等の測定実習も行った。

#### 2) 健康運動学

2年次後期前半

稲垣 敦

生物の進化に伴う形態や機能の変化、加齢や不活動による体力の低下などに関する科学的根拠に基づいて、体力や運動の重要性や健康との関連性を講義し、トレーニング理論と具体的な運動の仕方についても解説した。また、これらに関連して、運動療法について講義した。さらに、身体活動量や科学的根拠に基づくストレッチング等の測定実習やシングルマスター試験も行った。

#### 3) 健康運動

1年次後期

稲垣 敦、甲斐 倫明、大津留 麗理

運動の楽しさや健康の素晴らしさを体感するため、多くのレクリエーション、ニュースポーツ、テニス、バドミントンに加え、今年から学外講師によるヒップホップ系ダンスを取り入れた。運動量や運動強度の確保にも配慮した。また、福祉レクリエーション関係のビデオを視聴し、社会や個人におけるレクリエーションの重要性、看護や介護における必要性や可能性について考えた。

#### 4) 健康運動ボランティア演習

1年次前期

稲垣 敦、大賀 淳子

はじめにグループに分かれてTAKIOソーラン節の踊りを練習し、グループ毎に発表した。教員から学生に相応しいボランティアイベントを募集した後、学生に22のイベントを提示して希望調査を行って調整し、各学生が3つのボランティアを体験し、ボランティア参加毎にレポートを作成した。

#### 5) 運動療法特論

3年次後期後半

稲垣 敦

はじめに健常者の健康運動や厚生労働省の運動の指針2006等を解説した。概論では、運動処方の流れや心電図についても講義し、各論では広く運動療法について疾患・障害別に講義した。実習としてはシングルマスター試験を行った。

## 6) 運動指導特論

4年次前期前半

稲垣 敦、大賀 淳子、大津留 麗理

精神障害者の運動表現療法、子供のレクリエーション、介護予防運動、肩こり・腰痛体操、ネイチャーゲーム、ヨガ等を体験し、指導法について解説した。

## 7) 健康科学実験 IX 呼吸循環器系持久力の測定

稲垣 敦

自転車エルゴメーターを用いた最大下運動負荷時に心拍数と運動負荷を測定して、心拍数と仕事率の関係、自転車の機械的効率、仕事量と酸素摂取量の関係から最大酸素摂取量を推定し、呼吸循環器系持久力を評価した。実習ではペアを組み、被検者と検者の両方を経験できるようにし、実験中は全ての学生に対し個々に指導した。また、テキストに加えて、測定および計算の仕方を説明したレポート用紙を準備した。説明では、患者や高齢者の運動指導を想定し、安全性や倫理に関して注意すべき点を含めた。実験にあたっては、年齢、運動習慣、運動歴、現病歴や既往歴、当日の体調に配慮した。計算方法のわからない学生には、個別に指導した。

## 4 卒業研究

1. テューバ演奏の健康効果
2. レジスタンストレーニングによるボディイメージの変化

## 3-5-4 人間関係学研究室

### 1 教育方針

人に関する理解を基盤とし、人と喜びや苦しみを分かち合うとともに、自他の独自性を尊重することのできる豊かな人間性を養うため、心理学の知見をベースとした、人間関係に関わる基本的な知識やスキル、人間の行動や発達についての理解・洞察を深めるために必要な知識、精神看護学の基礎となる知識の習得を目的としたカリキュラムを編成している。各科目の具体的な教育目標は以下の通り。1) 人間関係を形成し維持する方法についての体験的理解（「コミュニケーション論」）、2) カウンセリングの基礎となる理論の理解とコミュニケーションスキルの習得（「カウンセリング論」）、3) 環境を認識し、働きかける存在としての人の機能・人の発達についての基本的知識の習得（「人のこころの仕組み」）、4) 人間を社会や集団内の人間関係を通して状況論的に理解する視点及び対人援助に関する基本的な知識の習得（「人間関係学」）、5) 対人援助技術の習得（「行動療法と発達心理」「カウンセリング論」、6) 発達心理学の知見をベースとした発達障がい理解（「行動療法と発達心理」）、7) 看護と関わる心理学的知識についての理解（「人間関係学」「発達心理と行動療法」「カウンセリング論」）。

授業に際しては、個々の心理現象を看護実践や各自の日常生活での体験と関連づけ、援助スキルや心理検査などを体験に基づいて理解できるようにするため、授業時間内に演習を行ったり、学生が話し合う時間を確保している。授業終了毎に学生に感想・コメントの記述を求め、学生の授業理解程度や授業評価の一助としている。

## 2 教育活動の現状と課題

基本的な教育目標は、人のこころに関する基本的な知識の習得、集団レベル・個人レベルでの人間関係の理解、対人援助技術の理解および体験である。表面的な理解に留まることのないよう、レポート作成、カウンセリングスキル実践、ペアワークなどを取り入れている。授業評価アンケートや授業終了後のコメントから得られたデータに関しては、備品の整備・教室変更・演習時のボランティアの活用など、教育活動の改善へと結びつけている。

課題としては、講義時間内で学生が行うペアワークなどを評価に結び付けていくためのルーブリック開発があげられる。

## 3 科目の教育活動

### 1) 人のこころの仕組み

1 年次前期

吉村 匠平

前期前半は1クラス編成、前期後半は2クラス編成で進行した。外界の対象や自分自身を認識する存在としての人間の機能の特徴、2年次前期「行動療法と発達心理」の理解に必要な学習心理学の基本的な知識について、小実験・DVD視聴を行いながら授業を行った。毎時くじ引きによる座席指定を行い、講義時間中にペアで行うグループワークを積極的に取り入れ、教室全体での交流を求めた。学生が発言した場合、その場でクーポン（平常点1点）を付与し、発言を奨励した。時間外学習の機会としては、毎時講義終了後にショートレポートの作成を求めた。ショートレポートに記載された学生のコメントの中で講義内容の理解を促進するものを「講義通信」として集約し配布した。評価における期末テストの比重を軽くし、平常の学習の積み重ねで評価を行うようにした。

### 2) コミュニケーション論

1 年次前期

関根 剛

コミュニケーションは、情報の受信－理解－発信の繰り返しである事を軸にして、それぞれの領域についての知識とスキルに関する講義を実施している。まず、これらを体験的に理解させる為のグループエクササイズ、受信として行動観察、発信としてプレゼンテーション、全体を通したプロセスレコード等を行った。また、グループワークの為に、リーダーシップ/メンバーシップについて講義を実施した。全体として、座学として単なる知識の教授に終わらせず、エクササイズや演習など、実際に体験を通じて理解させることを重視している。

### 3) 人間関係学

1 年次後期

吉村 匠平

心理学の「人格、性格」概念理解について、実体論的理解（類型論、特性論）と状況論的理解の双方の視点から考える機会を提供した。加えて、自他を状況論的に理解するための態度としてカウンセリングマインドについて学習する機会を提供した。授業は2クラス編成で進めた。教室の机をコの字型に配列し、学生相互がお互いの発言を対面状況で確認できる環境を構成した。前期の「こころの仕組み」同様、毎時くじ引きによる座席指定を行い、ペアワークを行った上で全体への発言を求めた。発言ペアだけではなく、授業中のペアワークの態度が優れているペアに対してもクーポンを付与した。その結果、授業時間内の活動が活発になった。授業時間外の学習機会として、ショートレポートの作成に加え、ネコバス上に提示された自由課題への投稿を求めた。講義の後半では、自由課題の出題を学生から募った。

### 4) カウンセリング論

1 年次後期

関根 剛

カウンセリングスキルの習得（基本的なマイクロカウンセリングとロールプレイ）、カウンセリング理論（基本となる精神分析、認知行動療法、クライエント中心療法の基本知識と看護場面での応用）、看護で関わる対象別の理解（看護師、養護教諭として関わる対象者—不登校・非行、災害被害者等—）を実施した。特にロールプレイでは、自己理解とスキル習得をねらって、ICレコーダーを用いて、学生に自分自身の応対を確認させる方法をとっている。

### 5) 行動療法と発達心理

2 年次前期

関根 剛、吉村 匠平

行動分析、認知行動療法の基礎について解説した上で、学生自身の日常の健康行動などの改善プログラム作成を行わせた。作成したプログラムは夏期休暇中に実施して、問題点や改善点などについてレポートさせるなど、具体的・体験的に行動療法的なアプローチを理解させた（行動療法）。

進化発達心理学の知見に基づき、言語発達、運動発達、アタッチメントについて、受講者がお互いに意見を交流しながら講義を進めた。加えて、広汎性発達障害を中心に、障害をスペクトラムという視点でとらえることの重要性、サポートの視座などについて理解させた（発達心理）。

## 4 卒業研究

1. 学生のSNS依存傾向に及ぼす要因の検討
2. 看護学生の就職先志向性と関係流動性の関係について
3. 看護学生の学習観と学習行動の関連
4. 個人の身だしなみ経験と他者に対する身だしなみ許容度との関連性
5. 青年期におけるアタッチメント行動の研究

## 1 教育方針

環境保健学研究室では、環境保健学が直接カバーする知識や問題以外に、物理、化学、生物、統計学に関係する基礎的事項から社会的な問題まで広くカバーすることで、学問の奥深さを学ぶ機会を提供している。学部教育では環境保健学概論に加えて、環境保健学詳論がスタートし、基礎的な項目と社会的な問題との関連を意識しながら、学問に対するモチベーションを育成する講義となるようにしている。健康と環境は、看護の基礎にある科学的な見方として不可欠であること、健康がどんな要因と関係しているのか、そのことを知るためにどんなアプローチがとられていて、また、どんな考え方で健康に対処しようとしているのかを環境保健の講義から学ぶように指導している。一方で、放射線は医療において不可欠な存在であることから、放射線の基礎知識から健康影響、医学利用まで保健医療に携わる者が身につけるべき知識を教授している。

## 2 教育活動の現状と課題

1年次から2年次に進学すると、他の科目の負担が大きくなるために、国家試験との関係が比較的薄い内容であるためか、環境保健に対する関心が低下することは従来からの課題である。2年次の環境保健学詳論では、参加型の授業を取り入れ、環境と健康の関係を自ら調べ考えるよう指導した。4年次の選択科目である「環境倫理学」は選択する学生が年々少なくなっているため、平成23年度入学生からは、他の科目と統合して「環境疫学・生物学演習」に衣替えをし、演習方式で環境保健全体に関する課題へのアプローチを学ぶことにした。

## 3 科目の教育活動

### 1) 環境保健学概論

1年次前期

甲斐 倫明、小嶋 光明、小野 孝二

環境保健全般をカバーすることではなく、基本的な考え方や健康との関係を理解するための方法を中心に講義をしている。講義内容は次の通りである。1)公害から環境リスクへ：歴史、2)現代の環境問題、3)健康影響の考え方、4)がんの生物学、5)がん以外の健康影響、6)人における発がん、7)環境疫学：基礎、8)環境疫学：事例、9)安全性試験1、10)安全性試験2、11)ライフスタイルと健康、12)環境リスク論、13)環境リスク心理学、14)環境リスクの諸問題とまとめ、15)試験および解説

### 2) 環境保健学詳論

2年次前期後半

小嶋 光明、甲斐 倫明、小野 孝二

環境と健康との関係を方法論と事例を通して学ぶために、学生に参加型の授業を導入し理解を促す配慮をした。講義内容は次の通りである。

1)環境と健康、2)身の回りの環境因子、3)疫学データ解析、4)リスクアセスメント、5)リスク比較、6)リスクと便益、7)温熱環境と気圧、8)電気と電磁界、9)騒音、振動、悪臭、10)室内汚染、11)上水道と下水道、12)食品添加物と食品中の残留物質、13)食中毒、14)試験

### 3) 放射線健康科学

2年次後期前半

甲斐 倫明、小嶋 光明、小野 孝二

放射線と健康との関係を理解するために、放射線の物理、生物、医学、リスクまでの広範囲の知識をコンパクトにして講義を行っている。その際、物理や生物は同時期に実施している健康科学実験と合わせて理解できるように配慮している。また、医療における放射線利用に対する基礎知識を持たせる。講義内容は次の通りである。

1)放射線影響と放射線防護の歴史、2)放射線とは何か、3)放射性同位元素と放射能、4)放射線と物質との相互作用、5)放射線の線量、6)身近な放射線・放射線源、7)放射線の生体応答（DNA損傷と突然変異）、8)放射線の生体応答（染色体異常と細胞死）、9)放射線の健康影響（確率的影響）、10)放射線の健康影響（確定的影響）、11)放射線リスクの評価とその不確かさ、12)安全の考え方と放射線防護基準、13)患者のための放射線防護、14)医療における放射線利用、15)試験および解説

### 4) 環境リスク論

3年次後期後半

小嶋 光明、甲斐 倫明

「リスク論」は現代の環境問題の背景と複雑さに関係して生まれた理論である。環境問題の解決へ向けた取り組み等について、リスクをキーワードに、社会・政策的な側面も交えて論じた。テーマとして取り上げたのはいずれも現在進行形の問題であり、学生に多角的な視点を提供するとともに、最新の情報を伝えるよう努めた。講義内容は次の通りである。1)環境リスク論とは、2)BSEのリスク、3)遺伝子組み換え食品のリスク、4)食品添加物・残留農薬のリスク、5)鳥インフルエンザのリスク、6)化学物質の発がんリスク、7)自然災害のリスク、8)地球温暖化のリスク

### 5) 環境倫理学

4年次前期

甲斐 倫明

環境倫理が看護とは距離のある名称であることから学生の関心は高くないため、生命倫理との比較を交えながら、現代の環境倫理問題を考える講義にしている。講義内容は次の通りである。1)倫理とは、2)代理母などの生殖問題、3)現代の生命倫理学の考え方、4)人間中心主義と生命中心主義、5)現代の環境問題と倫理、6)自然の生存権の問題、7)世代間倫理の問題、8)地球全体主義

### 6) 健康科学実験 VI 放射線

小野 孝二

本実験では、自然環境中の放射線の存在と量とを理解させた。また、医療の現場で一般的に用いられる診療用X線照射装置からの散乱線を定量的に測定し、放射線防護について考察した。

### 7) 健康科学実験 VII 測定誤差と変動

甲斐 倫明

医療では様々な測定が行われ、その測定値をもって判断が行われる。測定値は、測定の原理や測定条件、あるいは測定器の特性などから同じ対象を測定しても同じ数値を得るとは限らない。本実験を通して、測定値のもつ誤差および影響を与える因子による変動を区別して理解し、測定データの読み方を学ぶ。実験内容は次の通りである。1)血圧測定の誤差と変動、2)体温測定の誤差と変動、3)血液酸素飽和度測定の誤差と変動

## 8) 健康科学実験 VIII 染色体異常

小嶋 光明

染色体の実体と染色体異常の発生机序について理解を深めるために、正常染色体および放射線によって誘発した異常染色体の標本を、学生一人一人に検鏡させた。また、染色体異常が疾患の原因となり得る例としてダウン症候群と慢性骨髄性白血病を取り上げ、核型分析等を通して異常染色体を同定させた後、疾患との関係について簡単な解説を加えた。

## 4 卒業研究

1. 放射線を照射したマウスの骨髄細胞における活性酸素の長期的変化
2. 乳がんリスク因子を入力して罹患確率を計算できるカウンセリングツールの作成
3. CT検査における被ばく線量評価に影響する個人差要因の分析
4. 甲状腺がん罹患率の地域差の分析とリスク因子に関する考察
5. 放射線を繰り返し照射したマウスの造血系細胞におけるDNA損傷の変化
6. 放射線照射したマウスの造血系細胞におけるDNA損傷の長期的変化

## 3-5-6 健康情報科学研究室

### 1 教育方針

科学的根拠に基づいた看護実践と基盤となる、情報収集と分析および発信のための知識と技術の修得をめざして教育を行っている。また、学習と業務における情報処理の能力を早期に高めることができるよう配慮し、実践的な教育内容を展開している。

特に、単なるデータの取り扱い技術や数的処理の知識として学ぶのではなく、看護職として、また一人の社会人として適切に判断・行動ができる能力を養うため、具体的な事例において自ら考えて学習することを推進している。

### 2 教育活動の現状と課題

保健師領域の「保健統計・疫学（情報処理を含む）」として展開していた本研究室担当科目の内容を看護師のみの養成となったカリキュラムへ適合する経過も一区切りを迎えた。看護の臨床における情報の取り扱い技術やEBNの中核となる疫学・統計学の知識ならびに一般教養としての統計学を中心とした数的処理能力、情報リテラシーの獲得を目指した教育内容として事例や内容の取捨選択も行えた。また、小レポートや提出課題、講義中のチェックなどにより学生の理解状況の把握をきめ細かく行い、授業進行に反映することもこれまでよりも改善を進めている。

しかし、教授内容に関する理解不足や興味関心の欠如といった問題への対策はさらに充実させる必要を認めている。今後は、自己学習法に関するアドバイスや授業内容への興味関心をさらに高める事例の検討のため、他研究室等とも情報交換を進めたい。

### 3 科目の教育活動

#### 1) 健康情報学

1 年次前期

佐伯 圭一郎

昨年度に引き続き、保健統計・疫学領域で保健師に固有と考えられる部分を一部の事例紹介にとどめ、看護師としての基礎知識、EBNの導入としての内容を充実させた。

内容として、様々な保健統計の意味と現状、EBNのための基礎的な疫学の諸理論を教授した。また、健康情報処理演習の演習テーマとして、保健統計の現状について自ら情報収集と分析、疫学データの基本的な解析を設定し、知識の定着と応用能力の向上を図った。

#### 2) 生物統計学

1 年次後期

首藤 信通、佐伯 圭一郎

看護学研究を遂行する上で必要とされる記述統計学、推測統計学の基礎的知識を身につけることを目標に講義を行った。

講義の進行については、多くの履修者にとって本講義が本格的に統計学に触れる最初の機会となることから、特に重要となる推測統計学の中心的内容（区間推定、仮説検定）は、前週の講義内容に関する復習を冒頭に行い、確実な定着を図った。

問題演習については、講義の合間に具体的な問題を解く時間を与えることで、講義が単調になることを防ぐとともに、学生の理解度の把握や指導方法の調整に努めた。また、各單元ごとにレポートを課すことで、履修者個人の定着度の確認を行うとともに、自己学習を習慣づける取り組みを行った。

データ解析手順については、推測統計学を具体的に捉えるために、コイン投げ等の試行を行い、得られた実データに対して統計的仮説検定を適用するなどの実験的演習を取り入れた。また、健康情報処理演習において計算機を用いたデータ解析手順も併せて学ぶことで、理論と実践を切り離すことなく理解するための工夫を施した。

#### 3) 健康情報処理演習

1 年次

品川 佳満、首藤 信通、佐伯 圭一郎

パーソナルコンピュータを活用して、学習や保健医療の場における情報管理の道具として役立つための技術について演習形式で教授した。主な演習内容は、ネットワークの利用（WWW、メール、ファイルサーバ、コミュニケーションサーバ）、データ管理、ワードプロセッサ、表計算、プレゼンテーション、ホームページ作成、画像処理、データベースの利用、統計データの分析である。また、演習に加えて、実際に医療現場で扱う情報システム（オーダーリングシステム、電子カルテシステムなど）について講義形式で解説を行った。さらに、コンピュータの技術的な面だけでなく、ネットワーク、情報セキュリティ、情報モラルなど情報を扱う上で重要となる知識についても解説を行った。

復習および技術習得のチェックが行えるように、コミュニケーションサーバを活用して練習問題や課題を提示した。



#### 4) 応用情報処理学

3年次後期後半

佐伯 圭一郎、首藤 信通

高度な統計手法について、少人数のグループで自己学習を行い、実際のデータ解析を行った。さらに、それぞれのグループが40分程度のプレゼンテーションを行い、プレゼンテーション能力を向上させるとともに相互に高度な統計手法について学びを深めた。今年度は41名が7グループに分かれ、下記のテーマについて学習を行った。

- ・クラスター分析（2つのグループ）
- ・因子分析
- ・看護研究論文における統計手法の利用状況
- ・尺度の作成
- ・検出力分析・サンプルサイズ的设计
- ・共分散分析

統計手法の学習として、また事例を解析・考察して報告するというプロセスは看護研究の基礎的演習として有効なものであった。

#### 5) 実務情報処理学

4年次前期後半

佐伯 圭一郎

主に保健師領域におけるテーマをオムニバス形式で行った。主要なテーマは下記の通りである。

- ・疫学および保健統計、統計学の復習
- ・尺度の作成と評価
- ・統計パッケージSPSSの高度な演習
- ・因果推論
- ・外部講師（商業デザイナー）によるデザインの基本（講義と演習）

履修登録者が14名と少なく、出席者がさらに少ない点は問題であったが、少人数で活発な意見交換も可能であった。

#### 4 卒業研究

1. 看護知識・技術習得のためのタブレットPC向け電子書籍教材の試作
2. ICTを活用した独居高齢者の見守りサービスにおける現状と課題
3. 孤独死の動向とその対策としての地域見守り活動の現状
4. 認知症高齢者に対する動物介在療法の有効性に関する文献的研究
5. 小児糖尿病患児のニーズに対応するための学校保健体制の検討—日米比較より—
6. 児童虐待と関連する要因の分析—都市と地方の違いを探る—

## 1 教育方針

言語活動の四技能であるSpeaking, Listening, Reading, Writingをバランスよく伸ばすことを念頭に、将来の専門分野で役に立つ英語が身に付くよう、実用的で易しい英語コミュニケーション(Speaking, Listening)に取り組みさせている。また、人間としての感性を養うという観点を含め、英語処理能力を高めるために、易しい英語で書かれた様々な分野、ジャンルの英語読本を積極的かつ多量に読ませる「多読」を導入、実施している。更に、教室内での活動を課外でも維持継続できるよう、CALL(Computer Assisted Language Learning:コンピューターを用いたウェブ学習システム)によるTOEIC対策英語学習プログラムを実施している。

## 2 教育活動の現状と課題

ネイティブ・スピーカー教員の授業では、自作の教材を毎回配布し、学生はパートナー同士、または、小さなグループで英語コミュニケーション(Speaking, Listening)を練習する。1年次生の講義内容は、一般的な日常生活の話題(Food, Shopping, Home, その他)、2年次生の講義内容は、看護英語である。各話題について3~4週間かけてじっくり練習を行い、同じ学生が毎回同じグループに含まれないように配慮することで、新鮮な気持ちで楽しく学習できるよう工夫している。応用可能な文法・語法の講義をもとにして、学生同士で授業ごとの討論課題について英語で意見交換などの言語活動を行う。また、1年次生前期の授業では、CALL学習を必修授業として取り入れている。授業を二部構成とし、上記の自作教材を用いたグループでの英語コミュニケーションの練習と、CALL学習を行なう。1クラスを2グループに別け、グループ毎に交互に講義を行っている。両者をバランスよく組み合わせ、学生の英語運用能力の維持、向上を目指す。

日本人教員の授業では、授業を二部構成とする。前半では、英文テキストの日本語訳を最初に配布し読ませることで、テキストの内容を理解、把握させ、それをもとに、課題となるテキスト部分についての語彙、文法、発音についての講義を行う。こうした基本的な理解を基盤として、ネイティブ・スピーカーの発話を音声CDで確認し、実際に発声の反復練習を行う。講義で取り扱った課題テキスト部分は次週までに暗唱できるようにしてることが課題となり、次週には実際に暗唱(含む筆記)できるかの確認を行う。後半では、易しい英語で書かれた書物を、辞書を用いることなく読み、総読書語数100万語を目指す多読を実施する。「辞書は使わない・分からない部分は飛ばす・つまらない本は途中でやめる」を原則に、学生自らが読む本を自由に選択することで学習動機を維持しつつ、英語運用能力の維持、定着、向上を目指す。

言語能力の向上には継続学習が不可欠である。しかし時間的な制約もあり、教室内での活動は限定的にならざるを得ない。そこで、年間を通し、全ての学生(1~4年次生、大学院生)が自ら自由に英語学習に取り組めるよう授業外での多読教材の貸し出しや、CALLシステムによるTOEIC対策のための英語学習、学習期間前後のTOEIC IP試験を実施している(前期:1年次生必修。後期:全ての学生を対象に希望制にて実施)。受講した学生は、真剣に取り組み、結果として学習効果の向上がみられた。

CALLシステムについては、授業での取り組みを将来看護の道を目指す多くの学生に知ってもらうため、7月22日(日)のオープンキャンパスにて、2回の模擬授業を実施した。参加した学生や保護者の方々に、実際にCALLシステムを体験してもらい、授業への理解を深めてもらった。

学生の英語学習に対する意欲の維持や学習活動の継続を図るべく、日々学習環境の整備を模索している。さらに魅力的な教室内活動の実現と自主的な学習へのきっかけ作りをいかに構築していくかが今後も継続課題である。

### 3 科目の教育活動

#### 1) 英語I-A1

1 年次前期

宮内 信治

英語の音声については、母音を中心に発音記号と発声法について確認と練習を行い、その定着を図った。講読では、デイル・カーネギー、アン・リンドバーグ、ミッチ・アルボム、バートランド・ラッセルなど20世紀のエッセイや文学、哲学を題材にした英語名文集を教科書として用いた。テキストに併記されている日本語訳を参考に、その解釈に至る基本的な文法の理解を深め、添付の音源CDを活用してスムーズな音読を習得すべく、発声練習を試みた。学んだ英文を帳面に書写し、次の講義までに暗唱音読ができるようにすることを課題とした。現代においてもなお規範となる英文テキストの一部を暗唱することにより、英語の世界の教養の一端を体得できたと思う。多読による総読書量は、前期期間中一人平均23,000語。最も多く読んだ学生の語数は85,000語。

#### 2) 英語I-A2

1 年次後期

宮内 信治

英語の音声については、子音を中心に発音記号と発声法について確認と練習を行い、その定着を図った。講読では、前期と同じ教科書を用いて、リチャード・ファインマン、アインシュタインのエッセイに触れて理解を深めると同時に、国際的に著名な日本人が英語で著した規範的名文として、新渡戸稲造『武士道』、鈴木大拙『禅と日本文化』を読むことで、日本人とはいかなるものか、という問いに答える英語を、書写と音読、暗唱で体得した。多読による総読書量は通年で一人平均42,000語。最も多く読んだ学生の語数は112,000語。

#### 3) 英語I-B1

1 年次前期

Gerald T. Shirley

This class had two components: an eight-week-long Computer Assisted Language Learning (CALL) session, and speaking and listening activities in the classroom. The CALL session focused on listening, reading, and grammar problems. Students took the TOEIC test before and after the CALL session. In classroom work, a topical syllabus was used. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities were used to maximize student interaction. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students had to participate actively in every class.

#### 4) 英語I-B2

1 年次後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

## 5) 英語II-A1

2年次前期

宮内 信治

原書Word Power Made Easyを用いて、英語語彙の増強を図った。ギリシャ語、ラテン語起源の語源についての知識を習得しつつ、性格を描写する語彙、医療職者を表す語彙を学び、さらにそこから派生する様々な語彙についての習得に努めさせた。学習した次の週に単語小テストを課し、学習の確認と評価とした。期間中に3回、教科書本文の中から教員が指示した原文について、音読暗唱の課題を与え、評価した。

## 6) 英語II-A2

2年次後期

宮内 信治

前期に引き続き、原書Word Power Made Easyを用いて、英語語彙の増強を図った。医療職者を含めた実践者 (practitioners) と、科学者についての語彙を学習し、さらにそこから派生する様々な語彙についての習得に努めさせた。学習した次の週に単語小テストを課し、学習の確認と評価とした。期間中に3回、教科書本文の中から教員が指示した原文について、音読暗唱の課題を与え、評価した。多読による総読書量は1年次からの通算で後期終了時一人平均72,800語。最も多く読んだ学生の語数は162,500語。

## 7) 英語II-B1

2年次前期

Gerald T. Shirley

This class had two components: an eight-week-long Computer Assisted Language Learning (CALL) session, and speaking and listening activities in the classroom. The CALL session focused on listening, reading, and grammar problems. Students took the TOEIC test before and after the CALL session. In classroom work, a topical syllabus was used. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities were used to maximize student interaction. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students had to participate actively in every class.

## 8) 英語II-B2

2年次後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

## 9) 英語III

3年次後期後半

Gerald T. Shirley、宮内 信治

講読担当 チーム医療に携わる様々な医療職者について書かれた400単語程度の英文を読み、内容把握とともに文章構成にも着目し、論理構成の把握に努めさせた。また、英語で書かれた看護学関連の原著論文の要旨を、英和辞典などを用いて読解する作業も行わせた。双方ともに、看護・医療に関連する新しい語彙と知見に触れることができた。

## 4 卒業研究

1. 患者と看護師間の信頼関係を損なう言動の実態
2. 大分県外出身学生の方言に対する意識調査
3. 看護学生の「心に残る言葉」の調査と分析
4. 歌詞の中のアルファベット表記の分析:「少女時代」と「AKB48」の2011年のアルバムの比較
5. 発声できない患者への対応に関する現状と分析

## 3-5-8 基礎看護学研究室

### 1 教育方針

基礎看護学では看護学の導入部分として看護の歴史やその発展及び看護理論を理解するとともに援助方法の基礎について学ぶカリキュラムを実施している。具体的な教育目標と該当する科目は(1)看護とは何か、看護の本質と機能および看護専門職の役割と活動を理解する(「看護学概論」)、(2)日常生活の援助技術および医療に伴う看護技術の基礎を理解する(「生活援助論・医療技術論」)、(3)看護を学ぶ初学者が実践と理論は表裏一体の関係であることを知る(「看護理論入門」)、(4)入院患者に接しながら、看護の対象の生活環境や心身の状態をふまえ、専門職としての看護師の役割を理解する(「基礎看護学実習」)等である。講義を行うにあっては上記の科目の学習進度にそってさまざまな看護実践と関連づけたり、実際に体験させたりしながら、双方向の教育をめざし、看護の基盤としての理解が進むように配慮している。

### 2 教育活動の現状と課題

カリキュラムの改正にともない、講義・演習・実習が有機的に結合されるように具体的な教育目標の実施に当たっては特に配慮をした。専門職である看護師について理解させ、将来の進路に対しても方向づけできるように学生同士の討議やグループワークも取り入れて行った。演習での視聴覚教材の活用や講義、実習前後のレポート指導なども強化して行った。また昨年同様にe-learningシステムの充実に取り組み、学生が活用できるDVDの作成を行った。学生が大学だけでなく、自宅でもe-learningシステムが活用できるように、関係部署への働きかけや情報収集を行った。しかし、少ない講義時間や演習時間を補う効果的な指導の検討や講義等では時間制約の中で不足しがちな自らがやってみる、考えてみる活動を増やす課題が残されている。

### 3 科目の教育活動

#### 1) 看護学概論

1年次前期

伊東 朋子、秦 さと子

看護学の導入として看護とは何か、看護の本質と機能および看護専門職の役割と活動について理解させ、自らの看護に対する興味関心を高揚させることができるように配慮した。講義中心の授業展開に偏らないようにできるだけ、学生が主体的に考えることができるように教材の精選や提示方法を検討して、学生が興味を持って積極的な参加が可能となるように配慮した。

## 2) 看護理論入門

### 1 年次後期

伊東 朋子、秦 さと子

看護活動に必要な看護理論に焦点を当て、看護理論とは何か、看護理論の必要性などについて理解させた。主な理論家について事前学習させて、学習内容を発表させながら、講義を展開した。2段階（基礎看護学）実習への橋渡しとして、プロセスレコードの記載方法やヘンダーソンの枠組みによる記録方法の説明なども取り上げ、生活援助論で学んだ具体例なども提示しながら、実際の臨床現場における看護理論の考え方について指導した。2段階実習終了後には、実習で学んだ内容を看護理論の視点から考究させた。

## 3) 生活援助論

### 1 年次前期後半・後期前半

秦 さと子、伊東 朋子、栗林 好子、水野 優子、巻野 雄介、河野 梢子、桑野 紀子、山田 淳子、井ノ口 明美、小田 千尋

学内演習は援助技術のさらなる習得を目指し、2人1組を基本的枠組みとして展開しているが、新新カリキュラムの実施により、座学と演習が乖離しないように復習や予習で課題を出し、技術習得を補った。少ない時間数を補うためにも積極的に課外での時間を有効活用させて技術試験や筆記試験に臨ませた。e-learningシステムもかなり軌道に乗り、コンテンツも増加してきており、自学自習にビデオ学習なども取り入れさせることで反復学習を促すことができた。看護援助を行う意義や、これまで学習した基礎知識を根拠として看護援助と結び付けること、看護基礎技術を対象者にどのように応用していくのかという点を主軸に授業構成をして、授業展開の工夫をした。また、演習では、原理原則にのっとった手順+応用力の習得のために毎回、単元の担当教員を中心に演習構成に関しての事前の打ち合わせを行い、対象学生のレディネスに応じた授業展開に努めた。

## 4) 医療技術論

### 2 年次前期

秦 さと子、伊東 朋子、栗林 好子、水野 優子、巻野 雄介、山田 淳子、井ノ口 明美、小田 千尋

学生は1,2段階実習が終了しているため多少患者のイメージがしやすいと判断し、講義後レポートで当該技術が対象へ与えるリスクについて考えさせた。演習ではさらにそれを予防するために実際どのような配慮をすべきかを考えさせるように展開することで知識と実践のつながりを意識づけさせた。自立した反復学習の習慣化を期待し、各技術の達成レベルを示し、期限内での達成を求めた。その際、教員の直接指導も可能であることは勿論であるが、それ以外の教材としてe-learningシステムの整備も行い、技術習得環境の調整も行った。学生のレディネスと当該授業の達成目標を照らしあわせながら、最良と判断した方法を吟味し取り組んだ。

## 5) 基礎看護学実習

### 1 年次後期

伊東 朋子、藤内 美保、石田 佳代子、秦 さと子、井伊 暢美、江月 優子、河野 梢子、草野 淳子、井ノ口 明美、植田 みゆき、小田 千尋、栗林 好子、河野 優子、後藤 成人、田中 佳子、中垣 紀子、巻野 雄介、堀 裕子、水野 優子、山田 淳子

既習科目の理論と実践が統合できるように実習前指導・実習後指導には特に力を入れた。患者1名を受け持つ本格的な実習としては初めての学習であるため、実習施設の看護部長による講話を依頼し、実習に対する動機づけ等もオリエンテーションで実施した。また3つの実習施設(17病棟)での実習が望ましい形で展開できるように担当教員や学生の構成メンバーを十分に検討し、実習施設での備品・消耗品等の整備にも努めた。常に学生と担当教員との指導関係が円滑に展開できるように配慮した。実習時期の問題もあり、インフルエンザ罹患学生が1名出たが、帰学日に病棟実習し、実習終了後にビデオ付きの事例を与え、のべ4日間補講指導した。

## 4 卒業研究

1. 高齢者を対象とした足の洗浄後に効果的な保湿方法の文献的検討
2. 眼部温罨法による全身の疲労回復効果についての検討
3. 崩れにくく、整ったベッドメイキング法の検証
4. 看護現場での男性看護師の印象に関する文献的研究
5. 看護基礎教育で得られる看護実践能力と卒業時に求められる到達度とのギャップ  
ー食事援助技術に焦点を当ててー
6. 筋活動量からみた腰部負担の少ないベッドの高さに関する検討

### 3-5-9 看護アセスメント学研究室

#### 1 教育方針

看護アセスメント学は、基礎看護科学講座に位置づけられ、人の健康問題について、根拠に基づきアセスメントできる能力を養うことを目的としている。看護の基盤となる人間科学講座で教授された内容との融合を図りつつ、身体的、心理的、社会的側面から看護学の視点でアセスメントできることがねらいである。現在教授している具体的な科目は、「看護疾病病態論Ⅰ」「看護疾病病態論Ⅱ」「ヘルスアセスメント」「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」「看護アセスメント学実習」である。

「看護疾病病態論Ⅰ」「看護疾病病態論Ⅱ」では、主要な疾病の理解や病態の理解、さらに「ヘルスアセスメント」においては、看護師の五感を活用し頭部からつま先まで身体の観察ができる能力を身につけ、身体的なアセスメントができる知識・技術に加え、これらを踏まえた看護過程の展開ができるための基礎的能力を身につける。「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」は、看護過程の展開ができることを目的とし、講義および演習を組み合わせて、知識の習得を段階的に行っていく。個人およびグループワークを通し、一人一人が看護過程の展開ができる基礎的能力を養う。2週間の「看護アセスメント学実習」では、受け持ち患者と関わり、看護過程の展開を行い、患者の立場を常に考え、患者の健康問題を見極め、適切な看護ケアにつなげられるための思考と実践能力を養い、専門看護学領域の基盤を作る。

## 2 教育活動の現状と課題

今年度は平成23年度改正カリキュラムの学生が2年生となり、看護アセスメント学が担う科目の多くは2年生で進行する。授業の目標、授業構成、授業方法、授業評価等に対して、例年のように見直し少しずつ改善を試みた。平成21年度改正カリキュラムで新たに加わった「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」の科目の理解度など調査をおこない、おおむね理解度は良かった。看護アセスメント実習では、在院日数の短縮や患者の状況の変化に応じて看護過程の展開が困難なケースもあったが、全員が実習目標を到達した。技術面においても、看護アセスメント学実習の前に第1段階看護技術演習を12月に実施し、実習終了後に学生および教員にアンケートを行い、効果がみられたという結果であった。今後は、さらにヒトの構造や機能、病態との融合を図りつつ、人間を包括的に観る視点と分析的に観る視点を深め、エビデンスに基づく判断能力を身につけることが課題である。

## 3 科目の教育活動

### 1) 看護疾病病態論Ⅰ

1年次後期後半

藤内 美保、石田 佳代子、河野 梢子、田中 佳子

主な疾患に関する病気の種類、概念、症状・検査・治療などを中心に講義形式で行う。アレルギー・膠原病・感染症、感覚器系の眼・耳・鼻・皮膚、消化器、呼吸器、腎疾患を行った。各系統の解剖や生理の基礎的知識を想起させながら教授した。教科書は系統看護学講座シリーズを使用するとともに、進級試験の範囲である病気の種類、健康の種類、健康の種類を活用し、配布資料も提供して教授した。専門的内容が多いため、中間試験を実施して、知識の獲得ができるよう配慮した。後期後半の途中に基礎看護学実習が行われるため、学生は疾患をしっかりと学ぶ必要性を認識するようである。

### 2) 看護疾病病態論Ⅱ

2年次前期前半

藤内 美保、石田 佳代子、河野 梢子、田中 佳子

主な疾患に関する病気の種類、概念、症状・検査・治療などを中心に講義形式で行う。脳・神経系、代謝・内分泌系、生殖器系、血液・造血器系、感覚器系の眼・耳・鼻・皮膚を行った。各系統の解剖や生理の基礎的知識を想起させながら教授した。教科書は系統看護学講座シリーズを使用するとともに、進級試験の範囲である病気の種類、健康の種類、健康の種類を活用し、配布資料も提供して教授した。専門的内容が多いため、中間試験を実施して、知識の獲得ができるよう配慮した。

### 3) ヘルスアセスメント

2年次前期後半

藤内 美保、石田 佳代子、河野 梢子、田中 佳子

ヘルスアセスメントでは、身体的側面からの観察に主眼を置き、ヘルスアセスメントの意義、基本技術、健康歴聴取、消化器系、呼吸器系、循環器系、脳・神経系、運動器系のアセスメントについて、講義・演習を行った。講義と学内実習は、別の日に実施するように変更したことで、学内実習に臨むにあたっては事前に復習する姿勢が確認できた。さらにこれまで既習した知識・技術を活用することを目的に高齢者のボランティアグループに協力を得て、フィジカルイグザミネーションをさせていただき、高齢者へのインタビューや、正常と異常の判断、フィジカルアセスメントの技術等を効果的に学んだ。ME機器演習も実施した。最終的に筆記試験と実技試験を実施し、一定の知識・技術の能力を身につけることができた。



#### 4) 看護アセスメント概論

2年次後期前半

藤内 美保、石田 佳代子

看護過程の展開の基礎的能力を身につけるため、看護過程の概要、看護過程と基礎理論、アセスメント、看護診断、計画、実施、評価について、講義およびペーパーペイシェントによる個人ワークを行いながら、理解を確実にするよう努力した。個人ワークのペーパーペイシェントはイメージしやすい糖尿病事例を用い、身体面、心理面、身体面からのアセスメントが必要な事例で看護過程を展開させた。個人ワークでは昨年の方法を改善し、段階的にレポートを提出させた。昨年度、病態を深く導けない、検査データをアセスメントできないなどが明らかになり、身体的な知識の充実を図るように指導を強化した。

#### 5) 看護アセスメント演習

2年次後期後半

藤内 美保、石田 佳代子、河野 梢子、田中 佳子

看護過程の基本的知識を活用するために、1グループに5名～6名でペーパーペイシェントによる看護過程を展開させた。事例は、乳がん、肝硬変、内包出血、白血病の4事例とし、病名や発達段階、性別、それぞれ異なる看護診断が導けるような事例を作成した。学生は既に個人ワークで看護過程の展開を行った上で、グループワークで検討させ、グループメンバーとディスカッションすることで視野が広がりや内容の深まりに繋がったようである。中間発表会と全体発表会を行い、患者の全体像やアセスメントの深まりは確認できたが、病態を踏まえた考え方が課題であった。看護アセスメント学実習で担当教員となる教員にも発表会に参加してもらい、実習指導の際の参考にしてもらった。教員からのアンケート結果では、発表会の参加により学生のレディネスの把握や実習で強化すべき点などが参考になったという意見が多かった。

#### 6) 看護アセスメント学実習

2年次後期後半

藤内 美保、石田 佳代子、伊東 朋子、秦 さと子、井伊 暢美、池辺 優子、井ノ口 明美、植田 みゆき、江月 優子、小田 千尋、河野 梢子、草野 淳子、栗林 好子、後藤 成人、田中 佳子、中垣 紀子、堀 裕子、巻野 雄介、水野 優子、山田 淳子

1名の受け持ち患者を持ち、看護過程を展開する基礎的能力を身につけることを目的にした。県立病院8病棟、大分赤十字病院5病棟、アルメイダ病院4病棟の計16病棟に4～6名の学生を配置した。1年次の基礎看護学実習で配置された同じ病院で異なる病棟に配置をした。基礎看護実習は1年次に行われ、1年ぶりの実習であったが、技術チェックなどの技術練習も学内でを行い、実習に臨むことができた。ほぼ全員が実習目標を到達した。1週目は受け持ち患者の病態をしっかりと考えることができ、2週目では心理・社会面を総合的に捉え患者の全体像を踏まえた看護診断、看護計画、実施、評価ができた。担当教員からの評価もおおむね良かった。

## 4 卒業研究

1. 非被災地の看護師が東日本大震災における活動によって受けた影響  
—看護師への支援のあり方を探る—
2. 血圧測定結果を患者に伝える際の看護師の判断  
—心疾患事例を用いたアンケート調査より—
3. 排泄動作に関わる関節の最低限必要な角度の実験的検討
4. 米国におけるNP 教育開始後10 年間の文献から見た研究の動向
5. 高齢者の終末期ケアへの希望を家族内で共有するために  
—在宅高齢者とその子の語りから—
6. DMAT看護師が経験を通して受けた影響と捉え方  
—語りから考察した将来像—

### 3-5-10 成人・老年看護学研究室

#### 1 教育方針

成人・老年看護学は、成人期・老年期の対象への看護実践に必要な専門知識・判断能力・援助技術を習得することを目標としている。そのため、成人看護学概論、老年看護学概論、成人看護援助論・老年看護援助論、成人・老年看護学演習、成人・老年看護学実習の各教科を設定している。概論では成人老年領域の発達段階や保健に関すること、理論について学び、援助論では専門的知識を習得するとともに、実践する力を養うために、担当教員以外に臨床で働く様々な医療職者を学外講師として招き、援助方法を学ぶことができるようにしている。さらに成人・老年看護学演習において、健康段階の特徴をとらえられるように、急性期・慢性期・終末期の模擬事例へのケアについて考え学びを深め、ロールプレイを通して関連の看護技術習得する機会を取り入れている。最終的に、成人・老年看護学実習では、医療機関や老人施設において、知識・技術・態度を統合した看護の実践を学べるように組み立てている。

#### 2 教育活動の現状と課題

成人・老年看護学は青年期から老年期までの長いライフスパンにある対象者への看護の学びであり、学習範囲は非常に広範囲にわたっている。そのため限られた時間数の中での学習内容と方法を吟味しながら展開している。成人・老年看護学概論では基礎となる対象者の理解と看護について学生が考えることが必要であり、対象者を理解するための理論を主体的に学習し思考を深められるようにしている。また、成人・老年看護援助論や成人・老年看護学演習では、幅広い年齢層の対象理解や多様な疾病とその治療方法や援助方法の理解を助けるために、具体的な事例、機械器具を提示し臨床経験のない学生の関心と学習意欲を高め印象に残る講義をするようにしている。講義や試験などの質問対応、解答等の時間確保が例年と課題であり、学生との通信ネットワークを用いた対応などフィードバックを強化することに今後も取り組んでいく。

### 3 科目の教育活動

#### 1) 成人看護学概論

2年次前期前半

小野 美喜、福田 広美、松本 初美

成人期に生じる多様な健康問題と対象へ看護援助の概要を学ぶ目的で、ライフサイクルにおける成人期の位置づけと特徴を発達課題・行動、健康の側面から総合的に理解し、看護を実践していく上で基盤となる知識を教授した。特に中範囲理論を学習し、成人の理解と看護アプローチの学びを深めた。

#### 2) 老年看護学概論

2年次前期前半

小野 美喜

老年期に生じる健康問題と看護援助の概要を学ぶ目的で、ライフサイクルにおける老年期の特徴、健康問題をもつ高齢者の身体的、心理的、社会的問題を理解し、慢性疾患や機能障害を持ちながら日常生活を送る対象への看護援助に必要な知識を教授した。老人施設から外部講師を招き、施設で生活する高齢者の実情について講義する機会を設け、認知症に伴う症状や援助役割などが実例をもって示されたため、学生の理解が深められた。また、高齢者の機能低下とQOL、高齢者の保健医療福祉における課題など文献学習し論述する機会をつくった。学習効果もあがったため引き続き来年度も実施する。

#### 3) 成人看護援助論

2年次前期後半

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、中釜 英里佳、堀 裕子

成人期にある対象者の特性をふまえ、特徴的な健康障害時の急性期、慢性期、回復期、終末期の各期における看護援助方法を学ぶことを目的とし、これまで学んだ障害や疾病の知識を土台に科学的な看護実践のために必要な知識と技術を身につけられるよう講義を行った。

#### 4) 老年看護援助論

2年次後期

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、中釜 英里佳、堀 裕子

老年期にある対象者の特性をふまえ、特徴的な健康障害時の急性期、慢性期、回復期、終末期の各期における看護援助方法を学ぶことを目的とし、これまで学んだ障害や疾病の知識を土台に科学的な看護実践のために必要な知識と技術を身につけられるよう講義を行った。

#### 5) 成人・老年看護援助論II

2年次前期後半・後期

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、中釜 英里佳、堀 裕子

成人・老年期にある対象者の特性をふまえ、特徴的な健康障害時の急性期、慢性期、回復期、終末期の各期における看護援助方法を学ぶことを目的とし、これまで学んだ障害や疾病の知識を土台に科学的な看護実践のために必要な知識と技術を身につけられるよう講義を行った。

## 6) 成人・老年看護学演習

2年次前期

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、中釜 英里佳、堀 裕子

学生の臨床実践能力の向上を図るため、成人期および老年期の人々を対象に、健康問題に応じた看護過程の展開と看護の方法を学ぶことを目的とした演習を行った。

成人期、老年期の特徴を踏まえ、臨床の場で様々な健康問題を持つ、急性期、慢性期、終末期の対象者に必要な援助を計画し、看護過程の展開の中で援助技術を練習できるように演習を行った。また、模擬患者への健康問題の査定や個別性のあるケアプランの立案、および実践、評価についても学生が自ら主体的に取り組むことができるように演習を行った。

## 7) 成人看護学実習

3年次前期後半・後期前半

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、中釜 英里佳、堀 裕子、水野 優子、巻野 雄介、河野 梢子、田中 佳子、山田 淳子、小田 千尋、安部 真紀

成人看護学実習は、急性期・慢性期・回復期・終末期にある患者の看護の特性や看護実践を学ぶために大分県立病院および大分市医師会立アルメイダ病院にて12週間（学生一人5週間の臨地実習と1週間の学内セミナー）の実習を実施した。今年度から教員の指導体制を原則常駐型とし、学生が看護スタッフとの連携を自らとるなど自律的な実践できることを目指した。実習指導者の理解も得られ、学生に対する指導が充実した。今後もチーム医療の中で学生が主体的に行動できるような指導方法を継続していく。

## 8) 老年看護学実習Ⅰ

3年次前期前半

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、中釜 英里佳、堀 裕子、水野 優子、栗林 好子、巻野 雄介、河野 梢子、田中 佳子、後藤 成人、中垣 紀子

施設に入所している高齢者および通所している高齢者の生活の支援を通して、対象を理解し、保健・医療・福祉分野における看護職の役割と課題を学ぶ目的で、大分市内および由布市内にある介護老人保健施設6施設、介護老人福祉施設6施設の合計12施設において2週間の実習を行った。各担当教員が巡回しながら指導にあたり、学生は臨地指導者との連携の下で実習を行った。高齢者の生活の質をとらえたリクリエーションの企画や実施などができた。

## 9) 老年看護学実習Ⅱ

3年次前期後半・後期

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、中釜 英里佳、堀 裕子、水野 優子、巻野 雄介、河野 梢子、田中 佳子、小田 千尋、岡元 愛、山田 淳子、安部 真紀

老年看護学実習Ⅱは、治療を必要とする高齢者への看護の特性や看護実践を学ぶために大分県立病院および大分市医師会立アルメイダ病院にて12週間（学生一人5週間の臨地実習と1週間の学内セミナー）の実習を実施した。今年度から教員の指導体制を原則常駐型とし、学生が看護スタッフとの連携を自らとるなど自律的な実践できることを目指した。実習指導者の理解も得られ、学生に対する指導が充実した。今後もチーム医療の中で学生が主体的に行動できるような指導方法を継続していく。

## 4 卒業研究

1. 終末期看護実習における学生の学びに関する文献的検討
2. 介護老人保健施設利用者の健康関連QOL  
ー特定能力認証看護師を含むチームアプローチに着目してー
3. 就労している2型糖尿病患者への効果的な食事支援
4. 女性の乳がん検診と健康意識に関する調査
5. 入院患者に有効なリラクゼーション援助
6. 認知症の人の強みを活かした関わり  
ーどのような視点で、何を強みと捉え、どう活かすかー

## 3-5-11 小児看護学研究室

### 1 教育方針

小児看護学の講義と演習、実習を通して、発達過程にある小児の保健と小児看護の特殊性を理解することをねらいとしている。そのため、小児看護学では対象である小児の成長と発達について発達理論を学び、小児の健康の維持増進・健康障害の現象に対する家族を包含する小児看護の特殊性について理解を深め、小児看護の看護過程の展開とそれに必要な援助技術を学ぶことが目的である。

小児看護学では、基礎看護科学講座で看護理論や看護技術を学んだ学生に対して、小児とその家族への関わりにおいて、小児看護の倫理を思考し小児看護の実践ができるよう成長することを期待して教育を行っている。学生が健康・不健康に関わらず小児とその家族への援助者としての態度を身につけ、肯定的な子ども観を構築できるよう配慮している。

### 2 教育活動の現状と課題

小児看護学の講義は、2年次前期に15コマ1単位で行う小児看護学概論と、3年次前期に2単位30コマの発達と援助論と15コマの小児看護学演習を行う。概論では小児を取り巻く保健、福祉、看護などの課題を学ぶ。学生が自分自身の「子ども観」をレポートし、自己の子ども観を認識するように工夫している。3年次前期はより小児看護の専門的な講義と学内演習を通して、学生は多くの小児に関する学びを深める。後期は、それまで学んだ専門的知識を臨地実習で実践し、看護場面に知識を応用する。初めて学生は対象である小児とその家族と出会い、小児看護とは何かを悩みつつ、看護職あるいは大人としての役割を意識し、看護活動ができるように成長するようにカリキュラムを構成している。

最近は少子化で兄弟姉妹も少なく周囲に子どもがいない、また子どもに接したことがないという学生が少なくない。講義では視聴覚教材を多用して、動的な子どものイメージを持つことができるように配慮している。毎回の講義終了後に、講義内容に対する質問や意見を求め、次の講義時間に質問に答え、学生の疑問を残さないようにしている。学生は欠席も少なく意欲的に受講していた。小児看護学の学習内容の定着のために2回に分けて小テストを行い工夫した。また、再試験を実施してフォローした。

### 3 科目の教育活動

#### 1) 小児看護学概論

2年次前期

高野 政子、草野 淳子

本科目では、小児看護の特質と概要、および小児の成長と発達を理解することを目的としている。基本的概念として小児の特徴を発達的にとらえ、小児と小児を取り巻く環境を考え、小児保健、小児医療の動向を述べ、教育や福祉の視点からも小児看護の役割と重要性について教授した。具体的な内容は次の通りである。1)小児看護学の変遷と小児看護の特殊性、2)世界の子どもの健康と医療、3)子ども観の変遷と子どもの権利、4)日本の母子保健・行政と母子福祉、家族と親子関係、5)小児の成長と発達総論、6)小児の形態・機能的発達、7)心理的・社会的・言語的発達である。8回～14回までは、乳児から学童・思春期までの成長・発達について理論等を展開した。最終回は、学生のフィールドワークの親と子の観察レポートを発表して意見交換することで、子どもを意識的に観察するように動機づけを行った。

#### 2) 発達と援助論

3年次前期前半

高野 政子、草野 淳子、中垣 紀子

小児の発達過程の特質を理解するための主要理論に基づき、小児の行動を多面的に捉え、発達過程の応じた日常生活の援助方法と各期の保育と保健を講義し、援助技術の演習を行った。また、健康障害のある小児とその家族への援助方法を教授した。主な講義項目は、1)小児期の主要な発達理論、2)小児各期の発達アセスメント、3)乳児期、幼児期の保育理論と技術、4)学童期、思春期の保健と看護、5)病気の子どもと家族、6)小児の健康障害と看護、7)障害のある子どもと療養生活の援助、8)親子関係に問題のある場合の看護ほか。学内での小児看護で使う技術の演習では、T Aや看護師等の協力を得て6名で、援助技術として高機能シミュレータを用いてバイタルサイン測定の実施と技術小テスト、静脈点滴の固定、服薬介助や離乳食の実際などを指導した。指導の方法や内容は指導者間で統一して、20名ずつの4グループに分けてローテーションする方法で指導した。一方、看護過程の展開は、全員で発表会を開催し、グループワークで展開を完成した事例を2グループずつ発表し意見交換を行った。

#### 3) 小児看護援助論

3年次前期後半

高野 政子、草野 淳子、中垣 紀子

演習は2つの課題を設定した。前半は小児領域の主要な病態と疾患について講義形式で解説を行い、学生のグループワークによる主要な疾患と看護について調べ学習の作業とその発表形式で行った。また、後半は臨地実習でよく出会う事例を5事例提供し、グループワークで紙上での看護過程の展開について検討し、まとめてレポートして発表した。2つの課題を実施したが、学生は積極的な参加を求められる学生個々に事例展開を求め、グループワークを通して互いの疑問点を話し合い発表する方法で行っている。真面目な取り組みが見られた。一部の学生が個人ワークを軽視する傾向もあり、グループワークに全員が取り組んでいるか、適宜グループワークに入り指導した。

## 4) 小児看護学実習

3年次後期前半

高野 政子、草野 淳子、中垣 紀子、佐々木 基子

小児看護学実習は、大分県立病院に1グループ学生8～9人で6グループ(合計52人)、別府発達医療センターに学生4人で6グループ(合計24人)配置とし、専任教員と担当教員と臨床実習指導者の連携により指導を行った。学生1人に対象児1人の受け持つことを目指したが、在院日数の短縮化に伴い、実習期間中に2人の受け持ちする可能性を避けた。1人の子どもを継続できた場合は、学生が遊びの工夫などもみられたが、複数の子どもの受け持つことで看護実践まで到達した学生も少なくない。3日間の保育所実習は、7月末から8月第1週までに実施した。子どもの理解やコミュニケーションができるようになること、病児と家族への関わりがスムーズとなるので健康な子どもの保育は今後も必要と考える。実習の時期は夏季休暇最初に行うことが冬の感染の予防の視点からもよいと考える。

7日間のうち外来実習を半日行った。外来診療の場面に立会い子どもや家族の様子、外来看護師の指導のもと、子どもの発達に合わせた看護技術について学ぶことができた。実習では、受け持ち患児のバイタルサイン測定は全員が経験することができた。

実習終了後、実習施設の実習指導者と専任、担当教員で実習反省会を持ち、意見交換を行った。学生の実習到達度や記録に差があると報告された。実習に対して学生が動機づけられ積極的な実習を行えるように指導することが課題と考える。

## 4 卒業研究

1. 特別支援学校で医療的ケアに従事する看護師からみた現状と課題
2. 混合病棟において小児看護に携わる看護師のストレス認知とそのコーピング
3. 小児救急外来を受診した保護者のインターネット利用実態と受信判断
4. 子育て中の看護師の復職プロセスと対策に関する文献的研究  
-ワークライフバランスに着目して-

## 3-5-12 母性看護学研究室

### 1 教育方針

母性看護学では、女性のライフサイクルおよびマタニティサイクルにある妊娠・分娩・産褥・新生児の生理・病態と母子およびその家族への援助の理論と方法について学ぶことを目的としている。科目は母性看護学概論、母性看護援助論、母性看護学演習、母性看護学実習で構成している。特に母性看護学実習は周産期に重点をおいて実習を展開している。

### 2 教育活動の現状と課題

母性看護学では、学内で学んだ理論と技術を実習で実践し、理論と実践を結びつけることを目標としている。母性看護学実習においては、男子学生の増加によりグループ編成が困難になってきたことと対象受け持ち患者が少なくなっておりペアで1例の事例を受け持つことが多くなってきたため、今年度から施設を増加して3カ所とした。受け持ち患者の症例は正常褥婦だけでなく、帝王切開術後の褥婦や入院中の妊婦も受け持ち対象者として工夫している。実習期間中の分娩数は施設によって異なり、施設によって分娩見学ができない学生もいる。今後は分娩件数の少ない施設での学生への実習の工夫が課題である。

### 3 科目の教育活動

#### 1) 母性看護学概論

2年次前期

林 猪都子、猪俣 理恵、植田 みゆき

母性看護学の基本概念および意義を理解し、人間の性と生殖の側面から、女性の生涯を通じた健康生活の促進と健康問題への援助活動を学び、母性各期における母性看護の役割と重要性について認識を深めることをねらいとして、母性の概念、セクシュアリティ、リプロダクティブヘルス/ライツ、母性看護の歩み、母性の健康と社会、母子保健統計からみた動向、母性看護に関する組織と法律、母性看護の対象の理解、ライフサイクル各期の健康と看護などについて教授した。本年度はグループワークを取り入れて、自主学習を進め、学んだ学習の中から課題を抽出した。来年に向けて講義資料や内容を修正して講義内容の充実に努めていきたい。

#### 2) 母性看護援助論

2年次後期

林 猪都子、猪俣 理恵、植田 みゆき

妊娠期・分娩期・産褥期の母子の生理的変化とその家族への看護について学ぶことをねらいとした。妊娠期では妊娠の生理・経過、妊婦の健康診査、母体と胎児の管理、妊婦への看護、分娩期では分娩の生理・経過、産婦と家族への看護について教授した。産褥期では妊娠から分娩までの経過が産婦と新生児に及ぼす影響とその看護について授業を展開した。事前学習、授業毎の小テスト、グループ学習を取り入れたTeam-based Learning方式の学習で、学生が積極的に参加し自ら学習を深めることができるよう工夫した。

#### 3) 母性看護援助論II

3年次前期

猪俣 理恵、林 猪都子

妊娠期・分娩期・産褥期の母子及びその家族のニーズと母性看護の役割について学ぶことを科目のねらいとした。看護業務については、主に妊娠・分娩経過が産婦と新生児に及ぼす影響とその看護について授業を展開した。授業回数は15回で、発言毎に評価ポイント加算制を取り入れた参加型とした。学生は参加型の授業に初めは戸惑っていたが、慣れるにつれて興味を持って積極的に参加していた。

#### 4) 母性看護学演習

3年次前期

林 猪都子、猪俣 理恵、植田 みゆき

母性看護の実践に必要な看護技術を理解し基本的技術を習得することを科目のねらいとした。講義回数は、看護技術演習7回とウェルネス看護診断に基づいた母性看護家庭の展開8回の全15回であった。看護技術演習では、モデル人形を用いた妊婦腹部触診・計測、胎児心拍数陣痛図モニター装着、新生児計測や沐浴など母性看護を行う上で必要な看護技術の演習を実施した。母性看護過程の展開では、正常3事例、異常3事例をグループワークでまとめ、発表し学習内容の共有を図った。学生の取り組みは熱心であったが、一部の学生が自分の担当箇所以外の内容についての学習の共有がうまくできない様子もみられたため、次年度は全事例について個別学習をした後、グループで担当箇所を深めるという方法を工夫する必要がある。



## 5) 母性看護学実習

3年次後期

林 猪都子、猪俣理恵、植田みゆき、渡邊 文子

母性看護学実習施設は3施設であり、実習期間は1グループ2週間（延べ12週間）であった。学生および教員の配置人数は、堀永産婦人科医院は学生4名配置（合計24名）、大分県立病院は学生4～5名配置（男子学生6名）（合計26名）、アルメイダ病院は学生4名配置（男子学生6名）

（合計24名）、担当教員は各施設1名配置した。実習は学生1名につき妊婦または褥婦を1名受け持ち、妊産褥婦、新生児の看護について学び、母性各期の特性とニーズに応じた看護過程の展開を学習した。すべての学生に生命の誕生の場面を通して自己を振り返る実習を期待し、母性各期の保健指導をそれぞれ工夫して取り組むように努力した。本年度は分娩に見学ができなかった学生が24名いた。また、帰学日は1週目金曜日、2週目木曜日に設けることで、記録のまとめや技術の見直し、最終カンファレンスの準備がスムーズに行えた。今年度は事前学習としてパンフレットと実習ノートをグループ学習にて作成したが、今後は実習前の個人学習を強化することを検討していきたい。

## 4 卒業研究

1. 中学生の性教育のあり方に関する文献研究
2. 母性不安の文献的研究
3. NICU紹介DVDに必要な情報と効果的な提供時期 一助産師の視点から一
4. 震災が妊産婦に及ぼす影響に関する文献研究

## 3-5-13 助産学研究室

### 1 教育方針

学部の助産学（選択科目）は、助産師独自の判断で妊娠・分娩・産褥・新生児期の助産過程を展開し、さらに母子および家族の健康と福祉を促進するための理論と方法を学ぶことを目的としている。助産師国家試験受験資格要件の実習における分娩取扱いについては、指定規則で助産師又は医師の監督の下に学生1人につき10回程度行うことが決められており、本学学部生は9例以上を取扱うことを基本的な考えとしている。学部の助産師教育では、卒業時点までに、少子化や周産期医療に対する社会のニーズの多様化に対応でき、母子の安全性（正常・異常の区別）が守れる判断力と実践力を持つことを教育目標としている。

大学院助産学コースは、助産師が専門職として社会に対して果たすべき役割について理解し、高度な周産期母子医療に対応するためにハイリスク妊産褥婦を含めた助産診断能力及び助産技術やリプロダクティブ・ヘルスを推進するために女性の性と生殖に関わる健康問題に対応できる能力を修得し、他職種との連携や協働、社会資源の活用を図ることができる助産師を育成することを目的としている。特に、高度な周産期母子医療、ハイリスク妊産褥婦への助産診断能力及び助産技術を身につけさせるために、体験型の演習や技術試験を取り入れ実践力を強化している。さらに、大学院修了の専門職業人として旺盛な探究心や豊かな人間性を身につけられるように育成することを目指している。

## 2 教育活動の現状と課題

学部の助産学教育は、3年次に助産学専攻者を決定し開始している。3年次の助産学の講義開始にあたっては、母性看護学と並行して行われており、母性看護学実習も未経験の時期であり、既習知識を活用できないなど講義進行上の問題がある。また、分娩取扱いを実施する助産学実習は8週間で、規定の実習期間では分娩例数が9例に到達できず、夜間・休日の実習と夏期休暇に1週間の延長実習を行い目標数に到達した。今年度の1学生の分娩介助数は、10例から11例で、平均10.3例であった。しかし、学部の助産学教育は時間外の実習時間が多く非常に過密であることが課題であるが、大学院教育がスタートし、今年度の履修許可者で学部教育は終了する。

大学院助産学コースは、昼間に助産学専門科目、夜間に共通科目を履修することになっている。時期によっては、昼間も夜間も講義・演習があり課題レポートが重なるなど、体力的にモチベーションを維持することが困難な場面もみられたが、個別に教員が対応をするなど工夫している。後期は、実習場での学びを学内で振り返り、対象に応じた助産ケアを思考することができ、さらに講義・演習を並行することで、助産過程の思考のプロセスもスムーズに理解することにつながった。今後は、大学院生としての思考力、自己学習力を養い人間関係スキルを向上させるための方略を検討しながらカリキュラム全体を見直していく。

## 3 科目の教育活動

### 1) 助産学概論

3年次前期

梅野 貴恵

助産の基本概念および女性をとりまく社会的背景を認識し、助産師の責務と社会変化のなかで期待される役割と重要性について、さらに助産師活動に積極的に取り組む姿勢について系統的に教授した。授業方法は主に講義形式で資料を用いて行った。女性をとりまく社会の変化や親子関係をめぐる諸問題などについては、グループディスカッションを行い、問題の中核を理解するように試み助産師に求められる役割を検討することができた。

### 2) 助産診断・技術学Ⅰ

3年次前期・後期

石岡 洋子、梅野 貴恵、樋口 幸、安部 真紀、安部 眞佐子、伊東 くり子、渡邊 しおり、  
渡邊 めぐみ

妊娠期・分娩期における母子の健康状態に関するアセスメント及びマタニティ診断とそれに基づく妊娠期の保健指導や分娩準備教育、親になる準備教育など母子とその家族への具体的な支援を教授した。妊娠期の支援については、実践で活躍する外部講師に講義を依頼した。実際の場면을想起しやすいよう、演習ではモデル人形等を積極的に活用した。評価は、講義終了後に筆記試験を実施した。

### 3) 助産診断・技術学II

3年次前期・後期

梅野 貴恵、樋口 幸、和田 美智代

女性のライフサイクルにおけるセクシュアリティに関する諸問題を理解し、マタニティサイクルにある褥婦および新生児の助産診断を行い、助産を実践するための内容を教授した。授業方法は講義と演習を組み合わせで行った。産褥の母乳育児支援は、実践で活躍する外部講師に2コマ依頼し、講義と演習を行った。学生は改めて母乳育児の重要性と助産師の支援で母乳育児を推進していくことが可能であることを学んだ。また、授乳指導の演習を取り入れ、実際の指導場面を想定し体験した。産褥期の退院指導では、3グループに分かれ、指導案・パンフレットの作成を行い、ロールプレイで発表し意見交換や自己評価を行った。新生児の演習では、「新生児蘇生法アルゴリズム2010年版」に則り、新生児モデルを用いて体験した。学生はすべての講義・演習に積極的に参加した。

### 4) 助産診断・技術学III

3年次前期・後期

佐藤 昌司、飯田 浩一、豊福 一輝、軸丸 三枝子、後藤 清美、堀 友希子、中山 裕晶、嶺 真一郎、宇都宮 隆史、谷口 一郎、堀永 孚郎、梅野 貴恵

妊娠・分娩・産褥・新生児の生理をはじめ、その管理の基礎知識と周産期における異常を判断するために、主な疾患の病態・検査・治療について教授した。また、女性の性や生殖に関連する健康問題を判断し対応できる能力を習得するために最新の生殖補助医療の現状と課題やワクチン接種等の予防も含めた子宮頸癌の動向についても教授した。すべての講義は周産期における正常・異常を判断するために必要な最新の医学的知識と技術の習得を目指して産婦人科医師・新生児科医師を講師とした。

### 5) 助産診断・技術学IV

4年次前期前半

梅野 貴恵、石岡 洋子、安部 真紀、渡邊 文子

助産学実習で活用するために、ペーパーペイシエントによる分娩期の助産過程の展開を実施させた。日本助産診断・実践研究会のマタニティ診断の概念枠組みを用いて助産診断の考え方を教授した。正常経過をたどる初産婦の事例を用いてアセスメントを自己学習したのち、グループワークを行った。全体発表の後、教員が解説することで理解を深めることができた。

分娩介助演習は、側面介助法、正面介助法をとりあげ、講義とVTR視聴で一通りの流れを確認した。その後、デモンストレーションを行い3グループに分かれて、役割（直接介助者、間接介助者）を決め、教員の指導のもとで実施した。学生は、最初は手順に沿って実施することで精一杯であったが、分娩介助技術を一通り行うことができるように、ほぼ毎日評価表を用いて練習を行った。課題としては、お互いの役割を手順通り実施することに精いっぱい、産婦への声かけなど、対象への配慮を意識した技術習得には至っていない点である。

### 6) 地域助産活動論

4年次後期

梅野 貴恵、宮崎 文子、宮崎 豊子、生野 末子、戸高 佐枝子、越田 津矢美、安部 真紀

助産師の職務、業務範囲および法的責任を理解し、助産業務を遂行するために必要な助産管理を教授した。主な内容は、管理の基本概念、助産管理の概念と助産業務管理、助産に関連する法規、助産所の経営管理と働く場の違いによる助産業務管理の特性、周産期管理システム、周産期における医療事故とリスクマネジメント、母子への災害看護等を取りあげ、オムニバス形式で実施した。

## 7) 助産学実習

### 4年次前期

梅野 貴恵、石岡 洋子、安部 真紀、渡邊 文子

助産学実習は、妊娠期から産褥1か月までの母子とその家族に対して助産診断・技術を用いて助産を展開する能力を身につけることを目的に実施した。本年度の助産学選択学生は7名であったが、医師の診断により長期療養が必要となった学生1名が実習中断を余儀なくされたため6名の履修となった。実習施設は、分娩介助ができる病院・診療所4施設と助産所2施設の計6施設である。例年通り、分娩介助目標例数を9例以上として取り組み、6名全員が10～11例実施し、平均分娩介助例数は10.3例であった。今年度は、この実習期間中に全員が就職試験を受験するなど、実習に専念できない事情があり、夜間・休日の待機等とも重なり実習への意欲が低下する時期もあったが、担当・専任教員が面談するなどし、後半意欲的に実習することができた。夏季休暇中の休養が十分ではなかったが、実習の成果を振り返ることができ、大きな学びを得られた。課題は、夜間待機実習と夏期休暇中の延長実習によって分娩介助目標例数を到達していることであるが、次年度で学部生の実習は終了する。

## 4 卒業研究

1. 聴覚障害をもつ女性の出産における助産師の支援
2. 妊婦の体重管理についての文献研究－妊娠期の体重管理における助産師の役割－
3. 一般成熟期女性向けの不妊に関する情報提供のあり方  
－不妊症患者の現状と女性誌・Webサイト情報の分析結果から－
4. 思春期における性教育に関する文献的検討  
－中学生、高校生の性教育へのニーズに焦点をあてて－
5. 退院後の母乳育児を継続させる要因に関する文献的検討  
－社会的サポートに焦点をあてて－

## 3-5-14 精神看護学研究室

### 1 教育方針

学部教育では、心の健康に焦点を当てた看護を展開するための視点、知識、技術、態度の獲得に向けて、講義・演習・実習を一貫した流れになるよう努めている。つまり、精神科領域での看護だけでなく他のさまざまな場での精神看護を視野に入れ、対象者だけでなく自分の心や治療的人間関係に目を向けることの重要性を視野に入れて、教育内容を構成している。また卒業研究に関しては、できるだけ各学生の関心に沿ったテーマで研究を進められるよう配慮している。

## 2 教育活動の現状と課題

講義では、心の健康と疾患、精神医療・精神看護の歴史と現状、治療的環境と看護の役割、社会と精神看護の関係などについて取り上げ、幅広く具体例や教材を紹介するよう努めている。演習は引き続き実習への準備性を高めることを目標として、グループワーク、体験的学習、実習施設や社会復帰施設のスタッフによる活動紹介などで構成している。実習では、不安を抱えて臨む学生も少なくないが、その不安も含めて学生が自己について振り返ることや、相手について、互いの関係性について振り返ることを支援している。ただし、精神科入院患者を対象とする看護の展開に関しては、学生により学習の深まりに差がみられた。次年度からは学内カリキュラムが全体的な変更されることや、精神科医療の地域への移行、実習施設の事情等をふまえ、病院実習と社会復帰施設での実習を各1週間行う予定であり、これに伴い実習の内容も大きく変更する方向で準備中である。卒業研究に関しては、学生の希望と計画の実現性をすり合わせながら進めることができ、学生の満足度も高いので、従来の方針を維持する予定である。

## 3 科目の教育活動

### 1) 精神看護学概論

2年次後期

影山 隆之

精神健康の概念、精神疾患と病態、治療の構造と方法、精神医療・精神看護の歴史と法制を中心に、パワーポイント資料を印刷配布（nekobusでも公開）しながら講義を行った。出席確認を兼ねて授業中に小レポートを課し（次の回に返却）、自由な感想と質問を無記名記入した用紙とともに回収して、次の回に復習と解説を追加した。ただし今年度は担当教員の健康上の理由により、他の授業と時間割を入れ替えて日程を前倒する一方で、中間試験を省略して全範囲を一括した最終試験を行った。このため、やや一方的な伝達式の講義になってしまった。講義が立て込んだ時期の学生の授業集中度は高かった。

### 2) 精神看護援助論

3年次前期前半

大賀 淳子

精神看護学の2つの柱（人々のメンタルヘルスに関わる看護と精神科領域における看護）を再確認したうえで、これらの柱にそった講義を展開した。精神科領域以外での精神看護、主な症状のアセスメントとその看護について実例を多用してイメージしやすいよう配慮した。例年のように、毎回の講義後に提出されたミニレポートへのコメントと、重要な質問意見のフィードバックを行い、理解の深化に努めた。

### 3) 精神看護学演習

3年次前期後半

影山 隆之、大賀 淳子、後藤 成人

実習への準備性を高めるために、紙上事例について看護計画を立案し、事例の理解や看護計画について討論する演習を行った。自己理解、対象者理解、関係性の理解を深める方法を学ぶために、「異和感」の対自化、プロセスレコード、自己一致に関する演習を行った。実習の場で行われている治療プログラムのうち作業療法と生活技能訓練をとりあげ、体験演習を行った。また、実習施設の看護部長や、社会復帰活動に関わるスタッフ・当事者・家族による特別講義も組み込んだ。学生の提出物から、学生の興味・関心・疑問などをうかがうことができた。

#### 4) 精神看護学実習

3年次後期前半

影山 隆之、大賀 淳子、後藤 成人、栗林 好子、桑野 紀子、井ノ口 明美

大分丘の上病院で2週間の実習を行った。病棟実習は全学生が、デイケアと訪問看護は病院側から提示された人数の学生が経験した。病棟では各学生が一人ずつ患者を受け持ち、患者に対する看護過程について指導を受けるとともに、プロセスレコードやカンファレンス等を通じて対人関係における自己の特徴について理解を深め、援助的な人間関係の構築について学んだ。ほとんどの学生にとっては精神科病棟で入院患者に接する初めての体験であり、精神障がい者の生活と精神科医療の流れについて理解を深める機会となった。ただし、対象者とのコミュニケーションに困難を感じたり、看護計画の立案にとまどったりする学生もあり、目標の達成度には個人差が見られた。

次年度は諸事情により、実習のうち1週間は社会復帰施設で行い、病棟実習は1週間となるので、両者の進め方を再計画する必要がある。

#### 4 卒業研究

1. 幻覚・妄想状態の患者と信頼関係を築く具体的行動レベルでの関わりについて：精神科入院患者に関する事例研究のレビュー
2. 看護学生のアサーショントレーニングのための教材開発 -紙媒体テキストの試作と有用性の検討-
3. 認知症高齢者への回想法の効果 -歌を取り入れた場合とそうでない場合の比較-
4. 看護学生の自殺に対する知識・態度と自殺念慮者への対応に関する横断的調査

#### 3-5-15 保健管理学研究室

##### 1 教育方針

地域社会で生活する人々の健康を支える看護職者に必要な知識と技術を習得するとともに、学生が自律して学習する態度を身につけて欲しいと考え、教育プログラムを組み立ててきた。さらに、新カリキュラム、新新カリキュラムへの移行に伴い、統合領域の科目が増え、今年度から在宅看護、看護管理学についても教授することとなった。このため、これまでの講義・演習の組み立てに加えて、組織マネジメントやケアマネジメント、地域で生活する人々の多様な健康ニーズにあった看護を提供するためには、ケースマネジメントが重要であり、社会資源の活用や他職種との連携・共同など、広くマネジメント能力を育成したいと考えている。

##### 2 教育活動の現状と課題

講義においては、今日の社会の変化に応える最新の知識の提供を目指すとともに、多様な健康ニーズと社会の要請に対応できるよう内容の検討を行ってきた。また、例えば3年次前期の在宅看護論では、1年次、2年次で学習した内容から、学生が在宅で療養する対象について具体的なイメージができるよう、実習で経験した事例をもとに退院後の計画を考えたり、小グループでの演習を取り入れるなどの工夫をした。

今後は、制度や政策を踏まえ、災害看護、在宅看護、看護管理など統合領域のカリキュラム内容を充実させる必要がある、地域の資源を活用したマネジメントができる看護職を育成していきたいと考えている。このためには、学生の学習状況に応じた教授方法を工夫しつつ、これまで学んだ内容を統合して看護ケアを提供していくことができる能力が養われるよう演習やディスカッションを組み入れたさらなる学習方法の工夫をしていきたいと考えている。

### 3 科目の教育活動

#### 1) 健康論

1年次前期前半

桜井 礼子、平野 互、井ノ口 明美、山田 淳子、坪山 明寛

健康の概念と健康に対する考え方の歴史的変遷を理解し、健康の意味を考え、健康の維持・増進の重要性について学ぶことを目的とした。さらに人々の健康ニーズを把握し、健康増進活動における看護職の役割を認識するとともに、生活習慣と健康との関連を意識し、学生が自らの生活体験を通して健康を考え、また生活習慣を見直すきっかけとなるよう講義を行った。また、今年度から早い時期に救急法を身に付けられるよう、日本赤十字社の赤十字救急法基礎講習（AEDを含む）を受講、講義と演習を通して心肺蘇生法を習得した。

#### 2) 保健福祉システム論

2年次後期

平野 互

社会資源に関する理解は単なる国家試験対策ではなく、看護職に必要な事項であり、とくに社会保障が国民のいのち・健康と生活を守るための制度的保障であることを理解する必要がある。そのため、まず「生存権」について論じたのちに、社会保険、国家扶助および保健・医療・介護・福祉を内容とする社会保障制度の概要とその意義を論じた。授業回数が15回に限定されているため、福祉・介護をはじめ高齢化社会に求められている制度を中心に講義を整理し、できるだけ体系的に理解できるよう構成した。加えて、臨床におけるルールであるインフォームド・コンセント、個人情報保護法、ノーマライゼーションの理念など、患者・障がい者の諸権利を保障するための基本事項について論じ、専門職としての行動に必要な基礎知識を獲得できるようにした。

出席した学生の学習態度は比較的良好であったが、出席率が低い学生の中にも、成績が良好でないものがあり、一つには「一夜漬け」で試験に臨むために理解までに至らない学生が多いことが推測され、講義出席への動機付けによる学習意欲の向上だけでなく、理解を支援するための講義方法について更なる工夫の要があると考えられる。

#### 4) 保健管理学演習

3年次後期後半

桜井 礼子、平野 互、井ノ口 明美、山田 淳子

保健・医療・福祉の場において、看護職の視点から集団の健康問題に対して、保健活動のひとつである健康教育の展開方法とその実践力を養うことを目指した。演習方法は、地域、学校、産業などの保健活動の場での事例を用いて、それぞれの健康問題を明確にして健康教育をどのように行うか、グループワークによる作業を行った。発表会は、各事例についてすべてのグループが教育場面のロールプレイを含むプレゼンテーションを行い、ディスカッションを通して考えることができる場とした。学生は、健康教育の対象となる個人および集団の特性を現実的にとらえアセスメントすることや、様々な条件を考慮して教育プログラムを考えるといった点について、グループワークの過程で学習できていた。また、発表会での討論ではポイントをおさえた質疑が出され、活発な意見交換ができ、学びを深めることができていたと考える。

## 5) 初期体験実習

### 1 年次前期

桜井 礼子、平野 亙、井伊 暢美、石田 佳代子、井ノ口 明美、植田 みゆき、江月 優子、岡元 愛、小田 千尋、河野 梢子、栗林 好子、桑野 紀子、後藤 成人、佐藤 弥生、田中 佳子、中垣 紀子、中釜 英里佳、堀 裕子、巻野 雄介、水野 優子、山田 淳子、麻生 優恵

初期体験実習は、3日間の施設実習と学内でのグループワーク、発表会で構成されている。施設実習を通して、看護職の活動を見学し自ら体験することにより、保健・医療・福祉の場において、看護の実践の場の広がりや看護の役割を理解すること、また対象となる人々の多様な健康ニーズを理解することを目指している。さらに、施設実習後に学内でのグループワーク、発表会を通して、今後の学習の動機付けをすることも目標としている。学生にとって第一段階の初めての臨地実習であり、学生が実習で自らが体験して学ぶプロセスも重要な課題ととらえ、学生へのオリエンテーションを充実させた。特に今年度は、ユニフォームを着用して手洗いの演習を、1日目のオリエンテーションで実施した。実習期間を通して担当教員の指導のもと、施設実習から全体発表会まで充実した実習をすすめることができた。

実習施設：20ヶ所

- ・事業所：新日本製鐵株式会社大分製鐵所
- ・保健福祉施設：大分県こころとからだの相談支援センター
- ・健診機関：大分労働衛生管理センター
- ・学校：大分県立新生養護学校、大分大学保健管理センター
- ・病院：大分県立病院、農協共済別府リハビリテーションセンター、湯布院厚生年金病院、別府発達医療センター、大分赤十字病院、国立病院機構 西別府病院、大分市医師会立アルメイダ病院、中村病院、大分三愛メディカルセンター
- ・介護老人保健施設等：介護老人保健施設 わさだケアセンター、介護老人保健施設 健寿荘、特別養護老人ホーム 百華苑、特別養護老人ホーム 寿志の里
- ・地域保健：大分市、由布市

## 4 卒業研究

1. 山村地域に住む高齢者の筋骨格系障害の実態と運動能力や生活との関連
2. 病院臨床倫理委員会の役割の実際  
～病院スタッフの認識と倫理コンサルテーションの活用～
3. 高齢者の日常生活行動および生活環境と活動能力・健康関連体力との関連
4. 訪問看護による在宅ターミナルケア支援に関する実態調査

## 3-5-16 地域看護学研究室

### 1 教育方針

看護を展開する対象として個人・集団・地域へと視点を拡大し、地域全体を包括的に捉えた看護活動を行うために必要となる基本的な思考力を身に付け、支援方法を学ぶことを目的とし、地域看護学概論、家族看護学概論、地域生活支援論、地域生活支援演習、地域看護学実習を展開している。特に地域看護学概論、地域生活支援論では、保健所や市町村で働く保健師の講義を取り入れ、地域看護活動の現状や課題について学習が深められるようにしている。担当科目および関連領域科目との講義と演習、実習の連動性を考慮して、演習や実習の内容や展開方法に工夫を凝らしている。



## 2 教育活動の現状と課題

地域看護学概論、地域生活支援論の講義では、実践活動との連動性を重視し、保健所や市町村で働く保健師の講義を取り入れている。さらに、実習の場において個人・家族、集団、地域を対象とした具体的な看護展開ができるように、学内演習では実習場面を意識した事例を用いて、ロールプレイ等を行っている。開講時期が実習直前である地域看護学演習では、地域の健康問題を踏まえた活動内容が理解できるよう、実際に学生が実習を行う市町村の既存の資料を基に、地域看護診断を行っている。また、個人・家族を対象とした支援では、新生児や生活習慣病などの事例を基に、保健師が行う家庭訪問における看護過程の技術を展開することで、地域での看護活動の視点や具体的な支援技術について理解できるよう工夫している。今後も社会の変化に対応し得る看護支援を目指して、常に教育内容を繰り返し検討していく必要がある。

## 3 科目の教育活動

### 1) 地域看護学概論

2年次後期

村嶋 幸代、赤星 琴美、藤内 修二、中野 洋子

地域における個人・家族、集団への看護活動を行うために、地域住民の主体性を重視し地域看護学の基本的な内容について講義をした。今年度より看護師養成のカリキュラムとなり、公衆衛生の概要や地域看護学の概念、プライマリ・ヘルスケアとヘルスプロモーション、地域看護活動の場と特性、地域看護活動の対象と方法（個人・家族、集団、地域社会）など地域看護の必要性を理解するために時間を十分にかけた。また、地域看護の変遷や大分県の地域看護活動についても教授することができた。常に資料やパワーポイント、DVDなどを活用することで学生が地域で活動する看護職をイメージでき、かつ、地域看護についての理解が深められるよう教授した。

### 2) 家族看護学概論

2年次後期前半

赤星 琴美、岡元 愛

家族が主体的にセルフケア能力を高め、健康的なライフスタイルを獲得していくために必要とされる家族看護の基本的な考え方と支援方法について講義と演習を行った。内容は、家族看護学の概念、家族の機能、家族を理解するための諸理論、看護職の役割、家族看護過程、家族看護過程の演習である。特に家族看護過程の演習では、家族を一つのユニットとして捉えて支援するカルガリー看護アセスメントを取り上げ、その意義や方法が理解できるようにグループワークを行い、より具体的に看護過程の展開が学習できるよう工夫した。

### 3) 家族看護学概論

3年次前期

赤星 琴美、江藤 真紀、高波 利恵、岡元 愛

家族が主体的にセルフケア能力を高め、健康的なライフスタイルを獲得していくために必要とされる家族看護の基本的な考え方と支援方法について講義と演習を行った。内容は、家族看護学の概念、家族の機能、家族を理解するための諸理論、看護職の役割、家族看護過程、家族看護過程の演習である。特に家族看護過程の演習では、家族を一つのユニットとして捉えて支援するカルガリー看護アセスメントを取り上げ、その意義や方法が理解できるようにグループワークを行い、より具体的に看護過程の展開が学習できるよう工夫した。

#### 4) 地域生活支援論

3年次後期後半

村嶋 幸代、赤星 琴美、岡元 愛、浜野 清子、中西 信代

保健所、市町村を基盤とした行政機関における地域看護活動の展開や対象別地域看護活動について講義と演習を行った。内容としては、地域看護活動の展開、地域におけるケアシステム、家庭訪問、健康相談、地区組織化活動(セルフヘルプグループの育成)、対象別地域看護活動(母子保健活動、難病保健活動、成人保健活動、高齢者保健活動、障がい者保健活動、精神保健活動、感染症保健活動、災害看護活動)、市町村における地域看護活動などであった。保健所や市町村の保健師を講師として招くことで、地域看護活動の実際や課題などについて活動方法や事例を使いながら講義を行った。また、地域看護活動の一部では演習を組み入れることで、二次データの使い方、地域の健康問題の抽出、生活の場としての地域の捉え方を教授した。さらに感染症保健活動では講義と連動させた感染症法に基づく二類感染症である結核の事例を用いた演習を実施し、保健師がおこなう看護過程の展開をすることで、具体的に支援方法について学習を行なった。演習終了後には常に学生へのフィードバックを行い、演習内容の自己評価とともに学習に深みを持たせられるように配慮した。

教育方法については、学生が知識やイメージを深められるようにパワーポイント、DVDや資料を活用した。今後の授業の進捗状況と学生の理解度に合わせた教材の選出と効果的な活用方法について検討を重ねていきたい。さらに地域保健領域での法改正や保健事業の見直しなど、常に新しい情報をすばやくキャッチし、新鮮な情報を学生へ提供しつつ、複雑化する行政機関における地域看護の役割・機能を具体的に理解できるように努力をする必要がある。

#### 5) 地域看護学演習

4年次前期前半

江藤 真紀、赤星 琴美、高波 利恵、岡元 愛、桑野 紀子、佐藤 弥生

地域看護学実習の直前に位置づけ、実習地域の二次的データを用いた地域看護診断の実施、新生児家庭訪問時の育児指導と児の計測実技、高齢者の家庭訪問のロールプレイを行った。毎時、グループワークを行う中で、学生の理解度、技術習得状況に応じて指導をした。特に二次的データを用いた実習地域の地域看護診断の結果を実習開始時に実習指導者に提出し、実習指導に反映させて頂く資料とするなど、地域看護学実習との連動性を高く維持した。さらに新生児家庭訪問での母親に関する保健指導では、知識と技術の統合の重要性を実感できるように工夫した。

#### 6) 地域看護学実習

4年次前期前半

江藤 真紀、赤星 琴美、高波 利恵、岡元 愛、桜井 礼子、平野 互、井ノ口 明美、山田 淳子、桑野 紀子、佐藤 弥生

大分県下全域の保健所(保健師支所含む)9か所、市町村保健センター及び支所21か所、合計30か所の施設に、それぞれ2～4名の学生を配置し1～2週間(大分市保健所のみ3週間)の実習を行った。

実習指導体制は、それぞれの施設の保健師が実習の現場で直接指導を行い、担当教員は各施設を巡回することで学生と実習指導者双方の状況把握を行いながら、中間カンファレンスや終了カンファレンスでの指導、記録物の指導などを行った。実習内容は、市では少なくとも1件の訪問指導と、集団を対象とした健康教育を体験できるように調整した。

## 4 卒業研究

1. 睡眠状態が転倒に及ぼす影響—身体バランスと視線行動に着目して—
2. 障がいをもつ児・者の「きょうだい」に求められる支援の現状と展望
3. 離島の高齢女性の食生活—入手する食糧とその方法—
4. 中高生の日常実態調査から考える養護教諭の中高生に対する支援のあり方

## 3-5-17 国際看護学研究室

### 1 教育方針

International nursing courses aim at the development of an understanding of global cooperation and networking of health and of nursing, and the development of an understanding of global health issues and strategies; and the realization of roles and responsibilities of nursing profession in the global era in the diverse socio-economic, cultural, and eco-geological context. The age of transculturalism and the trend of globalization of Nursing are essential today. Globalization necessitates a comparative perspective with the maintenance of holistic care and the prevention of illnesses.

Transcultural Nursing as well as International Nursing has also emphasized a comparative and holistic perspective. Nurses must move beyond an international focus of studying the relationships between two cultures to that of considering several cultures from a transcultural comparative focus. This means expanding one's views and using critical analysis by contrasting insights and knowledge from several country cultures.

Three mandatory courses for baccalaureate students, one for sophomore class and two for junior students are planned and carried out.

### 2 教育活動の現状と課題

Language used for the classroom activities: Texts, Presentations, questions and answers are carried out in English. English proficiency of the students are to be promoted.

Autonomy of the study; Detailed seminar orientation such as on the themes of self-study, references, methods of presentation, and a focus of group-study were planned and presented by the faculty at the beginning of the Quarter. Grouping of students for self-study and choice of the themes are assigned to the students for the student's autonomy by the class-leader.

Activities and autonomous participation by the students are to be promoted. Evaluation of the courses by the students; Students were provided with the opportunities to evaluate the course. Evaluation for the level of achievement of the aims and objectives of the course, contents of the course, time allotment and teaching methodology etc. were planned by the faculty and carried out by the students.

### 3 科目の教育活動

#### 1) 国際看護学概論

2年次後期後半

S. W. Lee, N. Kuwano

Objectives and contents;

- 1.To develop an understanding of the concept of, and to define international health and international nursing.
- 2.To describe the background, course and trends of international cooperation and globalization of health care.
- 3.To understand the context, scope, principles and approaches of international nursing.
- 4.To develop an understanding of the perspectives of international health issues and strategies.
- 5.To develop an understanding of the international health and nursing networks.

Contents;

- 1.Orientation and introduction to the nature of international nursing -definition, characteristics, aims-
- 2.Introduction to the nature of international nursing - relations with some factors: preparation, history-
- 3.Main nursing concepts and trends of international nursing and health - Globalization nursing, transcultural nursing, international cooperation-
- 4.Trends of international nursing and health, -Global health care problems, history, models for services-
- 5.Risks to health and life in the world - Introduction, risks factors, mortality causes, communicable disease -
- 6.Risks to health and life in the world - Non-communicable disease -
- 7.International networking of health; WHO
- 8.Wrap-up, evaluation of the course

#### 2) 国際看護比較論

3年次後期後半

S. W. Lee, N. Kuwano

Objectives:

1. To develop an understanding of the context, scope and approaches of international nursing and international health.
2. To develop a global perspective of issues and strategies on health and of nursing
3. To develop an understanding of the need for human resources development for global health and nursing.
4. To develop an understanding of the role of the international health, nursing and relief networks and the impact of international aids during war and disaster.

Contents;

1. Overview of international nursing From international health & nursing to global health perspectives Issues & challenges for health development (Poverty, Gender, Culture & Health Care, Environment)
2. Global strategies for all health Human resources
3. Work force related to ICN International Relief Organization: JICA
4. International Relief Organization Red Cross

### 3) 国際看護学演習

3年次後期後半

S. W. Lee, N. Kuwano

Objectives of the Course:

1. To develop an understanding of the concept, scope and approaches of international nursing/health in the diverse eco-geological, socio-economic, cultural and political context.
2. To develop understanding of the system of and the need for planning and development of the human resources for global nursing and health.
3. To develop an understanding of the role of the international nursing, health and relief networking.

Activities:

Orientation to the course activities includes;

Aims and objectives of the course, grouping, designation of role of each member, themes of the group study and presentations, time allotment and place allocation, references, soft and hard computer aids and equipments for the study and presentation.

Group-works / studies:

Carried out by students; grouped into 4Gr.-5Gr., according to prior planned schedule.

Themes for the group-works / studies and presentations;

- I. Health issues and strategies; of a population group
- II. Health issues and strategies; of a nation
- III. Foreign Country's Impact and context of aids by JICA

### 4 卒業研究

1. 女性のライフイベントが看護師のキャリア形成に及ぼす影響—韓国と比較して—
2. 大分県における外国人労働者の病気対処行動の実態と日本の医療に対する意識

### 3-5-18 共通科目

#### 1) 自然科学の基礎

1年次前期

甲斐 倫明、小嶋 光明、岩崎 香子、定金 香里、品川 佳満、小野 孝二、吉田 成一、首藤 信通、佐伯 圭一郎

自然科学の基礎として習得しておくべき基本的事項を学ぶ。高校までに十分に習得できなかった項目を学ぶための講義であると同時に、自然科学の考え方について理解するための講義となっている。講義内容は次の通りである。

- 1) 入学後試験 (物理、化学、生物、数学)、2) 科学的自然観とは、3) 生物：細胞とは、4) 生物：細胞分裂の仕組み、5) 生物：DNA複製の仕組み、6) 生物：遺伝子・遺伝の仕組み1、7) 生物：遺伝の仕組み2、8) 生物：タンパク質合成の仕組み、9) 生物：免疫～遺伝子と生体防御システム、10) 生物：分子発生物学、11) 生物：生物化学 (エネルギー、酵素、代謝)、12) 生物：生物化学 (化学エネルギーを獲得する経路)、13) 物理：電気と磁気、14) 物理：力とエネルギー、15) 物理：熱と圧力、16) 温度と相変化、17) 化学：物質の構造、18) 化学：物質の反応 (酸化と還元、酸とアルカリ)、19) 化学：モルと濃度計算、20) 化学：有機化合物の構造、21) 化学：人間生活と物質、22) 数学：数学の基礎 1 (基本概念)、23) 数学：数学の基礎 2 (指数と対数)、24) 数学：数学の基礎 3 (微分と積分)、25) 数学：数学の基礎 4 (確率)

## 2) 健康科学実験

2年次後期

中林 博道、岩崎 香子、安部 眞佐子、市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里、甲斐 倫明、小嶋 光明、小野 孝二、稲垣 敦、松本 佳那子(外部講師)

本健康科学実験は2年次生に実施しており、基本的な実験演習や測定を通じて、人の身体、健康に関係した事項や人間をとりまく自然環境に関する基本的な現象を体得し理解を深めることを目的としている。実験テーマは以下、10テーマからなる実験を行った。1) 解剖実習、2) 組織学実習、3) 血液検査、4) 基礎微生物学実験、5) ラットの解剖、6) 放射線、7) 測定誤差と変動、8) 染色体異常、9) 呼吸循環器系持久力の測定、10) 心電図

## 3) 総合人間学

4年次後期前半

教育研究委員会委員

さまざまな分野で活躍され、かつ造詣の深い講師の物の見方や考え方を通して、人間として、医療者として備えておくべき豊かな知識と感性を養うことをねらいとしている。なお、本科目は公開講義とし、県内に広く情報を提供して参加を促している。本年度の開講日、テーマ、講師を以下に示す。

第1回10月1日：看護師の接遇	：岡 耕一
第2回10月15日：医療と報道	：中村 通子
第3回10月22日：看護政策	：小池 智子
第4回10月29日：服は着る薬	：鶴丸 礼子
第5回11月5日：医療資格を持って起業するということ -理学療法士と看護師の挑戦-	：大平 高正
第6回11月12日：看護管理	：阿南 みと子
第7回11月19日：痰自動吸引装置の開発・起業	：徳永 修一
第8回11月26日：NP活動	：村井 恒之、光根 美保

## 3-5-19 統合科目

### 1) 看護管理学入門

4年次後期前半

桜井 礼子、伊東 朋子

看護管理の概念を理解し、看護を提供するための「しくみ」について学び、看護職として看護実践のマネジメントについて考えることを主なねらいとした。看護の対象となる人々に有効で良質な看護を提供するための方策である看護管理システムの諸相を学び、管理の概念と看護管理の変遷を振り返りながら、看護領域独自の看護管理のあり方を学び、組織の一員としての関わり方を理解することを目標とした。

今年度から看護管理学入門を担当した。看護管理の視点から、すでに学習した内容も含まれているが、系統的に看護管理について教授した。しかし、講義時間が限られるため、教授すべき内容について再検討が必要であると感じた。また、4年次後期の講義となるが、もう少し早い時期に看護管理学を学習することで、看護を実践するにあたって必要なマネジメントについて考える機会となるのではないかと思われ、教授する時期についても、今後検討する必要があると考える。

## 2) 看護の倫理

2年次後期

平野 互、小野 美喜

看護職に必要な生命倫理の知識を習得するとともに、倫理的規範に基づく判断のための思考訓練を行うことを目的に講義を行った。

講義は、「Bioethics・新しい医療倫理の展開」・「生命倫理の方法」・「Profession の責任と倫理」・「個人の尊重、人間の尊厳と自立支援」・「生殖と誕生にかかわる倫理」・「生と死に関わる倫理」・「医療従事者の責任と事故対応」の7回を平野、「看護職の価値観と文化、社会規範」を小野が担当した。講義の中で、「ケースブック医療倫理」（医学書院）をテキストに事例演習を行った。また講義時間中にミニレポートを課して講義内容の整理と出席管理を行い、ミニレポートの提出と個人課題レポートにより成績評価を行った。

今後の課題としては、学生に予習の習慣がなく、また少人数での討論が形成できないために、事例演習が双方向的な討論の場になりにくく、教員の注釈に終始するきらいのあることがあげられる。学生の主体的な講義参加を促すためのさらなる工夫が必要と感じられた。

## 3) 看護と遺伝

2年次前期前半

定金 香里、岩崎 香子、吉河 康二

講義前半では、中学・高校レベルの基礎的な遺伝の仕組みについて学習することに重点を置いた。メンデル遺伝および遺伝疾患発現、遺伝子変異が関与する疾患や体質との関連について講義し、看護師として知るべき単一遺伝子疾患の遺伝メカニズムを理解できるよう配慮した。講義後半では臨床遺伝学についての講義を行った。メンデル遺伝病、多因子遺伝病、ミトコンドリア遺伝病、および染色体異常症、遺伝学的検査について、概要を述べるとともに、実際の遺伝カウンセリングにおいてどのように応用されるのかについて述べた。

## 4) 保健活動論

3年次前期後半・後期

桜井 礼子、平野 互、井ノ口 明美、山田 淳子、高波 利恵

地域に在住する人々で、特に学校、産業の場での法令に基づいた保健活動のあり方と実際を教授した。また、看護職として個人及び集団の健康の保持・増進、疾病予防のための支援のあり方を理解するとともに、保健活動の具体的な実践方法とその評価について学ぶことができるよう講義を構成した。また、地域の救急医療の現状と災害看護活動、及び救命活動の実際を理解し、救急救命処置の一つとして心肺蘇生術の実践、AEDの使用ができるよう、日本赤十字社の協力を得て演習を行った。さらに、災害看護について授業時間を増やし、災害サイクルに応じた看護職の役割について教授した。

## 5) 基礎看護技術演習

### 3年次前期後半

桜井 礼子、藤内 美保、赤星 琴美、石岡 洋子、石田 佳代子、植田 みゆき、  
大賀 淳子、草野 淳子、桑野 紀子、秦 さと子、中釜 英里佳→堀 裕子

平成21年新カリキュラム 看護技術修得プログラム 第1段階（4段階実習前技術チェック）

実施日程は、学生オリエンテーションを6月12日に実施、練習期間は7月～8月とし、チェック日を9月3日（月）～5日（水）、6日（木）を予備日として企画・実施した。対象は3年次生74名であった。実施内容は、必須項目である「血圧測定」と、選択項目が14項目である。昨年度から実施記録が加わっており、評価方法は、①技術項目60%、②実施記録30%、③全体的取組10%の配分で実施した。

実施結果として、各技術項目の平均得点は、100点満点に換算すると、「血圧測定」は平均点89点、選択事例は14項目あり、「歩行・更衣」が最も低く76.3点、「車いす・更衣」、「導尿」が87点台で最も高かった。1回目で不合格であった学生は5名であり、再チェックを受け全員合格となった。

教員からの評価としては、全体として、学生はまじめに練習に取り組んでいたとのコメントが多い一方、事例においては技術のみが先行し、事例の対象にあった技術や適切な声掛けなどができていないとの意見もあった。

## 6) 総合看護学演習

### 4年次後期前半

市瀬 孝道、桜井 礼子、藤内 美保、赤星 琴美、石岡 洋子、石田 佳代子、植田 みゆき、  
大賀 淳子、草野 淳子、桑野 紀子、秦 さと子、中釜 英里佳→堀 裕子

4年次生後期に看護基礎教育の総仕上げとして、人間科学講座の専門基礎科目と看護の専門科目で学んだ知識・理論を有機的に統合し、適切なアセスメント能力および看護技術を提供できる能力を養うことをねらいとしている。医療・保健現場において遭遇しやすい事例（成人老年、小児、母性、精神、在宅）を通して、多角的な見方や論理的な考え方を深め、適切にアセスメントする能力を身につけること、検討した事例について、根拠に基づき、対象者のニーズや状況にあわせて判断し、安全・安楽な看護技術を提供できることを目標とした。グループワークおよびロールプレイを行い、さらに、発表後のディスカッションを通じて、自らのグループを含む全てのグループの発表を適切に評価し、学習を深めた。

グループワークやロールプレイのための事前練習には、どのグループも熱心に取り組んでおり、発表後のディスカッションでは活発な意見交換が行われ、学生にとっては学びの多い演習となったと考える。しかし、講義時間外では一部のグループでは参加率が低下し、一部の学生に負担がかかっていたり、グループ内の関係がうまくいかず、発表に支障をきたしたグループがあった。

来年度への課題としては、模擬患者役や家族役には、担当教員が前もって打ち合わせを行うこと、できれば10月中に演習が終了するように日程調節を行うこと、グループワークの指導体制やロールプレイの発表会の運営方法について意見がだされた。



## 7) 総合看護技術演習

### 4年次後期後半

市瀬 孝道、桜井 礼子、藤内 美保、赤星 琴美、石岡 洋子、石田 佳代子、植田 みゆき、大賀 淳子、草野 淳子、桑野 紀子、秦 さと子、中釜 英里佳→堀 裕子

卒業前の学生に対して、基本的な看護技術を確実に修得させ、自信を持たせることにより、臨床における看護技術実践への橋渡しの機会とすることを目的に行った。昨年度と同様に、必須項目を「蘇生法」、選択項目は「静脈血採血」、「点滴静脈内注射」、「筋肉内注射」の中から1つを学生自らが選択し、技術チェックを行った。

対象者は4年次生81名で、実施期間は、平成24年2月20日～23日とし、2月26日～27日を予備日とした。オリエンテーションは、学生用資料に沿って説明を行い、デモンストレーションやDVD視聴はせず、紹介のみ行ない、学生の自主性にまかせた。

技術チェックの実施状況は、必須項目である「蘇生法」は81名全員、選択項目は「静脈血採血」が72名、「点滴静脈内注射」が1名、「筋肉内注射」が8名であった。再チェックは2名のみで、1回目の再チェックで合格した。発熱等の理由により欠席した1名は別途チェック日を設定し実施した。

全体的にみると、学生は卒業後の就職を想定して熱心に練習する姿がみられたが、一方では、練習不足の学生も見受けられた。また、今年の学生の傾向として、教員から「生体で行ないたがらない」の意見があった。理由としては、「採血を直接するのはちょっと。人形でのチェックではダメか?」といった単に技術の不安や、グループメンバー間でひとりでもやりたがらない場合、意見を調整する難しさがあるとのことであった。また、学生用に用意した物品が大量に余る結果となった。これは、選択項目は3項目すべてを練習するようオリエンテーションでは説明したが、チェック項目のみ練習した学生が多かった可能性が考えられる。次年度は、全ての項目を練習するよう学生オリエンテーションで徹底するとともに、教員のオリエンテーションでも同様に説明を徹底していく必要があると考える。

## 8) 第一段階看護技術演習

### 2年次生後期

市瀬 孝道、桜井 礼子、藤内 美保、秦 さと子、桑野 紀子、赤星 琴美、石岡 洋子、石田 佳代子、植田 みゆき、大賀 淳子、草野 淳子、堀 裕子

2011年度（平成23年度）から本学は4年間で看護師のみの教育が始まり、看護師となる基盤の知識・技術・態度を着実に習得し、卒業後も自己研鑽しつづける能力を身につけることを目指し、新たなカリキュラムがスタートしている。この平成23年度から始まった新新カリキュラムに対応した看護技術修得プログラムが、平成24年度から始まった。

この看護技術修得プログラムは、最終の卒業時には全員が、看護実践の基本的能力として幅広い視野から人間と人間生活を理解し、確実な倫理観をもって行動する態度と姿勢を身につけること、さらに、自己研鑽しながら看護実践能力を高めていく姿勢をもつことをねらいとしている。

看護技術修得プログラムの目的は、確かな専門性と豊かな人間性を兼ね備えた資質の高い看護実践を実施できるための知識・技術・態度、および判断能力を身につける目的で、〈ファーストステップ〉、〈セカンドステップ〉、〈サードステップ〉、〈ファイナルステップ〉の4段階で構成されている。

2年次生を対象とした第一段階看護技術演習〈ファーストステップ〉は、平成24年10月～12月に実施された。

〈ファーストステップ〉の目的は、対象への日常生活援助を一人で実施できる能力を身につけることで、具体的には以下の3点を習得することが目的である。

- 1) 患者に応じた援助の根拠を明確にし、援助方法の選択ができる。
- 2) 援助の際のリスクを判断し、患者の安全・安楽を確保した実践ができる。
- 3) 患者の反応をとらえ実践に反映させるとともに、援助全体の評価を行う。

チェック内容は、「血圧測定およびアセスメント」と生活援助に焦点をあてた7事例「歩行・更衣」、「フィジカル・ストレッチャー」、「膀胱留置カテ指導時の排便介助・陰洗」、「おむつ交換・体位変換」、「車いす移乗・足浴」、「持続点滴中のシーツ・寝衣交換、口腔ケア」、「洗髪」が選定された。

実施日程は、オリエンテーションを10月4日に実施、チェック期間は12月17日（月）～20日（木）、21日（金）は予備日とした。練習期間は10月12日（金）～チェック期間前日までであった。

対象は、2年次生82名がチェックを受け、75名が1回目、7名が2回目で合格した。初めての技術チェックだったので、学生にアンケートを実施した。62%の回収で、「十分練習した」35%、「まあ練習した」が49%と取り組みは非常に良かった。実習に役立ったかについては、「大いに役立った」27%、「まあ役立った」61%と、生活援助援助技術は1年次にやっているものの2年次では行っていないので効果はあったと考える。困難だったことについて「事例で患者や場面をイメージできない」が80%、「7つの事例を練習すること」37%と戸惑いも多く、今後の検討課題である。

## 9) 在宅看護論

### 3年次前期前半

桜井 礼子、平野 亙、佐藤 弥生、井ノ口 明美、山田 淳子

疾病や障害をもちながら地域で生活する人々とその家族に対して、在宅看護を行うために必要とされる基本的な考え方や援助方法を理解することをねらいとした。新カリキュラムとなり、3年次前期に講義が早まったことから、2年次の看護アセスメント学実習と在宅看護実習Ⅰ（介護老人施設）での体験をもとに、できるだけ在宅でのイメージを持つことができるよう事例などを提示しつつ教授した。

## 10) 在宅看護学実習 I

3年前期前半

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、中釜 英里佳、堀 裕子、水野 優子、栗林 好子、巻野 雄介、河野 梢子、田中 佳子、後藤 成人、中垣 紀子

地域に在住しデイケア・デイサービスに通所している高齢者の生活支援を学ぶことを目的に実習を行った。実習施設は大分市内および由布市内にある介護老人保健施設6施設、介護老人福祉施設6施設の合計12施設とした。地域高齢者を知ること、保健・医療・福祉分野における看護職の役割と課題について考えることができた。

## 11) 在宅看護学実習 II

4年次前期

桜井 礼子、江藤 真紀、赤星 琴美、井伊 暢美、井ノ口 明美、植田 みゆき、江月 優子、岡元 愛、河野 梢子、栗林 好子、桑野 紀子、後藤 成人、佐藤 弥生、高波 利恵、田中 佳子、中垣 紀子、中釜 英里佳、堀 裕子、巻野 雄介、水野 優子、山田 淳子

在宅看護学実習 II は、訪問看護ステーションでの実習を通して、在宅で療養する人々とその家族を対象に、継続した看護が提供されるよう、社会資源を活用したケースマネジメントを行い、訪問看護の必要性和援助方法の実際、様々な機関や他職種との連携・協働について理解することを目的とした。1週間と短期間ではあるが、1事例を受け持ち、看護過程を展開し看護計画に基づいた実践と評価までを行った。また、訪問看護師に同行させていただき多くの家庭での訪問看護を体験させていただくことができた。これらの体験を通して、在宅看護における訪問看護師の役割や他の職種や機関との連携、また対象者本人と家族に対する個別的な看護の重要性について学ぶことができていた。

## 12) 総合看護学実習

4年次前期

看護系教員全員（専任教員5名）

総合看護学実習は、看護学実習の最終段階（第5段階）にあたり、各学生がこれまでの学習の達成度を評価し、これを強化、発展させ、看護職として働く環境を理解し、将来の活動につなげることをねらいとしている。総合看護学実習は、これまでの実習と異なり、実習計画から実施・評価まで学生自身が自分の手で創り上げていく実習であり、このために、1月末に学生へのオリエンテーションを実施し、2月に自身が希望する実習施設を選択し調整の上実習施設が決定され、2月末から適宜担当教員の指導を受け実習に向けた準備が行われた。また、実習開始までに実習施設の指導者と学生、担当教員により実習内容についての調整が行われたが、実習施設では、学生の希望を最大限に受け入れ、実習環境を整えていただいた。実習施設は、母性看護や在宅看護など新たに4施設に依頼をした。

実習期間中は、施設指導者に主の指導をしていただき、学生が自律した実習を行うことができていた。実習の成果についても、学生が立案した実習目標をもとに自己評価が行われ、多くの学生が目標を達成できていた。

## 13) 看護研究・卒業研究

4年次通年

教員全員

平成24年度は81名の学生が卒業研究に取り組んだ。81名の学生が17研究に配属され、それぞれ配属された研究室において教員の指示のもと、卒業研究テーマを決定して、研究を実施した。11月30日に論文要旨を提出し、12月7日に卒業論文を提出した。12月10日と11日に卒業研究発表会を実施し、それぞれの卒論生が自分の行った卒業研究を発表した。

## 3-6 大学院における教育活動

### 3-6-1 博士（前期）課程

#### 1) 看護アセスメント学特論

1年次後期

藤内 美保、高野 政子、伊東 朋子、石田 佳代子

クライアントマネージメントを遂行するために、看護職が問題解決過程を展開し、信頼性のある方法論に従い、身体的、包括的な機能評価のための情報収集の基礎理論と技法について教授した。1つは看護過程を展開する場合の看護理論による違いにより、看護診断に違いがあるか、診断過程の違いがあるかなど検討し、ディスカッションした。2つは小児のフィジカルアセスメント、看護過程の展開を行い、レポートさせた。3つ目は在宅看護における神経難病の患者理解と看護判断についての演習をした。いずれも、基礎理論を踏まえた看護判断に関する具体的適用方法の課題学習を行い、レポートおよび出席状況により評価した。

#### 2) 精神保健学特論

3年次前期

影山 隆之、大賀 淳子

広域看護学コースの履修者に対しては、地域保健・職域保健・学校保健活動としての精神保健活動につながる内容を中心に、精神健康のモデルと評価法、精神保健のシステムと活動、精神保健の法制と政策等について、講義形式で開講した。研究者コースの履修者に対しては、精神保健研究方法、自殺予防等のトピックを取り上げ、討論形式で授業を行った。

#### 3) 基盤看護学演習

1年次前後期

影山 隆之、藤内 美保、志賀 壽美代、伊東 朋子

基盤看護学演習における研究の手法について、さまざまな視点からその手技方策を具体的に解説した。4名の担当教員が専門とする内容をチュートリアル形式の演習によって展開した。「看護の安全と看護管理」、「精神健康測定法と睡眠測定法」、「看護師の臨床判断と形成過程」、「看護研究と自律神経機能評価指標」の4つを実験や提出されたレポートをもとに討議した。信頼性のある方法論を用いることの意義と看護実践におけるエビデンスを検証する場合に必要とされる研究手法について教授した。

#### 4) 成人看護学特論

1年次後期

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、伊東 朋子

平成24年度は1名が履修した。成人看護学の急性期・慢性期・終末期に関する研究、教育の動向について4名の講師がオムニバス方式で教授した。

## 5) 広域看護学演習

2 年次後期

甲斐 倫明、桜井 礼子、李 笑雨、江藤 真紀

地域看護、在宅看護、国際看護および公衆衛生領域における最新のトピックスを扱った原著の英語論文をとりあげ、各担当教員がチュートリアル方式で演習を行った。

## 6) 老年NP特論

1 年次後期後半

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、桜井 礼子、安部 眞佐子、影山 隆之、佐藤 弥生、  
宮成 美弥、木本 ちはる

EBNに基づいたケアを提供できる実践能力を高めるために、加齢に伴い生じる身体的・精神的・社会的機能の変化と、老年期の発達課題を理解し、NPとしての看護を实践する理論、方法を探究することを目的として講義を行った。NPの看護の対象者は、健康増進や疾病予防を必要とする高齢者や、慢性疾患をもち生活している高齢者であり、各健康レベルにおける看護を専門とする大学教員や臨床で活動する認定看護師などがオムニバス方式で教授した。今年度は学習を統合させる目的で、学生の身近な高齢者ケースをアセスメントシマネジメントプランを立案する課題を課しプレゼンテーションを行った。課題を当初からオリエンテーションしていたため、十分に時間をかけた取り組みができていた。また発表に対する意見交換によって各自の課題が明らかになり、今後の学生に継続する学びとなった。

## 7) 老年疾病特論

1 年次後期

麻生 哲郎、安東 優、糸永 一朗、伊奈 啓輔、兒玉 雅明、小寺 隆元、財前 博文、竹下 泰、  
藤富 豊、増井 玲子、吉留 宏明、三浦 芳子

老年期にある対象者に適切なプライマリケアを提供するために、老年期によくみられる疾病について学び、その診断・治療（検査・処方）について理解することを目的に行った。実際にNP実習を指導している医師および地域の医療機関で診療を行っている医師を、が非常勤講師となり各専門領域の講義を展開した。ただし各診療領域の時間数は限られており、すべての疾患を取り扱うことは難しく、学生の授業外の主体的な学習は必要であることは、例年通りの課題である。さらに、診療ガイドラインを用いて基本的な治療を学習することを強化していきたい。

## 8) 老年臨床薬理学特論

1 年次後期

吉田 成一、伊東 弘樹

診断後、医薬品を処方するにあたり必要となる基礎的な薬理学総論および各種疾患の治療に用いる医薬品に関し、作用、副作用、相互作用等の面を重点的に身につけるための講義を行った。医薬品の商品名と一般名の双方を理解できるよう心がけ、講義を行った。最終日に筆記試験を行い、当該科目の理解度を確認した。

全ての学生は看護職のため、自身の勤務先で使用している医薬品に関しては商品名での理解は高いものの、一般名に触れる機会がないため、習得が難しい部分が散見された。その結果、一部学生において、当該科目の修得が不十分なままであり、単位修得ができないことになった。次年度以降も同様の事態が生じないよう、こまめなフォローアップが必要となる可能性がある。

## 9) 老年診察診断学特論

1 年次前期後半・後期前半

中林 博道、岩波 栄逸、矢野 庄司、糸永 一朝、安東 優、兒玉 雅明、山口 豊、大久保 浩一、阿部 航、吉岩 あおい

老年NPコースの大学院生に対して全身の臓器・器官系ごとに老年者を対象とした診察や診断において必須の知識や技術について講義した。

## 10) 老年アセスメント学演習

2 年次前期前半

立川 洋一、麻生 哲郎、中林 博道、小野 美喜、桜井 礼子、石田 佳代子、松本 初美、福田 広美

老年看護の対象（高齢者・家族・地域社会）に対して、包括的健康アセスメントおよび看護的治療マネジメントを行うことを目的に、専門的知識と技術を修得するうえで必要なシミュレーショントレーニングを行った。トレーニングには、臨床に即した代表的な事例として、初期診療を必要とする症例と、慢性期にあり継続的な診療を必要とする症例について演習を行った。

## 11) 老年薬理学演習

2 年次前期前半

濱田 一、須崎 友紀

成人や高齢者の初期治療や症状マネジメントに使用される薬物処方について、アセスメントおよび医療処置管理が行えることを目的に、事例に適した薬物の選択やマネジメントに関する演習を行いトレーニングを行った。高齢者に生じやすい副作用や薬価についても演習を行い、これらを考慮した薬物選択について事例を通して学習を行った。

## 12) 老年実践演習

2 年次前期後半

佐藤 博、古川 雅英、山本 真、小野 孝二、小野 美喜、福田 広美、松本 初美、藤内 美保、前田 徹、竹内 山水

老年期の対象者に看護的治療マネジメントを行うための専門的知識と技術を修得するために、シミュレーショントレーニングを行うことを目的に演習を展開した。NPに必要なデブリドメント、局所麻酔、抜糸、胃ろうカテーテル交換、気管挿管、X線読影のスキルが向上する演習を展開した。学生には授業時間だけでなく課外の自主トレーニングも実施できる環境を整え全体的な到達度があった。

## 13) 老年NP実習

2 年次前期後半・後期

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、桜井 礼子、石田 佳代子、中林 博道、立川 洋一、小寺 隆元、財前 博文、増井 玲子、石丸 修、麻生 哲郎、川上 克彦、酒井 浩徳、井伊 暢美、江月 優子

プライマリ診療を行う場で実践力を身につけることを目的にNP実習を展開した。昨年度同様に、病院施設8週間、老人保健施設2週間、診療所4週間の合計12週間で構成した。7名の学生が履修し、医師、大学教員ともマンツーマンでの指導形式をとった。さらに実習前後に施設長、主指導医、看護部長、大学側との実習施設合同会議を設け、実習目標と方法の共通理解と評価の共有を行うなど大学と各施設との連携をとった。医療事故なく実習を終了することができた。

## 14) 老年NP探求セミナー

2年次後期

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、桜井 礼子、石田 佳代子、井伊 暢美、江月 優子、中林 博道

老年NP実習にて診療を担当したケースを振り返り、文献等を活用しながらケースレポートの作成をした。ケース発表会では担当教員や他学生との意見交換をとおして知識強化し、全学生との共有を促進した。さらに次段階の実習準備として介護老人保健施設での研修を設けた。セミナーによって病院実習の学びの整理ができ、医療体制や保険制度の異なる実習施設で療養する高齢者の健康問題とNP役割を考察につなげられた。

## 15) NP論

1年次前期前半

藤内 美保、小野 美喜、桜井 礼子、高野 政子、村嶋 幸代、草間 朋子

米国および韓国から学ぶNPの歴史の変遷、NPの役割と実践活動と、日本におけるNPの必要性と教育カリキュラム、NPの求められる能力について教授し、今後の自分たちの目指すNPの活動の場と実践内容について検討した。また、NP卒業生からNP活動の実際を知る機会とした。

実際に卒業生が働く臨地にて体験実習を行い、NPが組織の中でどのように役割をとり、実践しているのかを学んだ。実習終了後には学生間で討議を行い、プライマリケア領域におけるNPの役割と今後の自らの学習課題を確認できた。

## 16) フィジカルアセスメント学特論

1年次前期後半

藤内 美保、中林 博道、石田 佳代子

クライアントの包括的・全身的な身体的健康状態のアセスメント能力を高めることを目的に教授した。五感を駆使した問診、視診、触診、打診、聴診の基本技術を身につけるため、講義および演習形式で行った。全身、頭部、頸部、胸部（肺および心血管系）、腹部、直腸、四肢、神経系のフィジカルアセスメントを系統的に実施した。演習では異常な状態把握ができるようにフィジカルアセスメントモデル、高機能シミュレーター、眼や耳のシミュレーターを使用した。確実な知識・技術が身につくように中間試験と総合試験を実施した。試験は筆記試験およびOSCEを行った。OSCEの実施の後には、学生全員とOSCEのビデオを視聴しながら、振り返りを行った。

## 17) 生体機能学特論

1年次前期前半

中林 博道、安倍 眞佐子、岩崎 香子

大学院のNPならびの管理コースの学生に対して、生体（人体）の構造（解剖学）や仕組み、働き（生理学、生化学）、さらに組織学に関する講義を行った。

## 18) 病態機能学特論

1年次前期後半

市瀬 孝道、卜部 省吾

疾病の基本的事項を理解するために生体防御システムに関わる炎症、免疫やアレルギー、腫瘍、更に系統別の疾患についてハンドアウトを用いて詳しく講義した（市瀬）。また、病理標本の作成法、病気の肉眼標本やプレパラートを用いた顕微鏡観察を行い、種々の臓器に発生した炎症やがん組織・がん細胞を理解させた（卜部）。

## 19) 人間関係学特論

### 1・2年次後期

関根 剛、吉村 匠平

毎回、参加学生と関連するテーマを中心に関連書籍や文献の講読・紹介を行った。その上で、全員で討議すると共に、講師らが問題や今後の発展の方向性などについて解説をした。なお、今年度は青年期の自殺、外来看護、発達障害などを中心に検討した。夜間開講のみであった。

## 20) 看護科学研究特論

### 1・2年次前期

小嶋 光明、桜井 礼子、影山 隆之、高波 利恵、吉田 成一、松本 初美、大賀 淳子、小野 孝二、稲垣 敦、秦 さと子、首藤 信通、吉村 匠平、村嶋 幸代、関根 剛

EBNの基礎をなす看護科学研究の理論および手法を概観し、研究活動を自ら展開するために必要な事項を論じた。さらに、実際の研究例の輪読と検討により、研究活動に関する実践的能力の育成をおこなった。

1. 看護研究の意義	桜井
2. 調査研究の進め方	影山
3. 質的研究の進め方	高波
4. 実験研究の進め方	吉田
5. 文献研究の進め方	松本
6. 研究の倫理と安全	大賀
7. 文献検索の方法	小野 (孝)
8. データ解析の基礎	稲垣
9. 研究のまとめ方・発表の方法	秦
10. 研究デザイン	小嶋
11. 観察研究	首藤
12. 介入研究	吉村
13. 看護研究に有用なツール	村嶋
14. その他の研究	関根

## 21) 看護管理学特論

### 1・2年次後期

桜井 礼子、志賀 壽美代、福田 広美

看護管理特論は、保健・医療・福祉に関する制度と組織、看護管理の基本となる理論とその展開について学び、具体的な管理プロセスに対する理解を深めるとともに、質の高い看護サービス提供のために看護組織が備えるべき機能について考えることを目標とした。履修学生は管理コースとNPコースの学生であり、それぞれにこれまでのキャリアが異なっているものの、看護実践に関連して様々な場での経験を有していた。このため、これまでの自身の経験から看護管理に関する知識やスキルを学んでもらえるよう、またお互いの経験を活かしてもらえるよう、講義形式だけでなく、ディスカッションやプレゼンテーションを含めた組立とした。

主な講義・演習内容は、「看護管理の理論と管理プロセス」、「保健・医療・福祉に関する法制度」、「保健・医療・福祉施設における看護組織」、「人的管理のあり方」、「看護職の業務管理のあり方」、「看護業務と安全管理」、「看護職の専門性と倫理的責任」、「看護職の能力開発と卒後の継続教育のあり方」、「看護の質評価の方法論と看護管理研究」、「組織診断等の看護管理演習」である。



## 22) 看護理論特論

1 年次後期

李 笑雨、藤内 美保、猪俣 理恵、伊東 朋子、高野 政子

This course is an introduction to the nature of scientific explanation and inquiry of theoretical conceptualizations in nursing. Origins of and strategies for theory development in nursing were examined. Analysis of the role of theory in nursing practice and research were explored.

Class time was provided for critics for the proposals of the nursing meta-paradigm in nursing theories. Class time was also provided for groups to meet to discuss the proposals for the nursing meta- paradigm study. And addition to that, Class time was provided for groups to meet to discuss comparative theory evaluation.

The issues for discussion were those concerning how one chooses among theories.

## 23) 看護教育特論

1 年次後期後半

高野 政子、梅野 貴恵、石田 佳代子、宮崎 文子

看護を担う人材の育成が、質の高い看護教育に基礎をなすという観点から、教育的機能を理解することを目的として教授した。1)看護教育の歴史の変遷と法的基盤、2)看護教育制度、3)看護教育カリキュラム、評価など基本的な基盤とした。その後、各教授陣の領域を題材に、4)看護教育方法論を展開した。また、自己学習（教育）力や生涯教育能力の開発、継続教育を教授した。最後は「それぞれの立場で看護教育を考える」という課題を提出、発表し全員で討論した。

## 24) 看護コンサルテーション論

1・2 年次前期後半

大賀 淳子、吉村 匠平、関根 剛

看護コンサルテーションについての正しい理解を得るために、原著を用いて演習形式で概念とプロセスを確認した。その後、各論として対象者理解のための心理的アセスメント、効果的な心理教育と心理的援助の具体的方法について学んだ。最後にこれらを統括し、看護コンサルテーションの実際を演習形式で体験し、各自の課題についてディスカッションを行った。

## 25) 看護倫理学特論

1・2 年次前期

平野 亙、小野 美喜、関根 剛

倫理的思考は、すべての看護職に必要であることから、各受講者が専攻する領域での臨床に活かせることを基本とし、必要な生命倫理学の知識を習得するとともに、倫理的行動規範に基づく思考訓練を行うことを目的とした。11回の講義と3回の事例演習を行い、さらに最終回には受講生の事例報告による評価を行った。講義は、「Profession の責任と倫理」・「Bioethics・新しい医療倫理の展開」・「生命倫理の基本原則と思考方法」・「人間の尊厳と患者の権利」・「個人の尊重と自己決定権・プライバシー権」・「ケアとしての苦情解決」を平野、「倫理的行動とコミュニケーション」・「問題解決のためのコミュニケーション・スキル」を関根、「看護職の責任と倫理規程」・「看護職の価値観と倫理」、「看護場面の倫理的ジレンマとその解決ステップ」を小野が担当した。事例演習は、3名の教員各々が講義と関連付けて行い、受講生による事例報告は3名の教員すべてが出席してコメントし、評価を行った。

## 26) 看護政策論

1 年次後期前半

村嶋 幸代、小池 智子（学外講師）、甲斐 仁美（学外講師）、松原 啓子（学外講師）、  
小山 秀夫（非常勤講師）、甲斐 倫明

保健・医療・福祉を取り巻く制度や政策がどのようなプロセスで決定されるか、さらには決定された政策が看護の現場にどのように影響を及ぼすか考えるために、学外講師によりオムニバス形式で講義を行った。国政レベルで保健医療政策、看護における労働問題、大分県における看護政策、医療経済と保険、保険診療制度に仕組みに関するなど、今日における看護政策課題などの講義から学生自らが看護政策を立案するための視点を教授した。

## 27) 保健情報学特論

1・2 年次前期

佐伯 圭一郎、品川 佳満

保健医療分野において必要とされる情報入手・情報処理・情報管理の基盤となる理論と技術について、演習も交えながら教授した。各回の内容は以下の通り。

1. 情報管理・処理のためのコンピュータ技術
2. 医療・保健分野でのデータ処理
3. 情報システムの構築と管理
4. 測定の方法（誤差論、尺度構成）
5. 調査デザインとバイアス
6. 統計データ解析の実践
7. 因果推論の技法
8. EBN・EBMにおける判断の技法

## 28) 英語論文作成概論

1 年次前期前半

甲斐 倫明、影山 隆之

修士論文で英文アブストラクトを書くための基礎的事項を教授した。講義内容は次の通りである。1) 英語科学論文の特徴、2) 論文を科学的に構成する5つのステップ、3) 日本人が間違いやすい英語表現、4) 調査研究データ特有の英語表現の事例とアブストラクトの書き方、5) 実験研究データ特有の英語表現の事例とアブストラクトの書き方

## 29) Intensive English Study

1 年次前期

Gerald T. Shirley

Competence in English is important for graduate students. This course aimed at improving the basic English language ability of students through intensive practice in reading, listening and grammar. It was an eight-week course in which students practiced reading, listening and grammar problems to help them improve their basic language abilities in these important areas. The course used a Computer Assisted Language Learning (CALL) system. The CALL course is designed so that students can access and practice CALL at any time on their computers at home and in the Graduate Student Room. There were no classroom sessions in this course. Students practiced the CALL course problems during their own time. Their progress was monitored and evaluated by the instructor during the eight-week course. Individual assistance and instruction was available to each student through consultation with the instructor. The course consisted of an orientation session in the CALL classroom in which the CALL course was introduced and class guidelines were discussed. The TOEIC-IP test was administered before and after the CALL course, and it was mandatory that students take both tests.

### 30) 原書講読演習

1 年次後期

宮内 信治

共通教材として、原著論文「Outcomes of Nurse Practitioners in Acute Care: An Exploration」を教材として英文解釈の基礎に取り組んだ。受講生を2つの組に分割編成し、基礎文法コース受講生には英文法の基礎的解説を行い、演習問題の解答作業を行わせた。論文講読コース受講生には、各自の興味関心のある分野に関連する文献を学生自身に選択させ、担当教員の助言を受けながら英文の内容解釈に取り組ませた。

### 31) 研究のすすめ方

1 年次前期

小嶋 光明、桜井 礼子、影山 隆之、高波 利恵、吉田 成一、松本 初美、大賀 淳子、小野 孝二、稲垣 敦、秦 さと子、首藤 信通、吉村 匠平、村嶋 幸代、関根 剛

以下の内容で、研究を進める上で必要な技術的側面について講義し、研究活動の実践に必要な知識と技術を養った。

- |                  |        |
|------------------|--------|
| 1. 看護研究の意義       | 桜井     |
| 2. 調査研究の進め方      | 影山     |
| 3. 質的研究の進め方      | 高波     |
| 4. 実験研究の進め方      | 吉田     |
| 5. 文献研究の進め方      | 松本     |
| 6. 研究の倫理と安全      | 大賀     |
| 7. 文献検索の方法       | 小野 (孝) |
| 8. データ解析の基礎      | 稲垣     |
| 9. 研究のまとめ方・発表の方法 | 秦      |

### 32) 広域看護学概論

1 年次前期

江藤 真紀、村嶋 幸代、赤星 琴美、桑野 紀子、藤内 修二、佐藤 玉枝

地域社会におけるヘルスプロモーションおよびプライマリヘルスケアの概念やそのアプローチ方法、健康の保持・増進を支援するための理論と概念、活動方策を教授した。さらに、個人・家族・集団・地域社会の視点、家庭・職場・学校・国際社会の視点、全てのライフステージの視点という広域的に看護活動の意義、目的、機能、役割を探究した。

特に、地域保健領域での法改正や保健事業の見直しなど、常に新しい情報をすばやくキャッチし、新鮮な情報を学生へ提供しつつ、複雑化する行政機関における広域看護の役割・機能を具体的に理解できるように教授した。

### 33) 地域保健特論

1 年次前期

江藤 真紀、赤星 琴美、桑野 紀子、品川 佳満、中野 洋子、浜野 清子

地域で生活する個人・家族、集団を対象とした保健師がおこなう支援の基本的な考え方を理解し、人びとが生活している地域における看護の役割と機能を理解できるよう講義した。また、個人を対象とした支援から地域社会全体を対象とした支援までの保健師活動方法を教授した。

受講生の学習状況を把握しながら講義を行い、レポートおよび出席状況により評価した。

### 34) 産業保健特論

1 年次前期

赤星 琴美、江口 美和

労働環境および作業上の諸条件から発生しやすい疾病・障害を防止し、身体的・精神的・社会的健康と福祉を維持増進するための産業保健システム、活動、看護の位置付けと役割・具体的な活動方法をヘルスプロモーションや産業保健に関する理論やモデルを用いて教授した。

常に資料やパワーポイントなど活用することで、学生が産業保健分野で活動する看護職をイメージでき、理解が深められるよう教授した。

### 35) 健康危機管理論

1 年次前期

赤星 琴美、桜井 礼子、甲斐 倫明、藤内 修二、中野 洋子、玉井 文洋、後藤 芳子

健康障害のある個人、家族、集団を対象として保健師がおこなう支援の基本的な考え方が理解できるように講義した。さらに、地域社会における健康危機管理（災害時保健活動を含む）に関する考え方や保健師活動の展開方法および多職種連携について理解を深めるために時間を十分にかけた。

保健所の保健師を講師として招くことで、地域での健康危機管理の実際や課題などについて活動方法や事例を使いながら講義を行った。

また、大分DMATで活躍している講師による講義を通して災害発生時の対応についても学ぶようにするなど、学習に深みを持たせられるよう配慮した。

### 36) 広域看護アセスメント学演習

1 年次後期

赤星 琴美、村嶋 幸代、佐伯 圭一郎、品川 佳満、桑野 紀子

最も重要なスキルである地域看護診断を用いて地域社会の健康問題の抽出とその評価と、それに対する改善策について講義と演習を行った。既存資料の利用、地区視診をおこなうことで対象集団の理解やニーズを多面的にアセスメントし、地域の抱える健康問題、地域住民の健康課題を抽出し、支援方法を立案する演習を取り入れた。

内容としては、「地域マネジメント実習」を行う対象の市の二次データを用いながら、地域の健康問題の抽出を行った。

### 37) 健康増進技術演習

1 年次前期

関根 剛、安部 眞佐子、稲垣 敦

本講義では、発達段階や健康レベルに応じた個人・集団の健康と生活を評価し、効果的な疾病予防・健康増進の支援ができる知識と能力を養うことを目標に、運動指導、栄養指導、心理相談の3テーマから講師による講義を行った。

運動指導（合計6回）は、健康作りのための施策と運動、運動の健康効果、体力と身体活動量の測定と評価、健康作りの運動、運動メニューの作成、運動指導の心理・社会学。

栄養指導（合計7回）は、エネルギー代謝、栄養素について、消化と吸収、食事摂取基準、食事バランスガイド、ライフステージ別栄養のトピックス、食品と食品表示。

心理相談（合計8回）は、心理相談の技術（1）講義（2）傾聴技法（ロールプレイ）（3）積極技法（ロールプレイ）、グループダイナミクス（1）リーダーシップ（2）構成的エンカウンターグループ・リラクゼーション（自律訓練・行動療法）、PTSDの予防と被害者や被災者への支援、社会資源の利用とリファラーの仕方。

### 38) 健康教育特論

1 年次前期

赤星 琴美、高波 利恵、江藤 真紀、桑野 紀子

個人と集団が、自らの健康および福祉の維持増進のための主体的な取り組みが行えるための支援方法について講義を行った。必要な知識・技術を対象者に効果的に伝達できる能力を習得できるよう心がけた。

健康教育に関連した理論を教授し、教育的働きかけのあり方と保健師の地区活動の展開方法の具体的事例を挙げ、基礎知識・技術が習得できるような講義内容とした。

レポート課題を教員・学生で共有し、ディスカッションを繰り返しながら、健康教育のデモンストラーションを行い、さらに修正していくという過程を踏むことで学習を深めた。

### 39) 健康リスクアセスメント演習

1 年次後期

赤星 琴美、甲斐 倫明

個人、家族、集団が抱える潜在的な健康問題（リスク）を的確に予測し、保健師としてのリスクマネジメント、支援のあり方を習得するために講義と演習を行った。さらに、対象者または対象集団がリスクを予測し、自らリスクマネジメントができる支援方策を習得するため、具体的な事例を使用して学習を深めた。

### 40) 疫学特論

1 年次前期

佐伯 圭一郎

人間集団における健康事象の頻度分布とそれに影響を与える多様な因子を分析するために不可欠な疫学の理論と実践の手法を身につけることを目的としてテキストの講読とディスカッションを行った。さらに保健師としての活動で特に必要度の高い調査手法とその具体例について理解を深めた。

### 41) 保健統計学

1 年次前期

佐伯 圭一郎、首藤 信通

人口統計や疾病統計、保健情報など、公衆衛生活動の基礎となる集団における健康情報の調査法とその概要、ならびに分析法について、その発生源から取り扱い、解釈に至るまで体系的に扱った。また、それら健康情報を適切に整理・分析するための生物統計学の手法を教授した。内容は以下の通りである。

1. 健康情報の基盤となる理論
2. 人口統計
3. 傷病に関する統計
4. その他の保健統計
5. 統計学的基礎
6. 調査計画と推測統計手法
7. 人口統計における統計手法
8. 地域保健医療データの統計解析

## 42) 疫学・保健統計学演習

1 年次後期

佐伯 圭一郎、品川 佳満、首藤 信通

前期に開講された疫学および保健統計学の内容をさらに具体的理解し、手法を実践する能力を身につけることを目的として演習を行った。また、保健師業務に不可欠なICT技術を身につけ、情報収集・分析・発信する能力を養った。主要な内容は以下の通りである。

1. 情報処理・情報管理の基礎
2. 情報収集の技術
3. 疫学データの解析
4. 保健統計データの解析 1
5. 保健統計データの解析 2
6. グラフィカルな手法
7. シミュレーション
8. 情報発信の技術

## 43) 環境保健学特論

1 年次前期

甲斐 倫明

環境と健康との関係を理解するために、社会的ニュースを事例にして、物理的要因、化学的要因、生物的要因および社会的要因と健康との関係についての基礎概念の整理を行い、最新の研究論文を解読した。論文で抄読したテーマとしては次の通りである。1) DALYs (障害調整生存年数)、2) Global Health Riskと環境曝露、3) 生涯リスクなど健康リスクの指標、4) 日本人の受動喫煙と肺がんリスク、5) 携帯電話とがんリスク、6) IARCモノグラフ、7) ドイツ大腸菌事件、8) 放射線発がん、9) 化学発がん、10) 感染リスク

## 44) 社会保障システム特論

1 年次前期

平野 互

社会保障制度の理念と構造を理解するために、生存権の意味と法・行政など社会制度の位置づけ、社会資源としての諸制度に対する理解を深めることを目的に、講義を構築した。具体的には、法と行政の構造、財政の仕組み、社会保障理念の変遷、所得保障の諸制度、医療制度とマンパワー、公衆衛生施策の体系、高齢者の保健とケアの制度、児童福祉、障がい者福祉の諸制度である。受講生が3名であったため、ゼミのような一問一答の討論も可能であった。成績評価は、講義内容に関連して、中間と期末の2回のレポート提出により行った。

## 45) 保健医療福祉政策論

1 年次後期

平野 互、阿倍 実

保健師として各種保健事業を企画・執行するのに必要な、政策形成、企画立案の能力を涵養する目的で、保健・医療・福祉の政策理念と政策上の課題、社会保障財政の現状、保健活動と社会福祉の評価について講義し、県の保健福祉行政に長年携わってこられた阿倍講師（非常勤）から、地方保健福祉行財政の計画と実際について2回の講義をいただいた。さらにノーマライゼーションと自立支援、権利擁護について講義を行い、地域ケアシステムの構築について討論した。成績評価は、実際の大大分県の保健・医療・福祉に関する基本計画を検索、整理して課題分析を行う最終レポートの提出によって行った。

#### 46) 疾病予防学特論

##### 1 年次前期

江藤 真紀、藤内 修二、池邊 淑子、小野 重遠、増井 玲子、三浦 源太

さまざまな健康レベルにある個人、個人を取り巻く家族、集団、社会の健康状態を的確に判断・評価する能力を身につけるために、解剖・生理学、疾病病態学、フィジカルアセスメント、臨床検査法等、診断治療学などの医学的な知識を教授した。また、疾病予防のためにエビデンスに基づいた保健師としての健康教育・健康相談の実践活動ができるようにするために、必要な知識、および実践能力を習得できるように教授した。

#### 47) 実践薬理学特論

##### 1 年次前期前半

吉田 成一

生体内に投与された薬物の生体への影響（薬力学）と、生体内に入った薬物の生体処理法（薬物動態学）を理解し、薬害と有害作用、処方概要と投薬設計、治療効果と副作用についての基礎知識に関する講義を行った。特に生活習慣病を中心とした疾患（糖尿病、高脂血症、高血圧症など）に対する主な治療薬の作用機序、副作用、注意事項など、保健指導に活用できる実践薬理学の基礎知識が習得できるような講義内容とした。

本年度は受講者が2名であったため、受講者の学習状況を把握しながら講義が行えたため、高い学習効果であったと考える。

#### 48) 薬剤マネジメント学特論

##### 1 年次後期

赤星 琴美、平川 英敏

ノンコンプライアンス者とその家族への処方内容・指示に関する指導、家庭での薬物管理（残薬管理等）と服用方法などについて教授した。さらに、健康危機状態にあるハイリスク対象者への薬物の取り扱い方法や内服方法、効能などについての薬剤指導法（DOTS、抗結核薬、抗うつ・抗不安薬、催眠・鎮静剤、副腎皮質ホルモン剤などの取扱と服用方法など）など保健師の保健指導に必要な知識などについて、具体的に理解が深められるよう、資料とパワーポイントを活用した。

#### 49) 地域生活支援実習

##### 1 年次後期

村嶋 幸代、赤星 琴美、桑野 紀子

対象（個人・家族、集団）に対して、科学的根拠に基づいて健康相談、家庭訪問、健康教育等の手法を用いた健康問題の解決への支援ができる能力を養うことと、チームの一員である保健師として必要な態度を養うことを目的に実習を展開した。

市保健センターにて、実習指導保健師の指導を受けながら、3名の学生が実習を行った。実習期間5週間のうち、原則火曜と木曜を実習日とし、合計10日間で構成した。

実習前、実習中にはカンファレンスを行い、実習目標の検討、方法の共通理解と評価の共有を行うなどして連携をとった。事故なく実習を終了することができた。

## 50) 地域マネジメント実習

1 年次後期

村嶋 幸代、赤星 琴美

広域看護アセスメント学演習で作成した地域看護診断に基づいて、地域全体の健康課題の解決に向けた地域活動支援を実施し、評価ができる能力を養うことと、地区組織化活動や地区管理を通して、関係者・関係機関との連携・調整・交渉などができる能力を養うことを目的に実習を展開した。

保健所および市において、3週間の合計15日で構成した。3名の学生が履修し、実習指導保健師の指導を受けながら実習を行った。

3月15日(金)に実習施設の方々、学内の教員など35名の参加を得て、実習成果報告会を開催し、実習成果を共有した。

## 51) 助産学概論

1 年次前期

梅野 貴恵

助産の基本概念および女性をとりまく社会的背景を認識し、助産師の責務と社会変化のなかで期待される役割と重要性について、さらに助産師活動に積極的に取り組む姿勢について系統的に教授した。授業方法は主に講義形式で資料を用いて行った。女性をとりまく社会の変化や親子関係をめぐる諸問題などについては、グループディスカッションを行い、問題の中核を理解するように試み助産師に求められる役割を検討することができた。今後は、助産師としてのアイデンティティを培うことができるような授業展開を行うことが課題である。

## 52) 周産期待論

1 年次前期

佐藤 昌司、飯田 浩一、豊福 一輝、軸丸 三枝子、後藤 清美、堀 友希子、中山裕晶、梅野 貴恵

マタニティサイクルにある女性と胎児及び新生児に関する助産診断を行うために、妊娠・分娩・産褥・新生児の生理とその管理についての基礎知識、さらに周産期における異常を判断するために、主な疾患の病態・検査・治療やNICUにおける新生児管理、新生児救急蘇生法について教授した。すべての講義は周産期における正常・異常を判断するために必要な最新の医学的知識と技術の習得を目指して産婦人科医師・新生児科医師を講師とした。評価は、筆記試験を実施した。

## 53) 母子成育支援特論

1 年次前期

石岡 洋子、高野 政子、平野 互、吉村 匠平、岡本 陽子、上野 桂子、井上 祥明

母子関係をめぐる問題を中心に、家族の機能とその支援方法について講義を行った。具体的には、発達心理学からみた女性のライフサイクル、発達心理学からみた親子関係、発達心理学からみた夫婦関係、生殖医療を取り巻く社会環境とその課題、生殖医療への不妊治療をうける対象の理解、社会的支援が必要な母子への援助、家族と社会、日本と世界の子育て、子育て支援である。講義だけでなく、ゼミ形式もとり入れた。成績評価は、レポート提出により行った。



## 54) リプロダクティブ・ヘルス特論

### 1 年次後期

小川 伸二、中村 聡、嶺 真一郎、宇都宮 隆史、谷口 一郎、堀永 孚郎、梅野 貴恵

女性の性や生殖に関連する健康問題を判断し対応できる能力を習得するために、性分化の機序をはじめ、生殖器に関する携帯機能や主な疾患及び治療に対する基礎知識や最新の生殖補助医療の現状と課題、ワクチン接種等の予防も含めた子宮頸癌の動向についても教授した。すべての講義は性と生殖における正常・異常を判断するために必要な最新の医学的知識と技術の習得を目指して産婦人科医師を講師とした。評価は、筆記試験を実施した。

## 55) ウイメンズヘルス特論

### 1 年次前期

梅野 貴恵、甲斐 倫明、市瀬 孝道、影山 隆之、赤星 琴美、桑野 紀子、實崎 美奈

女性の生涯を通じた健康づくりを視野にリプロダクティブ・ヘルスを推進するために女性のライフサイクル全般における性と生殖に係わる健康問題を検討し、健康教育を実施するための知識や技術を教授した。主な内容は、講師の専門性を考慮したオムニバス形式で実施し、各講師からのレポート課題で評価した。

## 56) 妊娠期診断技術特論

### 1 年次前期

石岡 洋子、梅野 貴恵、安部 真紀、吉田 成一、安部 眞佐子、小嶋 光明、伊東 くり子、渡辺 しおり

妊娠期の経過及び生活状態に関する必要な情報を収集するためのフィジカルアセスメントや助産診断を行うための基礎的な知識及び助産技術について講義を行った。具体的には、妊娠の生理と診断に必要な情報とアセスメント、助産師外来の実際、妊娠期のフィジカルアセスメント、妊産褥婦の栄養摂取と栄養指導、妊産褥婦と薬剤、妊婦の日常生活適応への支援と保健指導、母子に対する放射線の影響、出生前診断を受ける妊婦への支援、MFICUにおける妊婦管理、ハイリスク妊婦の支援である。成績評価は、筆記試験と出席状況により行った。

## 57) 分娩期診断技術特論

### 1 年次前期

石岡 洋子、樋口 幸、生野 末子、渡邊 めぐみ

分娩期の経過及び生活状態に関する必要な情報を収集するためにフィジカルアセスメントや助産診断を行うために必要な基礎知識及び助産技術について講義を行った。具体的には、分娩開始の診断、産婦の健康生活状態の診断、胎児の発育と発育状態の診断及び胎児付属物のアセスメント、産婦の支援、ハイリスク・異常分娩時のアセスメントと対応である。成績評価は、出席状況、筆記試験により行った。

## 58) 産褥・新生児期診断技術特論

### 1 年次前期・後期

梅野 貴恵、樋口 幸、和田 美智代

産褥期にある女性と新生児、乳幼児の健康状態を包括的にアセスメントし、助産を実践するための内容を教授した。授業方法は講義と演習を組み合わせで行った。産褥の母乳育児支援は、実践で活躍する外部講師に2コマ依頼し、講義と演習を行った。また、授乳指導の演習を取り入れ、実際の指導場面を想定し体験した。産褥期の退院指導では、個人で指導案・パンフレットの作成を行い、ロールプレイで発表し意見交換や自己評価を行った。新生児の講義・演習では、NICUにおけるケアを体験し、「周産期診断技術演習」や「NICU課題探究セミナー」の導入とした。評価は、筆記試験、レポート、演習参加度から実施した。

## 59) 周産期診断技術演習

### 1 年次前期

樋口 幸、佐藤 昌司、河野 富美代

妊産褥婦と胎児・新生児の健康状態をエビデンスに基づいて診断する技術と、具体的な支援方法について教授した。

胎児の健康状態の診断については、高機能シュミレーターを用いて胎児の計測や奇形の有無などから成長・発達、健康状態の診断、異常の早期発見に関する知識と技術を習得し、OSCEで到達度チェックを行った。さらに、CTG波形の判読についても実際のモニター波形から学び、総合的に胎児の健康状態を診断できる能力を養った。また、新生児蘇生法については、学内演習で新生児蘇生のアルゴリズムに則り、新生児モデルで出生直後から気管内挿管、薬剤の投与に至るまで、様々な事例に合わせて必要な援助技術の習得を行った。その後日本周産期・新生児医学会の新生児蘇生法「一次」コースを受験し、全員合格した。さらに、マタニティーヨーガやマタニティーピクス、産褥体操など分娩や育児期の身体づくりやマイナートラブル緩和のための方法について、解剖生理も含め理論を教授したうえで、実際に体験した。

また、新生児の栄養について、桶谷式乳房ケアを行う臨床助産師を講師に招き、乳房トラブルの予防やマッサージの方法など、実際に乳房モデルや模型を使用して演習を行った。なお、様々な新生児の健康状態に合わせて対応できるよう、人工栄養の基礎知識についても教授した。学生はすべての講義・演習に積極的に参加した。

## 60) 助産保健指導演習

### 1 年次前期

石岡 洋子、樋口 幸、安部 真紀、梅野 貴恵

女性とその家族の個性性を理解し、各発達段階にある個人及び集団を対象とした、保健相談、健康教育、援助活動について演習を行った。思春期教育は、実際に近隣の小学校で実施した。成績評価は、レポート、演習内容により行った。

## 61) 助産過程展開演習

### 1 年次後期

梅野 貴恵、石岡 洋子、樋口 幸、安部 真紀

助産を実践するための基本的な助産過程の展開を、ペーパーペイシエントを用いて習得し実践への応用能力を身につけさせるために教授した。助産診断の概念・助産診断のプロセスを教授したのち、正常から逸脱した妊婦1事例、正常経過をたどる分娩期の事例1例、正常から逸脱する可能性の高い分娩期の事例1例の計3事例を用いて助産過程の展開を実施させた。事例の展開方法は各自で自己学習したのち、グループワークや各自の発表を行った。発表の後、教員が解説することで理解を深めることができていた。評価は、提出されたレポート、発表内容等から実施した。

## 62) 助産マネジメント論

1 年次後期

梅野 貴恵、宮崎 文子、宮崎 豊子、生野 末子、戸高 佐枝子、越田 津矢美、安部 真紀

助産師の職務、業務範囲および法的責任を理解し、助産業務を遂行するために必要な助産管理を教授した。主な内容は、管理の基本概念、助産管理の概念と助産業務管理、助産に関連する法規、助産所の経営管理と働く場の違いによる助産業務管理の特性、周産期管理システム、周産期における医療事故とリスクマネジメント、母子への災害看護等を取りあげ、オムニバス形式で実施した。評価は、筆記試験を実施した。

## 63) 妊娠期課題探求セミナー

1 年次後期

石岡 洋子、樋口 幸、梅野 貴恵、安部 真紀

助産診断・技術を用いて、妊産褥婦及び胎児・新生児の健康水準を診断し、科学的根拠に基づいた実践及び保健指導ができる能力を養うことをねらいとし実習を行った。産科医に直接、妊娠の診断に必要な超音波による診断方法について指導を受けた。また、助産師外来を行っている診療所の助産師や開業助産師に、安全で快適な助産ケアを提供するための一貫した継続的支援の在り方や保健指導の実践について指導を受けた。成績評価は、実習状況、レポート、記録物により行った。

## 64) NICU課題探求セミナー

1 年次後期

梅野 貴恵、樋口 幸

ハイリスク新生児の生理的特徴を理解し子宮外生活適応の過程をアセスメントし、基本的ニーズに応じた看護を展開し、母子分離された母親とその家族への親子関係成立のための支援を実施するために、大分県立総合周産期母子医療センターNICUで、2週間実習を行った。学生1名がハイリスク新生児1名を受け持ち、受持ち児と保護者のニーズに応じた看護家庭の展開を実施し、保護者への退院指導の一部を実施した。また、NICUに入院中の超低出生体重児の看護場面の見学や産科と新生児科の連携を見学することで、母子分離された両親への愛着形成促進のためのケアや助産師として果たすべき役割について学んでいた。

## 65) 特別研究（看護学専攻）

通年

指導教員：甲斐 倫明、石田 佳代子、小野 美喜

副指導教員：小嶋 光明、桑野 紀子、定金 香里、福田 広美、吉村 匠平

下記の研究テーマの論文指導を行った。

- 1) 大石 和 : 診療報酬が糖尿病患者教育に与える影響についての考察
- 2) 栗林 好子 : 看護大学生の共感性と基礎看護技術演習における患者体験との関連
- 3) 森 幹雄 : 特別養護老人ホームで働く看護職の専門職的自律性と個人要因・職場要因との関連

## 66) 課題研究 (NP)

通年

指導教員：市瀬 孝道、桜井 礼子、品川 佳満、関根 剛、吉田 成一

副指導教員：赤星 琴美、安部 眞佐子、井伊 暢美、伊東 朋子、岩崎 香子、江月 優子、大賀 淳子、高野 政子、樋口 幸

下記の研究テーマの論文指導を行なった。

- 1) 佐藤 智子 : 大規模災害時における健康課題と看護師に求められる役割とその能力について—東日本大震災に関する活動報告の文献から—
- 2) 田村 委子 : NP診療のためのCOPD患者の診察シート作成の試み
- 3) 長谷川 健美 : 訪問看護師からみた在宅終末期患者の看取りの現状と課題
- 4) 平野 優 : 脳梗塞発症の判断指標に関する検討—認知症高齢者に焦点を当てて—
- 5) 福元 幸志 : 特定看護師 (仮称) 独自の便秘症状マネジメントツールの提案

## 67) 課題研究 (管理者)

通年

指導教員：江藤 真紀、佐伯 圭一郎

副指導教員：品川 佳満、福田 広美、秦 さと子、河野 梢子

下記の研究テーマの論文指導を行った。

- 1) 畑 良子 : メタボリックシンドロームにおける効果的保健指導の検討—脂肪肝とメタボリックシンドロームの経年推移とその要因から—
- 2) 山田 淳子 : チューブ・カテーテル自己抜去時の状態と行動—インシデント報告書の分析—

## 68) 放射線健康科学演習

2年次前期

甲斐 倫明、小嶋 光明、小野 孝二

医療放射線被ばくの評価方法および健康影響推定に関する英語論文資料を抄読することを課題としてレポートを提出させ、論文ごとに解説する方式で行った。取り上げたテーマは次の通りである。1) 乳がん放射線治療に伴う食道扁平上皮がんのリスク増加、2) 米国SEERで見た乳がん放射線治療の二次がん発症、3) 早期乳がんの放射線治療に伴う二次がんに関するデンマークにおける集団調査、4) 放射線治療に伴う二次がんに関する米国における前向きコホート調査、5) PHITSコードを用いたモンテカルロシミュレーション、6) 肺がんCTスクリーニング、7) 小児CT検査による放射線被ばくと白血病と脳腫瘍リスクに関する後ろ向きコホート研究、8) 米国における最近の放射線事情 (カリフォルニアにおけるCT規制)

## 69) 放射線生物物理演習

2年次後期

甲斐 倫明、小嶋 光明、小野 孝二

放射線測定に関する実験 (ガラス線量による患者臓器線量測定) およびPHITSコードを用いたモンテカルロシミュレーションによる患者臓器線量計算を行った。実験による測定と理論による線量の推定を比較することで、それぞれのもつ特性と欠点を理解させ、実際の臨床現場における患者の線量管理について演習を通して教授した。

## 70) 英語論文作成概論

1 年次前期後半

甲斐 倫明、影山 隆之

修士論文作成に必要な英文アブストラクを書くための基礎的事項を教授した。講義内容は次の通りである。1) 英語科学論文の特徴、2) 構造化抄録および論文の構成、3) 日本人が間違いやすい英語表現、4) 調査研究データ特有の英語表現の事例、5) 実験研究データ特有の英語表現の事例、6) アブストラクトの事例、7) アブストラクツの書き方

## 71) 特別研究（健康科学専攻）

通年

指導教員：甲斐 倫明

副指導教員：小嶋 光明、小野 孝二

下記の研究テーマの論文指導を行った。

西嶋 康二郎：患者個人ボクセルファントムを用いた乳房放射線治療における臓器吸収線量の推定

## 3-6-2 博士（後期）課程

### 1) 保健情報科学特論

1 年次前期

佐伯 圭一郎、首藤 信通、品川 佳満

生物統計学を中心に疫学・情報処理について、自己の研究を遂行する能力を高めるべく、具体的な課題に基づいて学習を進めた。受講者が1名であったため、マンツーマン形式で演習を含んだ内容であった。

統計学については、自分で理解することに加えて、基本的な指導を行えるレベルを目標に進行し、目標は達成された。

### 2) 精神保健学特論

1 年次後期

影山 隆之

自殺予防とくに自殺企図者の再発防止に関する文献を読み、討論を行った。

### 3) 看護基礎科学演習

1-3 年次後期

甲斐 倫明、市瀬 孝道、安部 眞佐子、稲垣 敦、佐伯 圭一郎、影山 隆之、吉村 匠平

チュートリアル方式で、各分野の教員が課題あるいは論文を与え、レポートあるいは課題に対するプレゼンを行うことで実施し討論を行った。

#### 4) 生活支援看護学特論

1年次前期

藤内 美保、村嶋 幸代、伊東 朋子

オムニバス方式であり、生活援助に関する視点、援助技術の検証に関する視点、地域で生活する健康保持増進のための生活支援の3つの視点と博士論文のテーマに関するものと関連づけ、看護実践に必要とされる理論的枠組み、生活支援の在り方を理論展開できるための文献検索およびまとめを行った。

#### 5) 発達看護学特論

1年次後期後半

高野 政子、小野 美喜

今年を受講者が1名、小児領域の学生であった。障害児とその保護者に対する知識を深めるために、文献購読しそれをまとめて課題提出した。

#### 6) 健康運動科学特論Ⅱ

1年次前期・後期

稲垣 敦

博士論文に関連する論文精読を行った。また、博士論文の構成について検討し、メタアナリシスおよび統計解析等について、博士論文や投稿論文の指導を行った。

#### 7) 放射線健康科学特別演習

1-3年次後期

甲斐 倫明、小嶋 光明、小野 孝二

医療放射線被ばくの評価方法および健康影響推定に関する英語論文資料を抄読することを課題としてレポートを提出させ、論文ごとに解説する方式で行った。取り上げたテーマは次の通りである。1) CT検査における患者ごとの線量推定、2) 妊娠患者のCT検査による胎児線量の推定、3) CT画像から測定される頭部サイズの年齢依存性、4) 放射線治療に伴う二次がんに関する米国における前向きコホート調査、5) PHITSコードを用いたモンテカルロシミュレーション、6) 肺がんCTスクリーニング、7) 小児CT検査による放射線被ばくと白血病と脳腫瘍リスクに関する後ろ向きコホート研究、8) 米国における最近の放射線事情（カリフォルニアにおけるCT規制）

#### 8) メンタルヘルス特論Ⅱ

1年次前期

影山 隆之

精神健康のモデルと理論、産業精神保健、自殺対策等のトピックに関する文献を読み、討論を行った。

## 9) 対人援助特論Ⅱ

1年次後期

吉村 匠平

行動制御システムとしてのアタッチメント理論についての、概論書を精読し、情緒的な結びつきとして語られることの多いアタッチメントが心理学の領域でどのように理解されているのかについて学習した。その上で、国内で発行された論文を読み、アタッチメント研究の基本的なフレームワーク、アタッチメントの測定技法についての理解を深めた。

## 10) 特別研究（看護学専攻）

通年

指導教員：草間 朋子

副指導教員：藤内 美保、桜井 礼子

博士論文の指導は、指導教員による個別指導と、研究計画報告会および研究中間報告会での全教員が関わる討論によって、研究方法、結果の分析および考察などの各指導が進められた。

下記の論文は論文審査会を経て学位審査に合格し、博士（看護学）が授与された研究である。

甲斐仁美：外来において使用できる「急性の痛み」のアセスメントシートの開発

## 3-7 ボランティア活動

### 1) きょうだいクラブ

井伊 暢美

4年次生：後藤 和恵、丹野 佑希

2年次生：河野 太陽、久保 明日香、関口 翠、中島 沙也加、鍋島 由理香、原田 梨佳子、  
松坂 初美

きょうだいクラブは、自閉症のきょうだいを対象として、きょうだい達の交流やその経験を知ることが目的としている。今年度は、8月に大分農業文化公園での活動と、3月に熊本の日本一の石段に挑戦するチャレンジキャンプを行った。

### 2) 日本ALS協会大分県支部総会

伊東 朋子

卒業生：西平 俊哉

大学院生：木村 眞由美

1年次生：粟根 由美子、岩切 翼、岩本 綾香、林 美沙都、渡邊 哲生、川崎 遙華、  
工藤 瞳子、高橋 香澄、大西 茉里奈、清水 千晶、白澤 采也加、末吉 加奈、  
中山 芽生、橋本 志乃

2年次生：松坂 初美

4年次生：橋本 蓉子

第18回日本ALS協会大分県支部総会、患者・家族のつどい(平成24年5月27日)に参加した。学生は会場設営に始まり、受付、患者移送や物品販売、司会補助などを支部運営委員のメンバーとともに協同して行い、患者とも交流しながら、総会運営に貢献した。今年度は卒業生や大学院生、4年次学生など、ALSに興味と関心のある学生も参加し、会の運営に寄与した。

### 3) 第36回収穫祭ボランティア

伊東 朋子

1年次生：安倍 桜子、安倍 桃子、小野 花枝、小畑 春香、梶山 あや、梶原 里紗、  
川崎 元美、河野 沙那、川野 桃、切通 彩乃、近藤 里咲、白鞠 美希、谷川 惇也、  
中尾 祥吾、深水 志帆、福井 麻友、藤田 美香子、三浦 詩織

10月30日 福祉農場コロニー久住にて、第36回収穫祭が行われ、ボランティア活動の要請があり18名の学生が参加した。障がい者の付き添い、模擬店販売補助、ステージ発表(タキオソーラン演舞)などを行い、障がい者、保護者の方とも交流した。

### 4) 第27回Young Wing Summer Camp

高野 政子、中垣 紀子

3年次生：小野 由稀、神田 由佳、迫田 愛

2年次生：秋田 さやか

第27回Young Wing Summer Camp 2012は小児糖尿病のサマーキャンプである。8月7日～12日まで国東市国見町伊美の国見ユースホステルで開催された。参加学生は5月より月2回程度の企画実行委員会にヘルパーとして参加し、開催のために大分大学や別府大学の学生と協働して活動した。

### 5) 大分県立新生支援学校「運動会」

平野 亙

1年次生：5名

4年次生：1名

大分県立新生支援学校の「運動会」(5/26)で進行補助を担当した。

### 6) 寿志の里「七夕祭り」

河野 梢子

1年次生：12名

寿志の里の「七夕祭り」(7/4)で、入所者の移送、屋台、TAKIOソーラン踊り等を行った。

### 7) 本学「オープンキャンパス」

広報委員会

1年次生：20名

本学の「オープンキャンパス」(7/22)で、掲示物作成・掲示、受付、案内、TAKIOソーラン踊り、各種体験イベントの補助を行った。

### 8) 富士見が丘団地「夏祭り」

宮内 信治

1年次生：18名

トキハインダストリー富士見が丘店で開催された富士見が丘団地「夏祭り」(7/21-22)で、会場設営、カラオケ参加、ステージイベント参加、販売等を行った。



9) 大分大学附属特別支援学校「九重宿泊」

大賀 淳子

1年次生：15名

九重青少年の家で開催された大分大学附属特別支援学校の「九重宿泊」(7/23-25)に参加し、生徒と宿泊生活をともにしながら、食事・入浴やリクリエーション活動の指導補助を行った。

10) 大分七夕祭り

広報委員会ほか教職員

1年次生：30名

大分駅前通り周辺で開催された大分七夕祭り(8/4)で、チキリンばやし市民総踊り大会に参加した。

11) わさだケアセンター「夏祭り」

中釜 英里佳

1年次生：6名

わさだケアセンターの「夏祭り」(8/4)で、祭りの準備、入所者・利用者の手伝いを行った。

12) 健寿荘「夏祭り」

小野 美喜

1年次生：5名

老人保健施設健寿荘の「夏祭り」(8/24-25)で、飾り付け、屋台作成、車イス移送、屋台の手伝い等を行った。

13) 福祉農場コロニー久住「保護者会」

伊東 朋子

1年次生：10名

福祉農場コロニー久住の「保護者会」(9/9)で、参加者の誘導や模擬店の手伝い等を行った。

14) おおいたスポーツ広場2012

稲垣 敦、田中 佳子

1年次生：14名

コンパルホールで開催された「おおいたスポーツ広場2012」(10/8)で、参加者および選手の健康・体力チェックを行った。

15) 富士見が丘団地自治会「体育祭」

稲垣 敦、赤星 琴美

1年次生：24名

横瀬小学校で開催された富士見が丘団地自治会「体育祭」(10/21)で、参加者の健康チェックや競技の進行補助を行い、ダンス、玉入れ、リレー等に参加した。

16) 大分丘の上病院「丘の上祭」

大賀 淳子

1年次生：12名

大分丘の上病院の「丘の上祭」（10/28）で、設営や撤収、TAKIOソーラン踊り、模擬店やイベントの手伝い等を行った。

17) 大分県こころとからだの相談支援センター

「こころとからだの健康フェスティバル」

大賀 淳子

1年次生：13名

大分県こころとからだの相談支援センターの「こころとからだの健康フェスティバル」（11/4）で、TAKIOソーラン踊りやイベント補助等を行った。

18) 野津原地区「ななせの里まつり」

広報委員会、河野 梢子、大賀 淳子

1年次生：20名

みどりマザーランドで開催された野津原地区の「ななせの里まつり」（11/4）で、参加者の健康チェック、TAKIOソーラン節、大学紹介展示を行った。

19) 大分トリニータホームゲーム「健康チェック」

稲垣 敦

1年次生：4名

大銀ドームで開催された大分トリニータホームゲーム（11/4）で観客の健康チェックを行った。

20) 富士見が丘団地「文化祭」

宮内 信治

1年次生：11名

富士見が丘団地の「文化祭」（11/17-18）で、町中ギャラリーの手伝い等を行った。

21) 大分大学附属特別支援学校「学習発表会」

大賀 淳子

1年次生：5名

大分大学附属特別支援学校の「学習発表会」（12/8）で、設営や進行の手伝いを行った。

22) 佐賀関神崎校区「健康福祉祭り」

稲垣 敦、桜井 礼子、赤星 琴美

1年次生：2名

神崎小学校で開催された佐賀関神崎校区の「健康福祉祭り」（1/20）で、参加者の健康チェックを行った。

23) あいネットワーク大分「音楽会」

伊東 朋子

1年次生：5名

iichiko総合文化センターで開催されたあいネットワーク大分の「音楽会」(2/24)で、知的障害者の付き添いや介助等を行った。

24) 富士見が丘連合自治会「森林探検ウォーキング」

稲垣 敦、河野 梢子、巻野 雄介、樋口 幸、田中 佳子、岡元 愛、小田 千尋、後藤 成人

学生：3名

富士見が丘団地周辺で開催された富士見が丘連合自治会の「森林探検ウォーキング」(3/31)で、参加者の血圧測定を行い、ウォーキングに参加した。

25) 大分新発見！わくわく館「敬老健康測定会」

稲垣 敦

学生：4名

セントポルタ中央町の「大分新発見！わくわく館」で開催された「敬老健康測定会」(9/17)で、65歳以上を対象に健康チェックを行った。

26) 2012 おおいた“こどもの健康週間”

草野 淳子、中垣 紀子

4年次生：藤田 裕子、藤野 美緒、平出 彩子、飯田 好美

日本小児保健協会の取り組みの一つであるこどもの健康週間の行事に参加した。大分市高尾山公園で10月8日に開催された。野外活動で子どもたちと交流し、ロケットづくりの遊びの支援を行った。

## 4 学内セミナー

### 4-1 CALL英語学習システム講座

CALLシステムについて、授業での取り組みを将来看護の道を目指す多くの学生に知ってもらうため、7月22日（日）のオープンキャンパスにて、午前・午後1セッションずつ合計2回の模擬授業を実施した。参加した学生や保護者の方々に、実際にCALLシステムを体験してもらい、授業への理解を深めてもらった。

## 5 学内プロジェクト研究

### 5-1 プライマリケア領域NP修了後の役割拡大の効果評価に関する研究

研究者 小野 美喜、江月 優子、福田 広美、松本 初美、藤内 美保、石田 佳代子、桜井 礼子、高野 政子、甲斐 倫明、佐伯 圭一郎、宮内 信治、中林 博道、村嶋 幸代

#### 【研究目的・方法】

本研究は特定看護師が継続介入をしている老人保健施設に着目し、施設にもたらず効果を確認することを目的に、特定看護師が働くA老人保健施設（グループホーム併設）の入所者を対象とし、次の2調査を実施した。1）特定看護師の介入前・後の入所者状況調査：特定看護師の介入前（平成20～21年）と介入後（平成23～24年）の入所者約250名の診療録および施設管理簿等から入院の有無、発熱状況、褥創発生状況、高血圧対応、糖尿病対応等に関するデータを収集し比較分析した。2）入所者のQOL調査：特定看護師が関わっている入所者を対象に健康関連QOLの調査票8-Item-Short Form Health Survey（以下sf8）を用いて聞きとり調査を行った。

#### 【結果】

##### 1. 特定看護師の介入前・後の入所者状況調査

平成22年度（介入前）と平成23年度（介入後1年目）の比較では、平成22年度に症状悪化で入院した入所者は57例であり、うち8例が救急搬送された。特定看護師が介入した23年度は入院45例、うち救急搬送は5例と減少した。入院原因で最も多かったのは介入前後とも発熱であった。入所者発熱件数は介入前24件が介入後12件と介入後は年間発熱者も減少していた。介入後は尿路感染等が疑われる場合には検尿等の検査結果による補液や抗生物質投与が行われるケースが増えていた。

##### 2 入所者のQOL調査

老人保健施設およびグループホーム入所者100名のうち、聞きとり調査が可能な認知機能を維持する29名を対象とした。対象者は平均年齢87.3歳、平均入所期間17.2ヶ月、平均介護度2.6である。対象者のsf8の8項目下位尺度の得点(100点満点、得点が高いほどよりよい機能状態を示す)は身体機能40.2±14.2、日常役割機能39.7±13.3、体の痛み50.4±9.4、全体的健康観47.3±9.4、活力47.2±9.0、社会生活機能49.6±8.3、日常役割機能45.0±10.6、心の健康49.4±9.4であり、身体的サマリスコア41.9±11.0、精神的サマリスコア49.8±8.6であった。70～79歳の国民標準値（2007年調査）と慢性疾患2ヶ以上をもつサンプル値との比較では、対象者の方が体の痛みと社会生活機能においてよりよい状態が示された。

#### 【考察】

特定看護師を含むチームアプローチは、老人保健施設入所者の発熱の重篤化を予防し入院件数を低下させている。入所者のQOLは、体の痛みが同年代高齢者よりよい状態で反映しており、特定看護師を含むチームアプローチは老人保健施設入所者の医療的管理の質が向上すると推測できる。今回の報告は分析の途中経過であり、今後さらに分析検討を深める必要がある。

## 5-2 健康増進プロジェクト

研究者 稲垣 敦、桜井 礼子、赤星 琴美、河野 梢子、田中 佳子、岡元 愛、小田 千尋

### 1. 介護予防運動機能向上標準プログラム（大分県版）の効果

対象者は大分県在住の特定高齢者および要支援1・2高齢者32,724名で、3ヶ月間の本プログラム実施前後に運動機能4項目、生活面10項目等の調査を実施した。調査期間は2009年2月～2010年3月で、調査票は市町村および地域包括支援センターを介して事業所に郵送で配付・回収し、2,762件が回収された。運動機能では、男女とも全ての項目で改善が見られ、男性ではFR、TUG、女性では握力、FR、TUGで有意差が認められた。生活面では、各項目で「楽になった」あるいは「少し楽になった」を選択した者は男女ともに40%前後であった。また、1項目以上で「楽になった」または「少し楽になった」を選択した者は男性68.7%、女性67.4%で、その項目数の平均は男性で3.3項目、女性で3.1項目であった。研究デザインやサンプル、測定精度に問題はあがるが、事業所で実施しても効果の期待できる運動プログラムと考えられた。

### 2. 森林ウォーキングの自律神経活動への影響

県民の森（大分市）の「水辺の森コース」を約20分間散策した車椅子利用者のうち5名について、散策前後に耳朶から心電図5分間を記録し、R-R間隔の周波数分析をしてHF、LF、LF/HF、TPの変化を評価した。その結果、自律神経活動が亢進し、交感神経活動は抑制し、副交感神経活動は亢進し、自律神経バランスは改善された。これらの変化は、一般に認められている森林セラピーの効果と同じである。したがって、水辺の森コースの散策により、一般健常者だけではなく、車椅子利用者のリラクゼーション、ストレス低減、生活習慣病予防の効果が期待できる。

### 3. 大分市の森林セラピーロードを歩いた時の代謝特性

大分市にある8箇所（霊山、天面山、おしどり溪谷、樺ノ木山）を歩いた時のエネルギー代謝量の測定を行った。被験者は、運動習慣を有さない健康な30歳の男性であった。測定は呼気ガス代謝測定システムK4b2を用いて、心拍数、酸素摂取量、二酸化炭素排出量を測定し、Mets、エネルギー消費量、糖質動員率、脂質動員率を算出した。そして、各ロードの各区分毎に基準体重に相当する値に換算した。これらは、各ロード入口の看板やチラシ等に利用される予定である。

### 4. レジスタンストレーニングによるボディイメージ変化

心身ともに健康な男子大学生12名を対象に5週間、週2～3回の頻度で3種類のレジスタンストレーニング（プッシュ・アップ、チェア・クランチ、ブローン・ボディ・アーチ）を各自それぞれ1日1セット、オールアウトまで実施してもらい、実験期間の前後にボディイメージについての調査（SD法）および身体計測を行った。運動実施日数は $11.5 \pm 4.8$ 日であり、左上腕囲、右上腕囲、胸囲、腹直筋厚に有意な改善が認められたが、ボディイメージには有意な変化は認められなかった。しかし、運動の頻度とボディイメージおよび形態・身体組成の変化量の間に関連性が認められたことから、さらに運動を継続すれば、より明確なボディイメージの変化が生じると推測された。また、自由記述調査から、運動に対する肯定的なイメージが増しており、継続すればこれが動機づけにつながると考えられた。この点でレジスタンストレーニングは継続しやすい運動であると推測された。

### 5. テューバ演奏の精神的効果

対象は、テューバを演奏する女性1名、男性4名の健常な大学生5名であった。各被験者は普段使用している楽器を持参し、被験者1人の環境で好きな曲および嫌いな曲の2曲を演奏し、演奏前後に、気分（POMS）、唾液アミラーゼ濃度、自律神経活動（HRV）の測定を行った。その結果、日本版POMSの尺度ではT-Aのみ有意差が認められ、唾液アミラーゼ濃度では有意差はみられなかった。自律神経活動ではHR及びRRで有意差が認められた。日本版POMSのT-A（緊張-不安）の得点で、得意な曲および2曲目の演奏後に有意な低下がみられたことから、気分における不安-緊張には曲の不得意・得意の影響があり、得意な曲の演奏が不安や緊張を低下させる効果があることが示唆された。

一方、2曲目の演奏後でも有意な低下が認められたことから、合計で10分程度の演奏をすれば、曲の好き嫌いに関わらず、不安や緊張が低下することが示唆された。また、有意なHR低下及びRR間隔の増加が認められ、相対的に副交感神経活動が優位になったと推測され、これらはテューバ演奏における腹式呼吸の効果と考えられた。腹式呼吸は既に血圧降下やストレス低減の降下が明らかに

されており、ストレス性疾患の治療に活用されている。今後、管楽器の演奏についての知見を増やし、患者のストレスマネジメントやQOLの改善、看護師等の医療職者のストレスマネジメントに活用していくべきであると考え。

## 6 先端研究

### 6-1 特別支援学校で医療的ケアに従事する看護師からみた現状と課題

研究者 高野 政子

平成16年10月に文部科学省は、看護師が特別支援学校に配置されていることを前提に、研修を受けた看護師が医療的ケアを行う標準的範囲（吸引、経管栄養、導尿）などを通知した。本学は、平成17年より大分県教育委員会の企画する医療的ケア研修会をサポートしてきた。平成24年4月に介護福祉法の改正されたことに伴い、看護師が教師などに指導することで医療的ケアができるということに変更された。現在、県内11特別支援学校に13名の看護師が配置されており、毎年教員と看護師の3日間の研修会を支援している。先行文献では、導入に伴う教員、養護教諭、看護師の役割分担についての報告はあるが看護師の意見を質的に研究した論文は見当たらない。今回看護師の役割期待に対する課題を明らかにすることを目的に実施した。今後は、看護師の実践を支援するコーディネータとなるための養成プログラムを開発することを最終到達目標として取り組みたいと考えている。

### 6-2 脳疾患に対する汎用性の高いハイブリッド療法の開発

研究者 中林 博道

脳疾患の治療薬を開発しようとする際には、他の臓器と違う脳の特異性に基づく困難がある。それは「血液脳関門(blood brain barrier:BBB)」と呼ばれる、脳に備わっているシステムが薬物等の脳への移行の障壁となるということである。そこで血管内投与にて脳へ移行する細胞を利用する細胞療法と薬剤等の搬送に広く用いられてリポソームという2つの手法を融合し、キャリアー(carrier)となる細胞表面に薬剤や遺伝子を封入したリポソームを固定し、それら細胞・リポソーム複合体を脳へ搬送するという脳疾患に対するハイブリッド療法の開発を試みた。キャリアー細胞としてはマウスのミクログリア細胞株であるBV-2を用いた。またリポソームについては COATSOME® EL (日油) と ビオチン脂質 (野口研究所) を混合して作製した。リポソームとキャリアー細胞の結合には自然界における最強の結合力を誇る ビオチン・アビジン・システムを用いた。BV-2細胞表面へのビオチン付加は、Sulfo-NHS-SS-Biotin (Thermo) を用いた。結果であるが、BV-2細胞表面にビオチンが転移したのかを蛍光免疫染色にて確認した。またリポソーム表面の蛍光がBV-2細胞の周りに分布していることが示され、リポソームが細胞表面に付着していることが確認された。さらにコラーゲン・ゲル内の遊走後にも両者の結合が保持されていることが示された。



### 6-3 低線量X線の繰り返し照射によるマウス造血幹細胞のDNA損傷の動態

研究者 小嶋 光明

低線量放射線の長期連続被ばくによる発がんリスクを考えるための一環として、ヒトの放射線誘発白血病のモデルとなるC3H/HeNJcl雄マウスに1,000 mGyのX線を1回照射した場合と、100、200、500 mGyを1、10分毎に計1,000 mGyになるように繰り返し照射した場合とで、造血系細胞に生じるDNA損傷の頻度に違いがあるのか実験的に調べた。その結果、末梢血リンパ球および造血幹細胞細胞ともに、100、200、500 mGyを繰り返し照射してもDNA損傷数は非照射群と同レベルになることが分かった。

以上の本研究結果は、放射線を繰り返し照射したマウスの造血系の細胞にはDNA損傷が蓄積されないことを示した。しかし、本研究では照射24時間後のDNA損傷を観察しているため、その間にDNA損傷が染色体異常に変化し、放射線の影響が低減されていない可能性も考えられる。今後は、染色体異常を指標としても調べる必要性がある。

## 7 奨励研究

### 7-1 NICUを退院した児の保護者が受けた在宅復帰の支援の評価に関する研究

研究者 草野 淳子

我が国における、2,500g未満の低出生体重児の割合は年々増加している。低出生体重児として出生した児はNICUへの入院を必要とする。出産後すぐに児がNICUに運ばれてしまった母親は深い喪失感を語ることが多い。母親は妊娠・分娩を通して変化していく心理的な過程が中断され、対象愛の高揚が未完成のまま分娩にあたるため、特別な配慮が必要となる。母親は母子分離を体験し、危機、混乱の段階を経て経過していく。このような状態にある母親の愛着形成への過程を明らかにし、支援の方法を考える。

### 7-2 厚生労働省の統計情報 -レセプト情報等の申請について-

研究者 小野 孝二

平成23年度より厚生労働省の統計情報を試験的に実施しているレセプト情報・特定健診等情報提供の公開を利用して、年齢別のわが国のCT診断件数の推定について可能かどうか分析を試みるために申請をおこなった。平成23年度より厚生労働省の統計情報を試験的に実施しているレセプト情報・特定健診等情報提供の公開を利用して、年齢別のわが国のCT診断件数の推定について可能かどうか分析を試みるために申請をおこなった。特定健康診査及び特定保健指導の実施状況に関する情報を本学でも積極的に活用することが望まれる。今後、申請書提出の際に本報告ならびに作成書類等が参考になれば幸いである。

### 7-3 マタニティサービスシステムの違いが女性の選択に与える影響の文献レビュー（プロトコール）

研究者 猪俣 理恵

近年、日本では産科医師数の減少や安全性についての議論がなされ、産科医師の地域から都市への集約化が進められてきた。その結果、地域の産科病棟は閉鎖され出産場所が減少している。産科医師が少ない地域では、連携医療機関を確保できない助産所は閉鎖を余儀なくされ、出産場所の減少に追い打ちをかけている。他の先進諸国においても大病院への集約化はみられるが、助産師を中心に女性とその家族が選択した場所で出産できるようなサービスを提供している。そこで、先進諸国における主なマタニティサービスシステムのモデルと出産における女性とその家族の選択・女性中心の援助について、その関連を明らかにするためにIntegrative Reviewの手法を用いたSystematic Reviewを行う計画である。

## 8 インターネットジャーナル「看護科学研究」

平成11年12月に「大分看護科学研究」として創刊し、平成17年に名称変更したインターネットジャーナル「看護科学研究」は、第10巻第1号が平成24年6月、第10巻第2号が11月に刊行された。刊行された論文と執筆要綱等は、本学ホームページ

(<http://www.oita-nhs.ac.jp/journal/index.html>) に公開されており、誰でも無料で投稿、購読することができる。

### 第10巻第1号 目次

#### 巻頭言

「看護科学研究」の発展に向けて

太田 勝正

#### 資料

Prevalence of home visiting nurse service clients who received insufficient number of nurse visits in the Japanese long-term care insurance

Takashi Naruse, Atsuko Taguchi, Satoko Nagata,  
Yuki Kuwahara, Sachiyo Murashima

#### トピックス

修了生の現状からみた訪問看護認定看護師の活動の場と役割についての検討

佐藤 弥生、桜井 礼子

#### 大分県立看護科学大学第13回看護国際フォーラム

「米国の看護の将来：NPに着目して」(Anne Thomas先生の講演から)

小野 美喜

「韓国の看護の将来—NPに着目して—」(Dr. Kyung-Rim Shinの講演から)

猪俣 理恵

#### 企画

大分県立看護科学大学 特別記念講演(草間朋子学長退任記念)講演録

「チーム医療における特定看護師への期待」

福井 次矢

「看護の質向上のための大学教育・大学院教育」

草間 朋子

### 第10巻第2号 目次

#### 研究報告

新人看護師の共感の理解の特徴と患者に共感的態度で接することに困難を感じた経験について

籠 玲子、太田 勝正

#### 資料

介護予防運動「お元気しゃんしゃん体操」の効果

稲垣 敦、桜井 礼子、平野 互、高波 利恵、溝口 和佳、岩崎 香子  
品川 佳満、中山 晃志、影山 隆之、草間 朋子

#### ケースレポート

ココア投与中断に伴って生じた長期経腸栄養高齢入所者の貧血に対するココア再投与の有効性  
馬場 才悟、久木原 博子、石橋 実、諸隈 豊子、檀上 晶子

## 9 業績

### 著書

池末 亨、伊東 朋子、大関 京子、大橋 泰久、奥山 則子、高野 正枝、  
直井 道子、福村 知加子、安岡 芙美子  
「家庭看護介護福祉」，実教出版，2012

## 研究論文

井伊 暢美, ある認知症高齢者の看取りにおける宅老所スタッフの関わり, 訪問看護と介護, Vol.17, No.6, 2012.

石岡 洋子, 平野 互, 小野 美喜, 看護学生を対象にした質問紙調査を行う際の倫理的配慮に関する実態調査ー看護教員の倫理的配慮に関する認識と実践ー, 日本看護倫理学会誌, 5(1), 12-21, 2013.

A. Yasuda, K. Inoue, C. Sanbongi, R. Yanagisawa, T. Ichinose, M. Tanaka, T. Yoshikawa and H. Takano, Dietary supplementation with fructooligosaccharides attenuates allergic peritonitis in mice., *Biochem Biophys Res Commun*, 422(4), 546-550, 2012.

R. Yanagisawa, E. Warabi, K. Inoue, T. Yanagawa, E. Koike, T. Ichinose, H. Takano and T. Ishii, Peroxiredoxin I null mice exhibits reduced acute lung inflammation following ozone exposure., *J Biochem*, 52 (6), 595-601, 2012.

M. Tanaka, Y. Aoki, H. Takano, Y. Fujitani, S. Hirano, R. Nakamura, Y. Sone, M. Kiyono, T. Ichinose, T. Itoh and K. Inoue, Effects of exposure to nanoparticle-rich or -depleted diesel exhaust on allergic pathophysiology in the murine lung., *J Toxicol Sci*, 38(1), 35-48, 2013.

M. He, T. Ichinose, S. Yoshida, H. Takano, M. Nishikawa, I. Mori, G. Sun and T. Shibamoto, Aggravating effects of Asian sand dust on lung eosinophilia in mice immunized beforehand by ovalbumin., *Inhal Toxicol*, 24(11), 751-761, 2012.

伊東 朋子, 宮腰 由紀子, 小林 敏生, 品川 佳満, 筋萎縮性側索硬化症患者への望ましい睡眠支援のために, 日本難病看護学会, 17(3), 243-253, 2013.

稲垣 敦, 桜井 礼子, 平野 互, 高波 利恵, 溝口 和佳, 岩崎 香子, 品川 佳満, 中山 晃志, 影山 隆之, 草間 朋子, 介護予防運動「お元気しゃんしゃん体操」の効果, 看護科学研究, 10(2), 2012.

河野 来未, 梅野 貴恵, 助産師によるいのちと性の教育を受講した高校生の受け止め方と自尊感情, 助産師, 66 (2), 33-35, 2012.

小嶋 光明, 甲斐倫明, 低線量域における線量率効果～二動原体染色体発生頻度に着目して～, 放射線生物研究, 47 (4), 347-360, 2012.

小野 美喜, 看護師特定能力認証制度について, 日本医事新報, No4614, 100-101, 2012.

小野 美喜, 藤内 美保, 地域で求められる人材育成に向けて, 看護, 64(13), 52-55, 2012.

小野 美喜, 大分県立看護科学大学 第13回看護国際フォーラム「米国の看護の将来: NPに着目して」(Anne Thomas先生の講演から), 看護科学研究, vol. 10, 14-16, 2012.

甲斐倫明, 低線量・低線量率のリスク推定のための理論とデータ, 放射線生物研究, 47 (4), 379-393, 2012.

影山 隆之, メンタルヘルスリテラシーを育てる保健体育教育と自殺予防教育, 学校メンタルヘルス, 14, 132-134, 2012.

堤 雅恵, 小林 敏生, 影山 隆之, 要介護高齢者の睡眠評価における睡眠日誌の有用性 アクチグラムとの同時測定による検討, 日本看護研究学会雑誌, 35(4), 83-89, 2012.

神村 英利, 影山 隆之, 薬学部学生 of ストレス対処特性と実務実習におけるストレス, 産業ストレス研究, 19, 383-387, 2012.

杉本 圭以子, 影山 隆之, 自傷患者に対する救急看護師の関わりの実態と関連要因, 日本看護科学会雑誌, 33, 52-60, 2013.

柳井 晴夫, 亀井 智子, 松谷 美和子, 奥 裕美, 麻原 きよみ, 井部 俊子, 及川 郁子, 大久保 暢子, 片岡 弥恵子, 萱間 真美, 鶴若 麻理, 林 直子, 森 明子, 吉田 千文, 伊藤 圭, 小口 江美子, 菅田 勝也, 島津 明人, 佐伯 圭一郎, 西川 浩昭, 臨地実習生の質の確保のための看護系大学共用試験(CBT)の開発的研究 CBT試験問題の作成とそのモニター試験結果の統計的分析を中心にして, 聖路加看護大学紀要, 38, p1-9, 2012.

桜井 礼子, 小林 敏生, ウズベキスタン共和国における地域の健康課題と地域診療所で働く看護職の役割, 保健の科学, 55(4), 281-286, 2013.

N. Shutoh, M. Hyodo, T. Pavlenko and T. Seo, Constrained linear discriminant rule via the Studentized classification statistic based on monotone missing data, SUT Journal of Mathematics, 48 (1), 55-69, 2012.

N. Shutoh and S. Takahashi, Profile analysis in high-dimensional data, Technical Report Hiroshima Statistical Research Group, 12 (12), 2012.

藤内 美保, 桜井 礼子, 草間 朋子, 在宅終末期医療に関わる訪問看護師の「死亡確認」に関する実態・提案 特定能力認証看護師の医行為, 看護管理, 22(4), 324-332, 2012.

山田 剛弘, 藤内 美保, 介助動作の身体負担軽減のための効率の良い上肢の力発揮の検証 生理学的視点からの改良, 看護実践の科学, 37 (5), 73-80, 2012.

H. Nakabayashi and K. Shimizu, Stereoscopic virtual realistic surgical simulation in intracranial aneurysms., Neurology India, 60, 191-197, 2012.

H. Nakabayashi and K. Shimizu, Involvement of Akt/NF- $\kappa$ B pathway in antitumor effects of parthenolide on glioblastoma cells in vitro and in vivo., BMC Cancer, 12, 453, 2012.

渡辺めぐみ, 林猪都子, 乾つぶら, 院内助産開設に関わる要素 院内助産モデルケースの聞き取り調査から, 日本助産学会誌, 26(2), 256-263, 2012.

Y. Tamada, S. Kanda, A. Yoshidome, I. Hayashi, M. Miyake and T. Nishiyama, Diagnosis of active tuberculosis using MPB64., a specific antigen of Mycobacterium bovis, 56, 740-747, 2012.

宮内 信治, Factors influencing pitch movement choices in different recordings of the same scene in Sense and Sensibility, 日本英語音声学会 学術論文集 「英語音声学」, 16, 137-145, 2012.

Y. Miki, M. Gregg, A. Arimoto, S. Nagata and S. Murashima, Evaluation of doctoral nursing programs by doctoral students in Japan: Cross-sectional questionnaire survey., Japan Journal of Nursing Science, 9(2), 160-168, 2012.

T. Naruse, A. Taguchi, Y. Kuwahara, S. Nagata, I. Watai and S. Murashima, Relationship between perceived time pressure during visits and burnout among home visiting nurses in Japan., Japan Journal of Nursing Science, 9(2), 185-194, 2012.

S. Suzuki, S. Nagata, J. Zerwekh, T. Yamaguchi, H. Tomura, Y. Takemura and S. Murashima, Effects of a multi-method discharge planning educational program for medical staff nurses., Japan Journal of Nursing Science, 9(2), 201-215, 2012.

S. Nagata, H. Tomura and S. Murashima, Expansion of discharge planning system in Japan: Comparison of results of a nationwide survey between 2001 and 2010., BMC Health services Research 2012, 12, 237, 2012.

- T. Naruse, A. Taguchi, S. Nagata, Y. Kuwahara and S. Murashima, Prevalence of home visiting nurse service clients who received insufficient number of nurse visits in the Japanese long-term care insurance., *Japanese Journal of Nursing and Health Sciences*, 10, 2-8, 2012.
- K. Hotta, R. Murayama, M. Yoshida, H. Hyodo, K. Kobayashi, M. Haruna, M. Matsuzaki, S. Kozuma and S. Murashima., Diagnosis of anal sphincter defects by three-dimensional transperineal ultrasound in women with anal incontinence., *Journal of Medical Ultrasonics*, 39 (4), 241-247, 2012.
- M. Yoshida, R. Murayama, M. Haruna, M. Matsuzaki, K. Yoshimura, S. Murashima and S. Kozuma, Longitudinal comparison study of pelvic floor function between women with and without stress urinary incontinence after vaginal delivery., *Journal of Medical Ultrasonics*., 2012.
- H. Murayama, A. Taguchi and S. Murashima, Exploring the ideal combination of activity satisfaction and burden among health promotion volunteers: a cross-sectional study in Japan., *BMC Public Health*, 2012.
- H. Murayama, T. Yamaguchi, S. Nagata and S. Murashima, The effects of an intervention program for promoting interorganizational network building between multidisciplinary agencies and community-based organizations: a cluster trial in Japan., *BMC Public Health*, 12, 178, 2012.
- M. Shiraishi, M. Haruna, M. Matsuzaki, E. Ota, R. Murayama, E. Watanabe, S. Sasaki and S. Murashima, Association between oxidized LDL and folate during pregnancy., *Biological Research For Nursing*, 2013.
- M. Nomura, R. Okamoto, M. Tanaka, M. Okuda, K. Koide, S. Iwamoto, E. Kusano, M. Saito, M. Nishida, N. Jojima, E. Kishi, Y. Sakai, C. Teramoto, T. Tada, R. Suzuki and S. Murashima, Community Profile of the Tohoku Earthquake 2011: Affected Areas as Perceived by External PHNs., *Journal of Shikoku Public Health Society*, 58(1), 119-125, 2013.
- M. Nomura, R. Okamoto, K. Koide, S. Iwamoto, E. Kusano, M. Saito, M. Nishida, T. Sao, T. Kurata, R. Kan, N. Jojima, E. Kishi, Y. Sakai, C. Teramoto, T. Tada, R. Suzuki and S. Murashima, Health Concerns in Tsunami-Affected Areas as Perceived by External PHNs in Japan 2011, *Journal of Shikoku Public Health Society*, 58(1), 126-133, 2013.
- T. Tada, R. Okamoto, S. Murahima, R. Suzuki, Y. Sakai, E. Kishi, M. Nomura, T. Jojima, M. Nishida, K. Koide, C. Teramoto, E. Kusano, S. Iwamoto and M. Saito, The Health and Livelihood of Seniors Affected by the Tsunami after the Great East Japan Earthquake., *Journal of Shikoku Public Health Society*, 58(1), 134-140, 2013.
- Y. Okamoto, N. Motomura, S. Murashima and S. Takamoto, Anxiety and depression after thoracic aortic surgery or coronary artery bypass., *Asian Cardiovascular & Thoracic Annals*, 21(1), 22-30, 2013.
- Y. Kuwahara, S. Nagata, A. Taguchi, T. Naruse, H. Kawaguchi and S. Murashima, Measuring the efficiencies of visiting nurse service agencies using data envelopment analysis., *Health Care Management Science*, 2013.
- T. Naruse, A. Taguchi, Y. Kuwahara, S. Nagata and S. Murashima, Effects of non-nursing assistance on home visit nurses' time spent in Japan: one group repeated pretest-posttest trial., *The Home Health Care Management & Practice*, 25(1), 18-22, 2013.
- S. Nagata, A. Taguchi, T. Naruse, Y. Kuwahara and S. Murashima, Unmet needs for visiting nurse services among older people after hospital discharge and related factors in Japan: Cross-sectional survey., *Japan Journal of Nursing Science*, 2013.
- T. Naruse, M. Sakai, I. Watai, A. Taguchi, Y. Kuwahara, S. Nagata and S. Murashima, Individual and organizational factors related to work engagement among home visiting nurses in Japan., *Japan Journal of Nursing Sciences*, 2013.
- T. Shimamura, A. Taguchi, S. Kobayashi, S. Nagata, K. Magilvy and S. Murashima, The strategies of Japanese public health nurses in medication support for high-risk tuberculosis patients., *Public Health Nursing*, 2012.
- Y. Kuwahara, S. Nagata, A. Taguchi, T. Naruse, H. Kawaguchi and S. Murashima, Measuring the efficiencies of visiting nurse service agencies using data envelopment analysis., *Health Care Management Science*, 2013.
- 原 裕樹, 永田 智子, 田口 敦子, 成瀬 昂, 八巻 心太郎, 田上 豊, 村嶋 幸代, 「直接・間接業務時間比」からみた訪問看護ステーション利用者の特徴, *日本医療・病院管理学会誌*, 49(4), 37-47, 2012.

村嶋 幸代, 田口 敦子, 看護がすすめる地域包括ケア, 保健の科学, 54(11), 760-765, 2012.

大橋 由基, 渡井 いずみ, 村嶋 幸代, 壮年期国保被保険者における特定健診未受診者の受診意思 家庭訪問・個別面接を通して, 日本地域看護学会誌, 15(2), 64-72, 2012.

草野 恵美子, 大浦 まり子, 野村 美千江, 西田 真寿美, 岡本 玲子, 小出 恵子, 村嶋 幸代, 鈴木 るり子, 酒井 陽子, 岸 恵美子, 多田 敏子, 城島 啓子, 寺本 千恵, 岩本 里織, 野村 美紀, 東日本大震災で被災した医療・福祉施設が遭遇した困難と活かされた強みおよび今後の課題, 大阪医科大学看護研究雑誌, 3, 120-128, 2013.

吉岡 京子, 村嶋 幸代, 保健師が事業化する際の困難およびその解決策と事業提供経験との関連 保健師勤務年数群別の比較, 日本公衆衛生雑誌, 60(1), 21-29, 2013.

村嶋 幸代, 藤内 美保, 小野 美喜, 在宅・居宅で活躍が期待される「特定の医行為ができる看護師, 訪問看護と介護, 17(12), 1047-1053, 2012.

S. Yoshida, H. Takano, M. Nishikawa, M. He and T. Ichinose, Effects of fetal exposure to urban particulate matter on the immune system of male mouse offspring., Biol Pharm Bull, 35 (8), 1238-1243, 2012.



## その他の論文

小野 美喜, 藤内 美保, 看護師特定能力養成調査試行事業養成課程教員の立場から 地域医療で求められる人材育成に向けて, 看護, 64 (13), 52-55, 2012.

小野 美喜, 福田広美, プライマリケア領域の特定看護師の養成教育の実際, 厚生福祉, 5925号, 10 13, 2012.

甲斐 倫明, 放射線・放射性物質による健康影響とそのリスク, 環境と健康, 25(3), 341-352, 2012.

甲斐 倫明, 放射線発がんリスクの推定 (第1回) , Isotope News, No.695, 67-70, 2012.

甲斐 倫明, 放射線発がんリスクの推定 (第2回) , isotope News, No.696, 79-82, 2012.

甲斐 倫明, 放射線発がんリスクの推定 (第3回) , Isotope News, No.697, 57-62, 2012.

桜井 礼子, 藤内 美保, 菊池 志津子, 草間 朋子, 教育が看護の現場を変える臨床現場に定着しつつある CON(Client-Oriented Nursing) ウズベキスタンでのJICA看護教育改善プロジェクトの成果(解説), 看護教育, 53 (7), 588-593, 2012.

高野 政子, 福田 広美, “特定能力”をもった看護師が働く職場, 日本において特定能力認証看護師が誕生するまで—NPの養成開始までの足跡と制度化に向けての活動NP養成開始に向けての活動, なぜNPの養成教育に取り組んだか, 看護管理, 22巻, 302-306, 2012.

藤内 美保, 小野 美喜, 特定能力認証看護師の役割と養成教育の実際, 看護管理, 22巻, 4号, 296-300, 2012.

平野 互, 「患者の権利」に関する規定整備の実態調査をしました, 患者の権利オンブズマンNEWS Letter 「患者の権利」, 78号, 2013.

阪井 万裕, 成瀬 昂, 渡井 いずみ, 有本 梓, 村嶋 幸代, 看護師のワーク・エンゲージメントに関する文献レビュー, 日本看護科学会誌, 32 (4), 71-78, 2012.

村嶋 幸代, 藤内 美保, 小野 美喜, これからの訪問看護に必要な「人材」とは在宅・居宅で活躍が期待される「特定の医行為ができる看護師」, 訪問看護と介護, 17 (12), 1047-1053, 2012.

## 学術講演等

稲垣 敦, 健康づくり指導現場における測定と評価の意義とポイント, 日本体育学会第63回大会, 神奈川県, 2012.8.

稲垣 敦, 大分県立看護科学大学健康増進プロジェクトの活動, 第71回日本公衆衛生学会総会, 山口県, 2012.10.

稲垣 敦, コーチから見た研究者、研究者から見たコーチ, 第4回大分県スポーツ学会学術集会, 大分市, 2012.12.

岩崎 香子, 骨疾患モデル 腎切除モデル, 第4回骨形態フォーラム, 愛媛県, 2012.6.

岩崎 香子, 慢性腎臓病での易骨折性 骨質因子検討結果からの考察, 第30回日本骨代謝学会シンポジウム, 東京都, 2012.7.

甲斐 倫明, Overview of radiation carcinogenesis for estimating the risk, The 25th International Symposium Foundation for Promotion of Cancer Research: Radiation and Cancer, Tokyo, 2012.12.

影山 隆之, 自殺予防と精神疾患, 東京大学精神衛生・精神看護学教室シンポジウム, 東京都, 2012.7.

首藤 信通, 単調欠測データに基づく線形判別分析, 第50回 理窓博士会 学位新取得者記念講演会, 東京都, 2012.7.

関根 剛, 地方公共団体の役割, 犯罪被害者等に関する地方公共団体職員研修会（内閣府）, 群馬県, 2012.8.

平野 互, 苦情解決の視点からみた患者の権利の現状, みんなでつくる《いのちの憲法》「医療基本法」制定に向けてのシンポジウム, 福岡県, 2012.11.

村嶋 幸代, 地域包括ケア推進に向けた保健師・看護師の役割, 大分県地域包括ケア研究会設立記念講演会, 別府市, 2012.12.

村嶋 幸代, 高齢者を地域で支える：地域包括ケア, 東京大学高齢社会総合研究機構 ジェロントロジー授業, 東京都, 2012.12.

村嶋 幸代, 修士課程における保健師・助産師・NP教育が、人々の生活の質の確保と学術の向上に及ぼす効果について, 鹿児島大学FD委員会保健学科部会研修, 鹿児島県, 2013.1.

吉田 成一, 自動車排ガスや黄砂などの大気汚染物質とマウス精子形成・精子性状の悪化, 財団法人染色体学会第63回年会・市民公開講座, 北海道, 2012.10.

吉田 成一, 黄砂による雄性生殖機能の低下, 第24回生殖・発生毒性東京セミナー, 東京都, 2013.2.

## 学会発表

井伊 暢美, Examinaion of " YOMIKIKASE" to the elderly people, ACPM, Ulaanbaatar, 2012.8.

石岡 洋子, A県における院内助産システム開設にむけての課題, 日本看護学会, 山梨県, 2012.10.

石田 佳代子, 看護師の身体診察技術を活用した災害時遺体対応能力の開発に関する研究 DMAT隊員の看護師を対象とした質問紙調査, 日本災害看護学会第14回年次大会, 愛知県, 2012.7.

石田 佳代子, 黒タグ者に対応する看護師に必要な能力 DMAT看護師の認識, 第43回日本看護学会, 岩手県, 2012.9.

He M, Ichinose T, Comparison of the aggravating effects of Asian sand dusts contained different quantities of  $\beta$ -glucan and lipopolysaccharid on murine lung eosinophilia, 第7回バイオエアロゾルシンポジウム, 滋賀県, 2013.1.

市瀬 孝道, 賀 森, 吉田 成一, 嵐谷 奎一, 高野 裕久, 卵白アルブミン誘発性の好酸球性肺炎に対する黄砂とビルカンデラ真菌の影響, 第53回大気環境学会年会, 神奈川県, 2012.9.

He H, Ichinose T, Yoshida S, Nishikawa M, Takano H, Effects of long-term exposure to Asian sand dust and ovalbumin on murine lung eosinophilia, 第53回大気環境学会年会, 神奈川県, 2012.9.

He M, Ichinose T, Yoshida S, Takano H, Nishikawa M, Sun G, Effect of Asian sand dust on lung allergic inflammation in mice immunized beforehand by ovalbumin, American College of Toxicology 33rd Annunal Meeting, Orlando, 2012.10.

市瀬 孝道, 黄砂の生物学的影響因子の解析, 第62回日本アレルギー学会秋季学術集会, 大阪府, 2012.11.

市瀬 孝道, 黄砂粒子と付着微生物によるアレルギー増悪作用, 第62回日本アレルギー学会秋季学術集会, 大阪府, 2012.11.

阿南 みと子, 伊東 朋子, 中都市の急性期病院で働く看護師の職務満足の現状, 第61回日本農村医学会学術集会, 島根県, 2012.11.

稲垣 敦, 1回の運動の健康効果およびその持続性: 登山の場合, 日本体育学会第63回大会, 神奈川県, 2012.8.

稲垣 敦, 登山後のエネルギー代謝とEPOC, 第71回日本公衆衛生学会総会, 山口県, 2012.10.

稲垣 敦, スポーツにおける動作のコツについて: オリンピック出場選手を対象とした調査より, 第4回大分県スポーツ学会学術集会, 大分市, 2012.12.

猪俣 理恵, 児への愛着形成を支えるNICU看護師の思いのプロセス, 第26回日本助産学会学術集会, 北海道, 2012.5.

田代 沙知, 岩崎 香子, 慢性腎臓病における骨代謝への尿毒症物質p-Cresolとアルブミン濃度の関与, 第55回日本腎臓学会学術集会, 神奈川県, 2012.6.

岩崎 香子, 風間 順一郎, 大和 英之, 深川 雅史, 尿毒症物質の血中蓄積は骨脆弱性に関与する 第55回日本腎臓学会学術集会, 神奈川県, 2012.6.

岩崎 香子, 松垣 あいら, 中野 貴由, 風間 順一郎, 大和 英之, 深川 雅史, 慢性腎臓病における易骨折性の要因, 第32回日本骨形態計測学会, 大阪府, 2012.6.

Y. Iwasaki, J.J. Kazama, H. Yamato, M. Fukagawa, Kidney dysfunction exacerbate bone strength through changing bone material composition, International Society of Nephrology, Nexus 2012, Copenhagen, 2012.9.

岩崎 香子, 松垣 あいら, 中野 貴由, 風間 順一郎, 深川 雅史, 大和 英之, 慢性腎臓病における易骨折性には骨質因子の変化が関与する, 第14回日本骨粗鬆症学会学術集会, 新潟県, 2012.9.

Y. Iwasaki, J.J. Kazama, H. Yamato, M. Fukagawa, Accumulated indoxyl sulfate aggravate bone mechanical property with chronic kidney disease, American Society of Nephrology Kidney Week, San Diego, 2012.10.

植田 みゆき, 小山田 浩子, 妊婦の自己効力感に関する研究, 第53回日本母性衛生学会学術集会, 福岡県, 2012.11.

永村 智美, 梅野 貴恵, 女性の出産体験の満足感に関する文献的研究 日本女性と海外女性の認知の比較, 第53回日本母性衛生学会総会・学術集会, 福岡県, 2012.11.

小嶋 光明, 甲斐 倫明, DNA損傷および染色体異常の動態から見た線量率効果の誘導メカニズムの理論的考察, 第45回日本保健物理学会, 愛知県, 2012.6.

小嶋 光明, 甲斐 倫明, 放射線の繰り返し照射による染色体異常の蓄積性の検討, 第55回放射線影響学会, 宮城県, 2012.9.

小野 孝二, 牧谷 美佳, 甲斐 倫明, 社会診療報酬データからのCT診断件数の推定, 日本保健物理学会第45回研究発表会, 愛知県, 2012.6.

小野 美喜, 福田広美, 塩月成則, 修士課程で特定能力を修得した看護師は, プライマリケア領域でどのように活動し成果をあげているか, 第32回日本看護科学学会学術集会, 東京都, 2012.12.

原 正範, 小野 美喜, 特定看護師の薬剤選択プロセスに関する検討, 第1回日本NP協議会研究会, 東京都, 2012.11.

亀井 修, 甲斐 倫明, 小嶋 光明, 小野 孝二, 吉武 貴康, X線CTからの臓器線量に与える体型の影響に関するモンテカルロ解析, 日本保健物理学会第45回研究発表会, 愛知県, 2012.6.

西嶋 康二郎, 亀井 修, 小野 孝二, 小嶋 光明, 甲斐 倫明, 2次発がんリスク予測のための乳房放射線治療における臓器吸収線量分布の推定, 日本保健物理学会第45回研究発表会, 愛知県, 2012.6.

吉武 貴康, 小野 孝二, 甲斐 倫明, 長谷川 隆之, 勝沼 泰, 佐藤 薫, 遠藤 章, 高橋 史明, 伴 信彦, CT診断における線量計算システムWAZA-ARIの検証, 日本保健物理学会第45回研究発表会, 愛知県, 2012.6.

西嶋 康二郎, 亀井 修, 小野 孝二, 小嶋 光明, 甲斐 倫明, PHITSによる乳房放射線治療における臓器吸収線量の推定, 九州放射線医療技術学術大会, 長崎県, 2012.11.

T. Kobayashi, Y. Kubo, T. Kageyama, Changes in Mental Health Status of Male Japanese Workers in Retirement Transition, The 2nd Asia-Pacific Conference on Health Promotion and Education, Taipei, 2012.5.

影山 隆之, 苦しくともじっと耐える住民の割合とサポート資源との関連 ; 地域自殺対策のために, 第71回日本公衆衛生学会総会, 山口県, 2012.10.

小林 敏生, 久保 陽子, 影山 隆之, 定年退職時期の男性労働者における健康感・生活満足度とその関連要因, 第71回日本公衆衛生学会総会, 山口県, 2012.10.

河野 梢子, 小野 美喜, 実習で看護倫理をいかに教えるか-教科書を読んで学生が抑制について考えたこと-, 日本看護倫理学会 第5回年次大会, 東京都, 2012.5.

草野 淳子, 通信制学生と全日制学生における看護観および人間性に関する研究, 第43回日本看護学会, 岩手県, 2012.9.

定金 香里, 市瀬 孝道, 黄砂の付着がアトピー性皮膚炎に及ぼす影響, 第53回大気環境学会年会, 神奈川県, 2012.9.

定金 香里, 市瀬 孝道, アスペルギルス抽出物の長期吸入がアトピー性皮膚炎に及ぼす影響, 第62回日本アレルギー学会秋季学術大会, 東京都, 2012.11.

定金 香里, 市瀬 孝道, 高野 裕久, 柳澤 利枝, 小池 英子, アトピー性皮膚炎モデルマウスに対するフタル酸ジイソノニル経口曝露の影響, 第83回日本衛生学会学術総会, 石川県, 2013.3.

N. Shutoh, Asymptotic approximation for the EPMC in linear discriminant function with k-step monotone missing training data, The 2nd Institute of Mathematical Statistics Asia Pacific Rim Meeting (IMS-APRM 2012), Ibaraki, 2012.7.

高橋 翔, 首藤 信通, Test for parallelism hypothesis in high-dimensional data, 2012年度 統計関連学会連合大会, 北海道, 2012.9.

徳丸 裕泰, 高野 政子, 中垣 紀子, 入院中の幼児の安静度の違いによる看護師の遊びの支援に関する研究, 第43回日本看護学会, 島根県, 2012.9.

山内 美奈子, 小代 仁美, 高野 政子, 保育所（園）における発熱のある子どもと保護者に対する保育士の支援の実態, 第43回日本看護学会, 島根県, 2012.9.

M. Takano, A study of the current state of cooperation between pediatric ward nurses and hospital classes and regular schools, 44th Congress of the International Society of Paediatric Oncology, London, 2012.10.

高野 政子, 小児病棟看護師と原籍校, 病院内学級の連携についての検討-看護師長の評価-, 第10回日本小児がん看護学会, 神奈川県, 2012.12.

藤内 美保, 特定看護師に対する研修システムの構築を目指して, 第32回日本看護科学学会交流集会, 東京都, 2012.12.

勝本 沙織, 藤内 美保, シミュレーターを用いた呼吸音・心音聴取の効果的な習得方法, 第32回日本看護科学学会, 東京都, 2012.12.

Nakabayashi H, Shimizu K, Antitumour effect of arucanolid against glioblastoma cell lines, 10th European Congress of Neuropathology, Edinburgh, 2012.6.

Nakabayashi H, Shimizu K, Molecular mechanisms underlying the antitumor effect of fasudil on glioblastoma cells, 10th meeting of European Association of Neuro-Oncology, Marseille, 2012.9.

林 猪都子, 猪俣 理恵, 乾 つぶら, 植田 みゆき, 妊娠末期における妊婦にライフコーダを用いた身体活動量の検討, 第53回日本母性衛生学会学術集会, 福岡県, 2012.11.

宮内 信治, 物語中の聞き手に影響を与える談話音調, 日本英語音声学会 第14回関西・中国支部研究大会, 兵庫県, 2012.5.

竹形 みずき, 春名 めぐみ, 村山 陵子, 松崎 政代, 村嶋 幸代, 出産時の恐怖感と産痛強度, 出産満足度, 次の育児への希望との関連, 第26回助産学会学術集会, 北海道, 2012.5.

永田 智子, 戸村 ひかり, 村嶋 幸代, 全国の病院における退院支援部署の設置状況および設置有無に関連する変数の変化, 第15回日本地域看護学会, 東京都, 2012.6.

岩崎 りほ, 有本 梓, 尾形 玲美, 成瀬 昂, 村嶋 幸代, 首都圏で幼児を育てる母親の就業の有無と親/親以外の役割の自己認識, 第15回日本地域看護学会, 東京都, 2012.6.

尾形 玲美, 有本 梓, 岩崎 りほ, 村嶋 幸代, 3 4ヶ月児の母親の育児に関する自己効力感とソーシャルサポート内的作業モデルに基づく比較, 第15回日本地域看護学会, 東京都, 2012.6.

岡本 玲子, 岩本里織, 多田 敏子, 西田 真寿美, 小出 恵子, 野村 美千江, 城島 哲子, 酒井 陽子, 草野 恵美子, 齋藤 美紀, 鈴木 るり子, 岸 恵美子, 寺本 千恵, 村嶋 幸代, 津波災害を受けた自治体職員の印象に残った被災後の業務, 第15回日本地域看護学会学術集会, 東京都, 2012.6.

岩本 里織, 岡本 玲子, 多田 敏子, 小出 恵子, 西田 真寿美, 鈴木 るり子, 野村 美千江, 酒井 陽子, 岸 恵美子, 城島 哲子, 草野 恵美子, 齋藤 美紀, 寺本 千恵, 村嶋 幸代, 東北大震災により被災を受けた自治体職員の被災後の身体的心理的苦痛 半年後の語りから, 第15回日本地域看護学会学術集会, 東京都, 2012.6.

齋藤 美紀, 岩本 里織, 城島 哲子, 岡本 玲子, 西田 真寿美, 小出 恵子, 野村 美千江, 酒井 陽子, 草野 恵美子, 多田 敏子, 鈴木 るり子, 岸 恵美子, 寺本 千恵, 村嶋 幸代, 災害に備える保健師の平時の情報管理, 第15回日本地域看護学会学術集会, 東京都, 2012.6.

野村 美千江, 田中 美延里, 奥田 美恵, 岡本 玲子, 岸 恵美子, 鈴木 るり子, 酒井 陽子, 城島 哲子, 草野 恵美子, 岩本 里織, 小出 恵子, 齋藤 美紀, 西田 真寿美, 寺本 千恵, 多田 敏子, 村嶋 幸代, 津波災害被災地における外部支援保健師の対応, 第15回日本地域看護学会学術集会, 東京都, 2012.6.

T. Naruse, A. Taguchi, Y. Kuwahara, S. Nagata, S. Murashima, Relationship between Perceived Time Pressure during Visits and Burnout among Home Visiting Nurses in Japan, The 9th International Conference of the Global Network of WHO, 兵庫県, 2012.6.

E. Kusano, K. Koide, M. Nomura, R. Okamoto, M. Nishida, S. Murashima, R. Suzuki, E. Kishi, T. Tada, S. Iwamoto, C. Teramoto, Y. Sakai, N. Jojima, M. Saito, Public Health Nursing Activities Required in Normal Times for Disaster Prevention and Reduction: Based on Experience of PHNs following the Great East Japan Earthquake, The 9th International Conference of the Global Network of WHO, 兵庫県, 2012.6.

A. Saitoh, S. Nagata, A. Saitoh, Y. Tsukahara, F. Vaida, T. Sonobe, H. Kamiya, T. Naruse, S. Murashima, Perinatal Immunization Education Improves Immunization Rates and Knowledge: A Randomized-Control Study, The 50th Annual Meeting of Infectious Diseases Society of America USA, San Diego, 2012.10.

永田 智子, 寺本 千恵, 新 雅史, 松永 篤志, 村嶋 幸代, 東日本大震災で被災したA町仮設住宅住民の生活と健康: 対象者の概況, 第71回日本公衆衛生学会総会, 山口県, 2012.10.

成瀬 昂, 田口 敦子, 永田 智子, 原 雄樹, 村嶋 幸代, 頻繁な訪問介護・看護が必要な者の対象者像の明確化, 第71回日本公衆衛生学会総会, 山口県, 2012.10.

岩崎 りほ, 有本 梓, 成瀬 昂, 永田 智子, 村嶋 幸代, 母親の不安とソーシャルサポート 「親 / 親以外の役割の捉え方」 得点の高低4群比較, 第71回日本公衆衛生学会総会, 山口県, 2012.10.

寺本 千恵, 新 雅史, 松永 篤志, 永田 智子, 村嶋 幸代, 東日本大震災で被災したA町仮設住宅住民の生活と健康: 団地別の傾向, 第71回日本公衆衛生学会総会, 山口県, 2012.10.

柳瀬 裕貴, 一木 眞澄, 有本 梓, 永田 智子, 田口 敦子, 村嶋 幸代, F県C町における生活習慣病の現状と地区特性に応じた対策 小地域の比較を行った地域診断活動展開実習から, 第71回日本公衆衛生学会総会, 山口県, 2012.10.

新 雅史, 永田 智子, 寺本 千恵, 松永 篤志, 村嶋 幸代, 東日本大震災で被災したA町仮設住宅住民の生活と健康: 対人関係と自治会活動の影響, 第71回日本公衆衛生学会総会, 山口県, 2012.10.

渡井 いずみ, 成瀬 昂, 有本 梓, 錦戸 典子, 村嶋 幸代, 低学年児童をもつ働く親のワーク・ライフ・バランスと養育態度との関連, 第71回日本公衆衛生学会総会, 山口県, 2012.10.

小出 恵子, 草野 恵美子, 野村 美千江, 岡本 玲子, 西田 真寿美, 岩本 里織, 酒井 陽子, 岸 恵美子, 城島 哲子, 齋藤 美紀, 多田 敏子, 寺本 千恵, 鈴木 るり子, 村嶋 幸代, 津波災害を経験した住民等が必要と考えた平時の防災・減災教育, 第71回日本公衆衛生学会総会, 山口県, 2012.10.

草野 恵美子, 大浦 まり子, 野村 美千江, 西田 真寿美, 岡本 玲子, 小出 恵子, 村嶋 幸代, 鈴木 るり子, 酒井 陽子, 岸 恵美子, 多田 敏子, 城島 哲子, 寺本 千恵, 岩本 里織, 齋藤 美紀, 被災地の医療福祉機関が遭遇した困難と活かされた強み・今後の課題, 第71回日本公衆衛生学会総会, 山口県, 2012.10.

齋藤 あや, 永田 智子, 齋藤 昭彦, 塚原 優己, 菌部 友良, 神谷 元, 成瀬 昂, 村嶋 幸代, 乳幼児に必要なワクチン接種率の向上に関する研究 (第1報) ランダム化比較試験による妊産婦への予防接種教育の効果検証, 第16回日本ワクチン学会学術集会, 神奈川県, 2012.11.

齋藤 あや, 永田 智子, 齋藤 昭彦, 塚原 優己, 菌部 友良, 神谷 元, 成瀬 昂, 村嶋 幸代, 乳幼児に必要なワクチン接種率の向上に関する研究 (第2報) 予防接種教育の望ましい時期についての妊産婦の意見, 第16回日本ワクチン学会学術集会, 神奈川県, 2012.11.

橋本 瑞希, 永田 智子, 村嶋 幸代, Readiness for Hospital Discharge Scale日本語版の開発, 第32回日本看護科学学会学術集会, 東京都, 2012.11.

岩崎 りほ, 有本 梓, 多田 敏子, 岸 恵美子, 佐伯 和子, 岡本 玲子, 田口 敦子, 永田 智子, 村嶋 幸代, 国内外の文献検討に基づく新しい公衆衛生看護学の学問体系の構築, 第1回日本公衆衛生看護学会学術集会, 東京都, 2013.1.

S. Nagata, K. Ogawa, A. Taguchi, T. Naruse, Y. Kuwahara, S. Murashima, Promoting the use of visiting nurse services for patients discharged from hospital: Introduction of a Japanese municipality's model project, International Collaboration for Community Health Nursing Research (ICCHNR), United Kingdom, 2013.3.

T. Naruse, M. Sakai, I. Watai, A. Taguchi, Y. Kuwahara, S. Nagata, S. Murashima, Individual and organizational factors related to work engagement among home visiting nurses in Japan, International Collaboration for Community Health Nursing Research (ICCHNR), United Kingdom, 2013.3.

Riho Iwasaki, Azusa Arimoto, Takashi Naruse, Satoko Nagata, Sachiyo Murashima, Recognition of Non-maternal Role among mothers rearing toddlers in a Metropolitan Area in Japan analysis according to the working status of mothers, International Collaboration for Community Health Nursing Research (ICCHNR), United Kingdom, 2013.3.

吉田 成一, 賀 森, 嵐谷 奎一, 市瀬 孝道, 黄砂による雄性生殖機能への影響, 第31回日本アンドロロジー学会, 兵庫県, 2012.6.

吉田 成一, 賀 森, 嵐谷 奎一, 市瀬 孝道, 発生地異なる黄砂による雄性生殖機能低下に関する比較研究, 第53回大気環境学会, 神奈川県, 2012.9.

吉田 成一, 賀 森, 小林 史尚, 市瀬 孝道, 黄砂付着微生物による雄性生殖機能への影響, フォーラム2012: 衛生薬学・環境トキシコロジー, 愛知県, 2012.10.

吉田 成一, 賀 森, 嵐谷 奎一, 市瀬 孝道, 妊娠期黄砂エアロゾル曝露による胎仔への影響と雄性出生仔生殖機能への影響, 第57回日本生殖医学会学術講演会, 兵庫県, 2012.11.

吉村 匠平, 森田 慶子, 大学生の挙手・発言行動を促進する授業環境の構築, 第19回大学教育研究フォーラム, 京都府, 2013.3.



## 10 地域貢献

### 講演等

石田 佳代子

臨床に役立つフィジカルアセスメントの基礎, 平成24年度大分県看護協会研修会, 大分市, 2012.5.

フィジカルアセスメント, 循環器系, 平成24年度大分中村病院看護師研修会, 大分市, 2012.6.

フィジカルアセスメント (心音・呼吸音・全身皮膚), 平成24年度ブランクのある方の技術研修, 大分市, 2012.8.

臨床に役立つフィジカルアセスメントの基礎, 平成24年度大分県看護協会研修会, 大分市, 2012.9.

フィジカル・アセスメント (救急・急変), 平成24年度大分岡病院看護師研修会, 大分市, 2012.9.

看護過程と看護記録, 平成24年度看護力再開発講習会, 大分市, 2012.10.

看護職員に必要な検査の知識, 平成24年度看護力再開発講習会, 大分市, 2012.10.

看護過程, 平成24年度保健師・助産師・看護師実習指導者講習会, 大分市, 2012.11.

フィジカルアセスメント (心音・呼吸音・全身皮膚), 平成24年度ブランクのある方の技術研修, 大分市, 2013.2.

稲垣 敦

健康スポーツ学概論, 第1回スポーツ救護講習会, 大分市, 2012.4.  
腹筋を見よう! 内臓脂肪を計ろう!, 若葉祭, 大分市, 2012.5.  
柔軟体操をしよう!, 人生いきいきはつらつスクール, 大分市, 2012.5.  
統計相談, 統計・情報処理相談, 大分市, 2012.6.  
ウォーキングと健康および運動量測定, 姫島村健康づくり事業, 姫島村,  
2012.6.  
自分らしい生活を続けるために, 竹田市入田地区高齢者ふれあい交流会, 竹  
田市, 2012.6.  
転ばぬ先の杖, ヘルスサポーター養成講座, 竹田市, 2012.6.  
EMG、三次元動作解析、統計解析, 医科歯科共同研究, 由布市, 2012.7.  
ウォーキングと筋トレ, 姫島村健康づくり事業, 姫島村, 2012.7.  
体力テスト・運動指導, 大分丘の上病院スポーツデイ, 大分市, 2012.7.  
統計相談, 統計・情報処理相談, 大分市, 2012.8.  
統計相談, 日本体育学会第63回大会, 神奈川県, 2012.8.  
運動機能向上プログラムの考え方と実践, 運動機能向上プログラム機能強  
化研修会, 九重町, 2012.8.  
健康・体力チェック, おおいた新発見! わくわく館「敬老健康測定会」, 大  
分市, 2012.9.  
健康スポーツ学概論, 第2回スポーツ救護講習会, 大分市, 2012.9.  
健康・体力チェック, おおいたスポーツ広場, 大分市, 2012.10.  
健康チェック, 第36回富士見が丘団地体育祭, 大分市, 2012.10.  
健康チェック, トリニータ健康づくりプログラム, 大分市, 2012.11.  
自分らしい生活を続けるために, 大分市社会福祉協議会介護予防事業, 大分  
市, 2012.11.  
健康・体力チェック, 神崎校区福祉文化祭, 大分市, 2013.1.  
運動機能向上プログラムの効果検証と実際について, 大分県介護予防二次  
予防強化研修会, 大分市, 2013.1.  
足腰元気で介護予防, 杵築市健康と介護を考えるつどい, 杵築市, 2013.1.  
森林浴の自律神経活動への効果, 森のセラピーコース効果検証実験結果報  
告会, 大分市, 2013.2.  
健康スポーツ学概論, 第3回スポーツ救護講習会, 大分市, 2013.3.  
統計相談, 統計・情報処理相談, 大分市, 2013.3.  
健康チェック, 森林探検ウォーキング, 大分市, 2013.3.

岩崎 香子

簡単な理科実験, 大分県立看護科学大学若葉祭, 大分市, 2012.5.

梅野 貴恵

助産師教育課程, 平成24年度保健師・助産師・看護師実習指導者講習会, 大  
分市, 2012.9.  
看護大学の紹介, いのちの誕生と向き合う仕事, 大分県立杵築高等学校1・2  
年生, 大学等出前講義, 杵築市, 2012.9.  
第二次性徴と妊娠, 平成24年度大分市立三佐小学校「いのちの教育」, 大分  
市, 2012.10.

江藤 真紀

家庭訪問における揺るぎない土台作り, 大分県西部保健所管内保健活動検  
討会, 日田市, 2012.8.  
地域診断って意外と単純!, 大分県西部保健所管内保健活動検討会, 日田  
市, 2012.9.

- 小嶋 光明 放射線に関する「対話型講習会」, 大分県生活環境部 食品安全・衛生課, 別府市, 2012.7.  
放射線に関する「対話型講習会」, 大分県生活環境部 食品安全・衛生課, 中津市, 2012.7.
- 小野 孝二 医療被ばくの基礎とCTの患者線量評価, 放射線診療従事者研修会, 大分市, 2012.4.  
正しく恐れるための放射線の基礎知識, 大分県生活環境部, 大分市, 2012.4.  
放射線に関する「対話型講習会」, 大分県生活環境部 食品安全・衛生課, 竹田市, 2012.6.  
食の安心読本「放射線ってなんだろう」に関する研修会, 大分県生活環境部 食品安全・衛生課, 大分市, 2012.7.  
放射線に関する「対話型講習会」, 大分県生活環境部 食品安全・衛生課, 日田市, 2012.7.  
放射線の人体に与える影響および放射線障害の防止に関する法令, 事業所内教育・訓練講習, 大分市, 2012.11.  
医療における放射線被ばく, 放射線業務従事者への再教育, 豊後大野市, 2013.2.
- 小野 美喜 NP(診療看護師)の養成と将来性, 島根県医療従事者環境整備事業定例研修会, 島根県, 2012.8.  
実習指導計画・指導案作成の実際, 平成24年度大分県看護協会実習指導者講習会, 大分市, 2012.11.

影山 隆之

職場のメンタルヘルス, 大分県平成24年度マネジメント研修, 大分市, 2012.4.

職場におけるメンタルヘルス対策 ラインによるケアについて, 平成24年度佐伯市メンタルヘルス研修会, 佐伯市, 2012.5.

職場のメンタルヘルス, 大分県職員研修所平成24年度新任監督者研修, 大分市, 2012.5.

メンタルヘルス, 大分県市町村職員研修センター新任課長級研修, 大分市, 2012.7.

メンタルヘルス: 管理監督者が知っておきたいこと, 大分市平成24年度管理監督者メンタルヘルス研修, 大分市, 2012.7.

自殺予防と事後対策, 日本医師会認定産業医制度産業医学研修会, 大分市, 2012.7.

看護研究の基礎知識, 大分県看護協会平成24年度教育研修, 大分市, 2012.7.

自殺対策の現状と看護職等の役割, 大分県看護協会自殺対策専門研修, 大分市, 2012.8.

地域で取り組む自殺対策 最新情報を加えて, 佐伯市自殺・うつ対策支援ネットワーク会議, 佐伯市, 2012.8.

自殺を考えている人に寄り添うとは?, おおいた社会的包摂サポートセンター寄り添いホットライン自殺相談研修会, 大分市, 2012.9.

自殺対策の基本と地域での支え合い, 平成24年度豊後大野市自殺対策ゲートキーパー養成研修, 豊後大野市, 2012.9.

職場のこころの健康づくりと自殺予防対策, 杵築市自殺対策研修会, 杵築市, 2012.10.

自殺対策の基本と地域での支え合い, 平成24年度国東市ゲートキーパー養成研修会, 国東市, 2012.11.

何を聴き、何を伝えるか, 熊本県訪問看護ステーション従事者研修会, 熊本県, 2012.11.

働く人の心の健康づくり, 中部地域労働講座, 大分市, 2012.11.

相談の受け方 把握すべきこと、伝えるべきこと, 大分県社会福祉介護研修センター平成24年度第2回相談業務担当職員研修会, 大分市, 2012.12.

河野 梢子

フィジカルアセスメント脳神経・運動系, フィジカルアセスメント, 大分市, 2012.7.

草野 淳子

平成24年度医療的ケア研修・医療的ケア看護師研修, 大分県教育委員会主催, 大分市, 2012.8.

桜井 礼子

研究の進め方, 大分県看護協会, 大分市, 2012.6.

看護とは, 佐伯鶴城高校出前講義, 大分市, 2012.7.

研究のまとめ方, 大分県看護協会, 大分市, 2012.8.

情報テクノロジー 看護管理を支援する情報技術, 大分県看護協会看護管理者認定看護師セカンドレベル教育課程, 大分市, 2012.11.

定金 香里

色が変わる不思議なブーケ, 大分県理科・化学懇談会主催, 「夏休み子供サイエンス2012」, 大分市, 2012.8.

佐藤 弥生

在宅医療における訪問看護, 由布市庄内町介護支援専門員協会平成24年度第1回定例研究会, 由布市, 2012.5.

家族看護, 大分県看護協会平成24年度訪問看護専門分野講習会, 大分市, 2012.8.

訪問看護のスタッフ教育 訪問看護のOJTシートを活用した系統的教育プログラム, 大分市訪問看護ステーション連絡協議会研修会, 大分市, 2012.10.

家族看護, 大分県看護協会平成24年度訪問看護専門分野講習会, 大分市, 2012.12.

医療と在宅の連携は看護職から, 大分県東部保健所看護ネットワーク推進事業別府地区看護連携強化フォーラム, 別府市, 2013.2.

品川 佳満

看護研究の実際I, 大分県看護協会教育研修, 大分市, 2012.6.

データ解析入門, 鹿児島大学医学部保健学科公開講座, 鹿児島県, 2012.7.

看護研究の実際II, 大分県看護協会教育研修, 大分市, 2012.8.

情報テクノロジー, 大分県看護協会認定看護管理者(セカンドレベル)教育課程, 大分市, 2012.9.

犯罪被害者自助グループファシリテーター(5回), 公益社団法人大分被害者支援センター, 大分市, 2012.4.

倫理研修 実例を通して考える不祥事が生じる背景と防止方法, マネージメント研修(大分県職員研修所), 大分市, 2012.4.

スーパービジョン(2回), 大分いのちの電話, 大分市, 2012.5.

相談対応の基本, 警察安全相談実務専科教養(大分県警察学校), 大分市, 2012.5.

犯罪被害者支援における関係機関・団体の連携, 宮崎県犯罪被害者等支援連絡協議会, 宮崎県, 2012.5.

犯罪被害者に対する電話対応の仕方, かがわ被害者支援センター被害者支援養成講座, 香川県, 2012.5.

メンタルヘルス, 大分県新任班総括研修, 大分市, 2012.5.

カウンセリングスキル/被害者支援の倫理/コンピュータ利用の注意点, 山口被害者支援センターボランティア養成研修会, 山口県, 2012.6.

カウンセリングの理論と実際, 大分いのちの電話相談員養成講座, 大分市, 2012.6.

支援者としての自己理解, 全国被害者支援ネットワーク東海・北陸ブロック研修会, 愛知県, 2012.6.

犯罪被害者支援とは何か(ほか), 紀の国被害者支援センター養成研修, 和歌山県, 2012.6.

利用者と良い人間関係を築くためのコミュニケーションスキル, 別府発達医療センター院内研修会, 別府市, 2012.6.

こころの健康づくり-自殺のサインと対応方法-, 別府市こころの健康づくり研修会, 別府市, 2012.7.

スクールセクハラのとぼす影響と具体的事例への対応, 大分県スクールセクハラ防止相談窓口担当者研修会, 大分市, 2012.7.

直接的支援の実際-ロールプレイ, 全国被害者支援ネットワーク九州沖縄ブロック研修会, 長崎県, 2012.7.

面接技術, 大分県看護協会「訪問看護eラーニング」を」利用した訪問看護師養成研修会, 大分市, 2012.7.

危機時のこころのケア総論 場のケア 危機時のマネジメント, 大分県こころの緊急支援チーム研修会, 大分市, 2012.8.

ケース検討, 由布支援学校校内研修会, 由布市, 2012.8.

スクールセクハラのとぼす影響と具体的事例への対応, 大分県スクールセクハラ防止相談窓口担当者研修会, 大分市, 2012.8.

被害者の心情, 大分刑務所, 大分市, 2012.8.

被害者の心情を考える, 大分少年院, 豊後大野市, 2012.8.

性犯罪被害者の心理, 被害者の支援と被害者支援要綱研修(大分県警察), 大分市, 2012.9.

カウンセリングの原理と実際, 大分県看護協会保健師助産師看護師実習指導者講習会, 大分市, 2012.9.

ロールプレイ-聴くということ, チャイルドライン受け手養成講座, 大分市, 2012.10.

職場や家庭でちょっと役立つコミュニケーションのポイント, 介護職のためのメンタルヘルス研修, 豊後大野市, 2012.11.

NNVS広域緊急支援チーム-これからの業務, 全国被害者支援ネットワーク広域緊急支援チーム研修会, 東京都, 2012.12.

ネットワーク事業計画演習-被害者支援活動の統計を題材にして, 全国被害者支援ネットワーク・コーディネーター研修(中期), 東京都, 2013.1.  
育成の技術-プレゼンテーション, 全国被害者支援ネットワーク近畿ブロック研修, 大阪府, 2013.2.  
広域緊急支援, 全国被害者支援ネットワーク・コーディネーター研修(中期), 東京都, 2013.2.  
惨事ストレス対策/ロールプレイ, 大分県消防学校, 由布市, 2013.2.  
育成の技術-プレゼンテーション, 全国被害者支援ネットワーク九州・沖縄ブロック研修, 長崎県, 2013.3.  
教育研修の企画, 全国被害者支援ネットワーク・コーディネーター研修(中期), 東京都, 2013.3.  
助言の技術, 別府市水道局, 別府市, 2013.3.  
相談員のストレスケア, 子育ての悩み相談等相談員ストレスケア研修会, 大分市, 2013.3.

#### 高野 政子

たんの吸引の基礎, 経管栄養の基礎, 平成24年度大分県教育委員会主催「医療的ケア研修会」, 大分市, 2012.8.  
看護基礎教育の目指す方向性、看護教育のカリキュラムと教育評価, 平成24年度専任教員継続研修会, 大分市, 2012.8.  
医療的ケア研修会(たんの吸引、経管栄養の指導のポイント), 第2回医療的ケア看護師研修, 大分市, 2012.8.  
家族看護, 平成24年度大分県看護協会教育研修会, 大分市, 2012.9.  
保育所における看護と健康管理, 平成24年度保育所健康・安全保育研修会, 大分市, 2012.9.  
臨床指導の実際-小児看護学-, 平成24年度保健師・助産師・看護師実習指導者講習会, 大分市, 2012.11.  
研修後の取り組みの振り返り, 平成24年度専任教員継続研修会, 大分市, 2012.12.

#### 田中 佳子

フィジカルアセスメント, 平成24年度大分県看護協会研修, 大分市, 2012.5.  
健康づくり事業, 生活習慣病と運動、運動量の測定方法, 姫島村, 2012.6.  
健康チェック・体力測定, おおいたスポーツ広場2012, 大分市, 2012.10.  
健康チェック・体力測定, 大分トリニータホームゲーム, 大分市, 2012.11.  
救護班, 森林セラピートレイルランニング大会, 大分市, 2013.3.

藤内 美保

フィジカルアセスメント, 平成24年度大分県看護協会研修, 大分市, 2012.5.  
臨床に役立つフィジカルアセスメント, 大分県看護協会教育研修, 大分市,  
2012.5.  
フィジカルアセスメントの基本, 中村病院看護師研修, 大分市, 2012.5.  
看護過程記録の基本, 医療と福祉のニコニコグループ研修会, 豊後大野市,  
2012.6.  
フィジカルアセスメント (呼吸器系), 大分岡病院 看護師研修, 大分市,  
2012.7.  
フィジカルアセスメント (循環器系), 大分岡病院 看護師研修, 大分市,  
2012.8.  
統合実習の考え方, 大分県看護教員再教育研修, 大分市, 2012.8.  
フィジカルアセスメントの基本, 大分赤十字病院 レベル I 研修, 大分市,  
2012.8.  
臨床に役立つフィジカルアセスメント, 大分県看護協会研修会, 大分市,  
2012.9.  
チーム医療, 認定看護管理者制度ファーストレベル教育課程, 広島県,  
2012.10.

林 猪都子

大学の教育課程・自己啓発, 平成24年度 保健師・助産師・看護師実習指  
導者講習会, 大分市, 2012.9.



特別支援教育に期待すること 障がい児の生きる力を育てるために, 大分県教育センター平成24年度特別支援学校新任教員研修, 大分市, 2012.4.  
福祉における権利擁護 権利としての自立とその支援, 大分県社会福祉介護研修センター 県・市町村福祉担当新任職員研修会, 大分市, 2012.5.  
訪問看護における患者の権利と意思決定の支援, 大分県看護協会 平成24年度訪問看護基礎研修, 大分市, 2012.5.  
A S D児の未来のために 専門職に寄せる親の願い, 大分県 平成24年度発達障がい者支援専門員養成研修(初級), 大分市, 2012.6.  
自閉症スペクトラムの特性と基本的な支援スキル, 玖珠郡幼稚園会研修会, 玖珠町, 2012.7.  
自閉症スペクトラムの特性と学齢期の課題への対応 保護者の視点から, 大分県立日出支援学校研修会(平成24年度特別支援学校校内研修支援), 日出町, 2012.8.  
生命の価値は同じ。では、なぜ人はみんな違うのか, 大分市立大分南中学校ファミリーP T A講演会, 大分市, 2012.9.  
安全教育とリスク・マネジメント, 大分県看護協会 保健師・助産師・看護師実習指導者講習会特別講演, 大分市, 2012.9.  
医療事故発生メカニズムと安全管理のポイント, 大分県看護協会 訪問看護専門分野研修会, 大分市, 2012.9.  
発達障がいのある生徒の特性理解と基本的な支援スキル, 2012年度豊肥地区人権・同和教育研究大会, 竹田市, 2012.11.  
障がい者の虐待防止と権利擁護, 国東市福祉事務所・国東市障害者自立支援協議会「障がい者虐待防止講演会」, 国東市, 2012.12.  
障がい者の虐待防止と権利擁護, 社会福祉法人みのり村 職員研修会, 日出町, 2012.12.  
大分県自閉症協会の役割とわが子の育ち, 平成24年度発達障害者支援者実地研修事業, 豊後大野市, 2012.12.  
大分県自閉症協会の役割とわが子の育ち, 平成24年度発達障害者支援者実地研修事業, 豊後大野市, 2013.1.  
学校と保護者の連携 発達障がいのある子どもの支援, 平成24年度公立小・中学校特別支援コーディネーター専門研修, 大分市, 2013.1.  
発達障がいのある人と地域でともに暮らすために, 第11回福祉フォーラム inけんなん 佐伯大会, 佐伯市, 2013.2.  
医療事故発生メカニズムと安全管理のポイント, 大分県看護協会 訪問看護専門分野研修会, 大分市, 2013.2.  
自閉症スペクトラムの特性と基本的な支援スキル, 平成24年度障害児通所支援療育担当職員等研修会, 大分市, 2013.3.

臨床実習指導のあり方, 大分赤十字病院院内研修会, 大分市, 2012.11.

対象者への理解, 平成24年度第2回看護力開発講習会, 大分市, 2012.10.

易しい英語でHappy Reading, 大分県大学図書館協議会総会, 大分市, 2012.8.

大分県市町村保健師に期待するもの 地域の中で健康で安心して暮らせるために、保健師として必要なこと, 平成24年度大分県市町村保健活動研究協議会技術研修会, 大分市, 2012.7.

被災地の保健医療福祉, 平成24年度市町村長防災特別セミナー, 千葉県, 2012.7.

これからの保健師教育 公衆衛生看護学の構築, 全国保健師教育機関協議会九州ブロック第1回研修会, 福岡県, 2012.7.

24時間365日安心して暮らし続けられる地域に向けて -看護がすすめる地域包括ケア-, 湯布院厚生年金病院院内研修会, 由布市, 2012.7.

大分県市町村保健師の人材育成について, 大分県市町村統括保健師会議, 大分市, 2012.8.

時代が求める公衆衛生看護学の構築 世界をリードする日本の保健師教育/活動を基盤に, 第27回全国保健師教育機関協議会教員研修会, 岡山県, 2012.8.

4単位 5単位の実習で望む保健師像: 実習で何を大事にしたらいいか?, 平成24年度全国保健師長会南関東・東京ブロック研修会, 神奈川県, 2012.9.

24時間365日安心して暮らし続けられる地域にむけて 看護がすすめる地域包括ケア, 平成24年度大分県看護協会三職能合同交流集会, 大分市, 2012.9.

地域包括ケアが目指すもの 保健師・看護師の役割, 平成24年度地域リハ調整者・地域リハ協力員養成研修, 由布市, 2012.9.

現任教育(新任期)における指導方法 自分の活動を通して後輩に伝えるために, 平成24年度教育保健所整備モデル事業における第2回新任保健師実地指導者等研修会, 大分市, 2012.9.

これからの保健師活動に求められること, 豊肥保健所管内地域保健従事者合同研究会, 竹田市, 2012.11.

学士課程での看護師教育と拡大する修士課程の保健師教育・助産師教育・NP教育, 岡山県看護系大学協議会教育研究会, 岡山県, 2012.11.

24時間365日安心して暮らせる地域に向けて -看護と介護の連携・協働と地域包括ケア-, 大分県西部保健所看護連携強化フォーラム(Ⅲ), 日田市, 2012.12.

モチベーションを高めるための保健活動 -行政の中で力を発揮し、市民の負託に応えるために、保健師として必要なこと-, 大分県保健所保健活動定例研修会, 大分市, 2013.1.

あなたを育て、あなたに育てられる訪問看護 伸びゆく訪問看護は地域の重要な資源です, 大分県訪問看護ステーション連絡協議会第5回事例発表会, 大分市, 2013.1.

地域母子保健と保健師活動, 母子愛育会総合母子保健センター研修, 東京都, 2013.2.

地域包括ケアシステム構築に向けて, 大分県地域リハ調整者・地域リハ協力員連絡協議会H24年度スキルアップ研修会, 大分市, 2013.2.

黄砂の健康影響, 東京理科大学大学院薬学研究科, 千葉県, 2012.11.

PM2.5の健康影響, 大分県庁, 大分市, 2013.3.

吉村 匠平 親と子のより良い関わりを求めて、竹田市立久住小学校PTA講演会、竹田市、2012.6.  
 コミュニケーション論 1, 大分医師会立アルメイダ病院初任者研修, 大分市, 2012.6.  
 孫と祖父母の心理学, 霊山大学 (東植田地区生涯学習講演会), 大分市, 2012.6.  
 モチベーションマネジメント 自己決定理論を中心に, 大分医師会立アルメイダ病院 プリセプター研修, 大分市, 2012.7.  
 大学で看護学を学ぶということ, 出前授業, 中津市, 2012.7.  
 リーダーシップ研修, 国立病院機構別府医療センター, 別府市, 2012.7.  
 わ・ら・く でワークショップ+α, 2012年第1回佐伯市ヘルスアップ推進員学習会, 佐伯市, 2012.8.  
 コミュニケーション論 その2, 大分医師会立アルメイダ病院 初任者研修, 大分市, 2012.10.

研究指導	大分県立病院 独立行政法人国立病院機構大分医療センター 大分赤十字病院 大分中村病院 アルメイダ病院研究指導 大分県竹工芸・訓練支援センター 国立病院機構西別府病院 中津市民病院	石田 佳代子、関根 剛 岩崎 香子、猪俣 理恵 定金 香里 石岡 洋子、平野 互 秦 さと子、吉村 匠平 伊東 朋子 吉田 成一、大賀 淳子 小野 孝二、桜井 礼子
------	--	---

学会その他の役員等

井伊 暢美 TEACCHプログラム研究会大分県支部  
大分認知症カンファレンス世話人

石岡 洋子 大分県看護協会 助産師職能委員会

石田 佳代子 中津ファビオラ看護学校 非常勤講師  
大分県看護協会教育委員会 委員

市瀬 孝道 環境省黄砂問題検討会委員  
大気環境学会九州支部会役員  
福岡市黄砂影響検討会委員

伊東 朋子 日本ALS協会大分県支部運営委員  
平成24度大分県准看護師試験委員

稲垣 敦 日本体育学会編集委員  
Nスポーツ顧問  
大分県スポーツ学会運営委員  
大分県スポーツ学会 人材育成委員  
日本体育測定評価学会常任理事 副理事長  
日本体育測定評価学会 将来検討委員長  
日本体育測定評価学会 学会賞選考委員長  
大分県介護予防運動機能向上専門部会

猪俣 理恵	大分県母性衛生学会副事務局長 第9回大分県母性衛生学会運営実行委員会委員 公益社団法人全国助産師教育協議会 国際活動小委員会委員 一般社団法人日本看護系大学協議会 看護学教育質向上委員会委員
岩崎 香子	日本骨粗鬆症学会評議員 ROD21研究会幹事
梅野 貴恵	平成24年度助産師確保連絡協議会委員 大分県母性衛生学会理事
江藤 真紀	大分市高齢者福祉計画及び大分市介護保険事業計画策定委員会委員 大分県モデル保健所プログラム企画運営委員会委員 大分県看護実習指導者講習会 大分県食品安全推進県民会議委員 九州電力わいわいセミナー・エナコロジー委員 大分市社会福祉審議会委員 大分市男性家族介護者総合支援調査事業企画・評価委員会委員 日本看護医療学会査読委員 日本看護研究学会査読委員 日本地域看護学会総務理事
小嶋 光明	日本保健物理学会企画検討委員 大分大学医学部臨床研究審査委員
小野 孝二	社団法人 日本アイソトープ協会 広報委員会委員 久留米大学認定看護師教育センター非常勤講師
小野 美喜	大分県脳卒中懇話会世話人 平成24年度大分県准看護師試験委員 日本看護倫理学会 評議員 日本看護倫理学会学会誌 論文査読委員
甲斐 倫明	国際放射線防護委員会(ICRP) 第4専門委員会委員 人事院安全専門委員会委員 社団法人日本リスク研究学会会長 国連科学委員会国内対応委員会委員 九州大学非常勤講師 福岡県防災会議専門委員 独立行政法人日本原子力研究開発機構原子力基礎工学研究・評価委員会委員 日本医学放射線学会放射線防護委員会委員 鹿児島県地域防災計画検討有識者会議委員
影山 隆之	大分県精神疾患医療連携協議会委員 大分県地域福祉権利擁護事業契約締結審査会委員 大分県自殺対策連絡協議会副会長 日本学校メンタルヘルス学会理事 日本自殺予防学会理事・編集委員 豊後大野市自殺対策連絡協議会助言者 日本精神衛生学会常任理事・編集委員長 日本社会精神医学会評議員 大分県環境影響評価技術審査会委員

佐伯 圭一郎	大分県情報公開・個人情報保護審査会委員 生涯健康県おおいた21推進協議会幹事 日本民族衛生学会評議員
桜井 礼子	大分地方労働審議会委員 大分県社会福祉審議会民政委員 審査専門分科会委員 第2期大分市食育推進計画策定検討委員会委員 大分市都心まちづくり会議委員 大分県看護協会認定看護管理者運営委員会委員 日本災害看護学会国際交流委員会委員
定金 香里	平松学園大分リハビリテーション専門学校 非常勤講師 大分県理科・化学懇談会幹事
佐藤 弥生	大分県看護協会訪問看護推進協議会委員 大分県在宅医療連携協議会委員 大分県看護協会看護師職能Ⅱ委員
品川 佳満	別府医療センター附属 大分中央看護学校 非常勤講師 日本放射線看護学会 評議員
首藤 信通	一般社団法人日本看護系大学協議会 看護学教育質向上委員会 協力者
関根 剛	消防庁緊急時メンタルサポートチーム メンバー 大分県こころの緊急支援チーム メンバー 大分市男女共同参画審議会 会長 公益社団法人 大分被害者支援センター 理事 NPO全国被害者支援ネットワーク 理事 NPO全国被害者支援ネットワーク 支援活動検討委員会委員長代行 大分いのちの電話 スーパーバイザー 公益社団法人 紀の国被害者支援センター 相談員
高野 政子	大分県医療的ケア運営協議会委員 大分県小児保健協会理事 九州・沖縄小児看護教育研究会幹事 日本看護研究学会九州・沖縄地方会役員 第17回日本看護研究学会九州・沖縄地方会学術集会座長 日本小児がん看護学会査読委員 A reviewer of Journal of Korean Academy of Child Health Nursing
田中 佳子	大分県看護協会平成24年度実習指導者講習会運営委員
藤内 美保	大分県医療費適正化推進協議会 委員 日本看護系大学協議会高度実践看護師専門委員会委員 日本NP協議会事務局次長 日本看護協会看護学会（総合看護） 学会準備委員 日本看護協会看護学会（総合看護） 査読委員 ウズベキスタン教育改善プロジェクト短期専門家派遣 東京医療保健大学非常勤講師 名城大学非常勤講師 ファビオラ看護専門学校非常勤講師

林 猪都子  
 大分県母性衛生学会 副会長（事務局長）  
 日本放射線看護学会 評議委員  
 大分県母性衛生学会 学術集会実行委員  
 大分県看護協会 インターンシップ推進委員  
 大分県ナースセンター事業運営委員

平野 亙  
 福岡大学法科大学院非常勤講師  
 九州大学大学院非常勤講師  
 医療事故防止・患者安全推進学会 理事  
 大分県発達障がい研究会 理事  
 大分県人権尊重社会づくり推進審議会 副会長  
 大分県地域・職域連携推進部会 委員  
 大分県特別支援連携協議会 委員  
 大分県発達障がい者支援センター連絡協議会 委員  
 大分県福祉サービス第三者評価事業推進組織 第三者評価基準等委員会  
 委員  
 大分県国民健康保険団体連合会 介護給付費審査委員会 委員  
 九州大学病院 心臓移植外部評価委員  
 大分健生病院 倫理委員会 委員

福田 広美  
 日本NP協議会NP資格認定試験WG

村嶋 幸代  
 国立保健医療科学院評価委員会 委員  
 日本学術会議 連携会員  
 一般社団法人 日本看護系大学協議会 理事  
 日本看護系学会協議会 理事  
 一般社団法人 全国保健師教育機関協議会 会長  
 日本地域看護学会 理事長  
 日本公衆衛生学会 理事・公衆衛生看護のあり方に関する委員会委員長  
 日本在宅ケア学会 評議員  
 日本NP協議会 事務局長  
 東京都地方独立行政法人評価委員会 委員  
 産業医科大学 評議員  
 東京大学医学教育国際協力研究センター 学外客員研究員  
 公益財団法人 医療科学研究所 評議員・編集委員  
 財団法人 中山科学振興財団 評議員  
 大分県医療審議会 委員  
 大分市次世代育成支援行動計画推進協議会 委員長  
 大分市教育委員会 「教育に関する事務の管理および執行の状況について  
 の点検および評価」学識経験者  
 大分県石油コンビナート等防災本部員  
 日本地域看護学会 日本学術会議対策委員会 委員長  
 日本地域看護学会 評議員  
 日本地域看護学会 「看保連」対策委員会 副委員長  
 日本地域看護学会 地域看護学学術委員会 副委員長  
 生涯健康県おおいた21推進協議会委員  
 九州大学 非常勤講師  
 大分県地域包括ケア研究会 世話人

吉田 成一

東京理科大学薬学部客員准教授  
日本アンドロロジー学会 評議員  
日本薬学会学術誌編集委員会委員  
日本薬学会学 代議員

吉村 匠平

平成24年度学習障がい児等支援体制整備事業に係わる専門家チーム委員

## 11 助成研究

### 井伊 暢美

ICFを活用した自閉症スペクトラム者の就労における生活支援サービスの検討  
日本学術振興会科学研究費 挑戦的萌芽研究

### 石田 佳代子

看護師の身体診察技術を活用した災害時遺体対応能力の開発  
日本学術振興会科学研究費 挑戦的萌芽研究

### 市瀬 孝道（代表）、吉田 成一（分担）、定金 香里（分担）

黄砂の呼吸器疾患への影響調査と遺伝子解析によるアレルギーの増悪・感受性要因の解明  
日本科学振興会科学研究費 基盤研究（A）

### 市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

環境化学物質による発達期の神経系ならびに免疫系への影響におけるメカニズムの解明  
京都府立大学委託研究（平成23年度環境省環境研究総合推進費）

### 市瀬 孝道（代表）、吉田 成一（分担）、定金 香里（分担）賀 森（分担）

黄砂エアロゾル及び付着微生物・化学物質の生体影響とそのメカニズム解明に関する研究  
環境省環境研究総合推進費

### 市瀬孝道

バイオエアロゾルが引き起こすヒト健康への影響とその大気防疫システムの構築  
三井物産環境基金研究助成事業（国立大学法人金沢大学）

### 岩崎 香子

慢性腎臓病における骨折寄与因子の検討-骨組成変化に着目した解析-  
日本学術振興会科学研究費 基盤研究（C）

### 岩崎 香子

尿毒症物質の骨代謝・骨強度への影響-indole系、phenol系以外のアルブミン結合型尿毒症物質に着目した検討-  
日本腎臓財団

### 梅野 貴恵

母乳育児経験のある更年期女性の脂質代謝・動脈硬化プロフィールと更年期症状  
日本学術振興会科学研究費 基盤研究（C）



### 江藤 真紀

高齢者の転倒発生における視知覚と姿勢制御能力に影響する要因の検討

日本学術振興会科学研究費 基盤研究 (C)

### 甲斐 倫明

人の体型を考慮したCT診断時臓器線量の個人差を評価できるWEBシステムの開発

日本学術振興会科学研究費 基盤研究 (C)

### 甲斐 倫明

細胞動態のシステムティックレビューと実験データ解析による低線量・低線量率における放射線がんリスクの描写

環境省放射線の健康影響に係る研究調査事業

### 影山 隆之

施設高齢者の残尿および尿失禁改善の為のリハビリテーションプログラム開発に関する研究

日本学術振興会科学研究費 基盤研究 (C)

### 影山 隆之

定年退職と再雇用が労働者のメンタルヘルスに与える影響に関する産業看護学的研究

日本学術振興会科学研究費 基盤研究 (C)

### 佐伯 圭一郎

臨床看護職者を対象とした統計リテラシー教育のためのポータルサイト構築

日本学術振興会科学研究費 基盤研究 (C)

### 定金 香里

手指消毒薬の成分がアトピー性皮膚炎に及ぼす影響とその作用機序に関する研究

日本学術振興会科学研究費 基盤研究 (C)

### 秦 さと子

唐辛子添加食品による加齢性の嚥下機能低下予防法の検証

日本学術振興会科学研究費 若手研究 (B)

### 藤内 美保、佐藤 弥生 (分担)

フィジカルアセスメントに基づく日常生活行動・薬剤投与量調節の判断のツール開発

日本学術振興会科学研究費 基盤研究 (C)

**藤内 美保（研究協力者）、中林 博道、石田 佳代子、松本 初美**

看護師の高度な臨床実践能力修得・維持・向上のための研修プログラムの開発  
プライマリケア領域における看護師の高度な臨床実践能力の修得・維持・  
向上のためのOJT (On the Job Training)研修プログラムの提案  
厚生労働科学研究費補助金（地域医療基盤開発推進研究事業）

**平野 亙**

患者の権利保障のための地域臨床倫理コンサルテーション・システム確立に関する研究  
日本学術振興会科学研究費 基盤研究 (C)

**吉田 成一**

大気中浮遊粒子状物質の次世代免疫系への影響とそのメカニズム解明に関する研究  
日本学術振興会科学研究費 若手研究 (B)

## 12 各種研究・研修派遣

### 草野 淳子

派遣先 神奈川県立こども医療センター

小児専門病院での見学研修を行い、小児看護・医療について理解し知見を深めた。当病院は神奈川県内のこどもに対する医療・看護を行っている専門病院であり、きめ細かさ人間味ある看護が学びとなった。医療的ケアがあるこどもを在宅での生活に向けて支援する地域連携部門があり、学習の機会を得た。

### 猪俣 理恵

派遣先 The University of Aberdeen

英国の大学院博士課程教育の実際を学ぶため、Aberdeen Universityの博士課程学生へのプログラムに参加した。コース開始の段階から国が定めた研究者の基準である“The Resercher Development Framework”について詳しく説明がなされ、今後研究者として歩む一歩が博士課程コースであることが強調されていた。このフレームワークを確立するためのプログラムがいくつも設定されていて、学生が必要に応じて主体的に学べるよう、ITの活用や日程の工夫がされていた。また、博士課程を終えるためには、指導教員、学生、大学の責任と役割がはっきり明示されており、共同活動により成功するということを学生は強く認識させられていた。

### 松本 初美

派遣先 天理よろづ相談所病院

天理よろづ相談所病院の石井均先生が日本に紹介して下さったエンパワーメントの理念がどのように臨床看護の中で生かされているかを確認しながら糖尿病患者教育と糖尿病看護全般について学び糖尿病患者教育の能力を高めることを研修目的とする。病棟では糖尿病教育プログラム・外来では糖尿病療養指導に関して糖尿病認定看護師と糖尿病療養指導士より指導を受け、糖尿病自己管理の自己効力を高める看護の展開の実際を学ぶことができた。

### 井伊 暢美

派遣先 独立行政法人 国立長寿医療研究センター

今回、認知症をもつ人が増加しているなか、机上の知識だけでは補えない、認知症の人を全人的に理解することや地域社会で支える仕組み、および診断から治療に至るまでの過程や多職種によるチーム医療を臨床の場で研修して、教育に生かすことを目的とした。認知症専門病棟では、認知症看護認定看護師に指導をうけながら、認知症をもちながら身体疾患の治療をしている人への関わりなどを学ぶことができた。物忘れセンターでは、医師の診療の実際と診断過程などのシャドウウィングを通して、実際を知ることができた。また、認知症サポートチームの活動に同行し、多職種連携や一般病棟のスタッフの認知症理解の促進などを学んだ。家族会については概要の説明を受け、会に参加をすることで、家族が抱えているものを知ることができた。

## 岡元 愛

派遣先 大分県中部保健所

地域に根差した行政保健師の活動を具体的・体系的に捉え、専門性について考察することを目的として、母子保健業務の見学を中心に研修を行った。それにより保健師には、地域特性を踏まえて個及び集団を支援する能力、地域の健康課題を公衆衛生看護の視点から考察する能力、地域に不足している資源やシステムを開発し、施策化していける能力などが必要であることが理解できた。これらの学びを、平成25年度の地域看護学実習指導へ生かすこととした。

## 桑野 紀子

派遣先 地方独立行政法人 りんくう総合医療センター

関西国際空港に近接し、国内でもいち早く国際外来を開設したりんくう総合医療センターにて、①在日外国人医療の現状および課題を知る、②言語や文化的背景の異なる外国人患者に関わる際、看護職が身につけていくべき態度や知識・視点を学ぶ、という2点を目的とし、研修させていただいた。

研修施設は厚生労働省が支援事業として新設した「外国人患者受入れ医療機関認証制度」を活用し、文化や言語の壁を越えた医療サービスの向上に取り組んでいる。看護職と医療通訳との連携の重要性など、様々な視点を得ることができた。また、研修中、外国人患者が受診の際に困難を感じている場面を目にし、直接お話を伺う機会も得ることができ、外国人患者看護のサービス向上に取り組む必要性を再認識した。

## 13 学外研究者の受入

本学教員 甲斐 倫明

受入者 伴 信彦

平成24年度環境省受託研究「細胞動態のシステマティックレビューと実験データ解析による低線量・低線量率における放射線がんリスクの描写」の共同研究員として受け入れ、マウスの放射線誘発白血病に関する研究に従事した。

本学教員 甲斐 倫明

受入者 和泉 志津恵

平成24年度環境省受託研究「細胞動態のシステマティックレビューと実験データ解析による低線量・低線量率における放射線がんリスクの描写」の共同研究員として受け入れ、マウスの放射線誘発白血病の数理モデルに関する研究に従事した。

本学教員 市瀬 孝道

受入者 賀 森

黄砂の生体への影響を研究するために博士研究員として受け入れた。

本学教員 市瀬 孝道

受入者 任 亜浩

黄砂の生体影響を研究するために中国医科大学、大学院公共衛生院講師の任 亜浩氏を共同研究員として受け入れた。

## 14 教職員名簿

### 専任教員

	学長	村嶋 幸代	H24. 4. 1	採用
生体科学	教授	中林 博道	H24. 4. 1	採用
	准教授	安部 眞佐子		
	助教	岩崎 香子		
生体反応学	教授	市瀬 孝道		
	准教授	吉田 成一		
	助教	定金 香里		
	学術研究員	賀 森	H25. 3. 31	退職
健康運動学	教授	稲垣 敦		
人間関係学	准教授	吉村 匠平		
	准教授	関根 剛		
	非常勤助手	森田 慶子	H24. 4. 1	採用
環境保健学	教授	甲斐 倫明		
	講師	小嶋 光明		
	助教	小野 孝二	H25. 3. 31	退職
健康情報科学	教授	佐伯 圭一郎		
	講師	品川 佳満		
	助教	首藤 信通	H24. 4. 1	採用
言語学	教授	G. T. Shirley		
	准教授	宮内 信治		
	非常勤助手	田原 歩		
基礎看護学	准教授	伊東 朋子		
	講師	秦 さと子		
	助手	栗林 好子		
	助手	水野 優子		
	助手	巻野 雄介	H24. 4. 1	採用
看護アセスメント学	教授	藤内 美保		
	准教授	石田 佳代子		
	助教	河野 梢子		
	助手	田中 佳子		
成人・老年看護学	教授	小野 美喜		
	准教授	福田 広美		
	講師	松本 初美		
	助教	井伊 暢美		
	助教	江月 優子		
	助手	中釜 英里佳		
	臨時助手	堀 裕子		
	臨時助手	河野 優子	H24. 12. 1	採用

小児看護学	教授	高野 政子	
	助教	草野 淳子	H24. 4. 1 採用
	助手	足立 綾	
	臨時助手	中垣 紀子	H24. 8. 31 退職 H24. 9. 1 採用 H25. 3. 31 退職
	短期実習臨時助手	佐々木 基子	H24. 9. 1 採用 H24. 12. 7 退職
母性看護学	教授	林 猪都子	
	講師	猪俣 理恵	
	助手	植田 みゆき	H24. 4. 1 採用
	短期実習臨時助手	渡邊 文子	H24. 9. 1 採用 H24. 12. 7 退職
助産学	准教授	梅野 貴恵	
	助教	樋口 幸	
	助手	石岡 洋子	
	助手	安部 真紀	H24. 4. 1 採用
	臨時助手	渡邊 文子	H24. 8. 31 退職
精神看護学	教授	影山 隆之	
	准教授	大賀 淳子	
	助手	後藤 成人	H24. 4. 1 採用
保健管理学	教授	桜井 礼子	
	准教授	平野 互	
	臨時助手	井ノ口 明美	H25. 3. 31 退職
	臨時助手	山田 淳子	H25. 3. 31 退職
地域看護学	准教授	江藤 真紀	H25. 3. 31 退職
	講師	赤星 琴美	
	助教	高波 利恵	H24. 6. 30 退職
	助手	岡元 愛	H24. 4. 1 採用
	臨時助手	小田 千尋	H24. 7. 1 採用
	助教	桑野 紀子	
国際看護学 看護研究交流センター	助手	佐藤 弥生	
	短期非常勤助手	突田 和	H24. 8. 1 採用 H25. 3. 15 退職
特任教授	特任教授	志賀 壽美代	H25. 3. 31 退職
	特任教授	李 笑雨	H24. 4. 1 採用
			H25. 3. 31 退職
就職相談員	就職相談員	小川 三代子	H24. 4. 1 採用
非常勤講師（学部）	澤田 佳孝	美術とこころ	
	西 英久	哲学入門	
	西園 晃	微生物免疫論	

松田 美香	言語表現法
大杉 至	社会学入門
二宮 孝富	法学入門（日本国憲法）
足立 恵理	文化人類学入門
劉 美貞	韓国語
宮本 修	音楽とこころ
松本 佳那子	健康科学実験
生野 末子	地域助産活動論
宮崎 文子	地域助産活動論
戸高 佐枝子	地域助産活動論

## 非常勤講師（大学院）

岩波 栄逸	診察・診断学特論
立川 洋一	老年アセスメント学演習
永瀬 公明	老年アセスメント学演習
古川 雅英	老年実践演習、 小児実践演習
佐藤 博	老年実践演習
山口 豊	診察・診断学特論
大久保 浩一	診察・診断学特論
山本 真	老年実践演習
藤富 豊	老年NP特論
財前 博文	老年疾病特論
鈴木 正義	小児診察・診断学特論、 小児アセスメント学演習
竹島 直純	老年疾病特論
佐藤 昌司	周産期特論、 周産期診断技術演習
飯田 浩一	周産期特論
豊福 一輝	周産期特論
軸丸 三枝子	周産期特論
後藤 清美	周産期特論
中村 聡	リプロダクティブ・ ヘルス特論
嶺 真一郎	リプロダクティブ・ ヘルス特論
前田 徹	老年実践演習
卜部 省悟	病態機能学特論
宮成 美弥	老年NP特論
井上 敏郎	小児疾病特論
大野 拓郎	小児疾病特論
岩松 浩子	小児疾病特論
金谷 能明	小児疾病特論
糸長 伸能	小児疾病特論
黒木 雪江	小児NP特論
玉井 文洋	健康危機管理論
矢野 庄司	診察・診断学特論
渡邊 めぐみ	分娩期診断技術特論
菊池 聖子	助産マネジメント演習



伊奈 啓輔	老年疾病特論
糸永 一朗	診察・診断学特論、 老年疾病特論
伊東 弘樹	老年臨床薬理学特論
兒玉 雅明	診察・診断学特論、 老年疾病特論
阿部 航	診察・診断学特論
吉岩 あおい	診察・診断学特論
浜崎 一	老年アセスメント学演習
江口 美和	産業保健特論
増井 玲子	老年疾病特論、 疾病予防学特論
井上 祥明	母子成育支援特論
小寺 隆元	老年疾病特論
戸高 佐枝子	助産マネジメント論
生野 末子	分娩期診断技術特論、 助産マネジメント論、 助産マネジメント演習
宇津宮 隆史	リプロダクティブ・ ヘルス特論
上野 桂子	母子成育支援特論
竹内 山水	老年実践演習
竹下 泰	老年疾病特論
麻生 哲郎	老年疾病特論
塚本 容子	老年NP探究セミナー
宮崎 文子	看護教育特論、 助産マネジメント論
吉留 宏明	老年疾病特論
小山 秀夫	看護政策論
堀永 孚郎	リプロダクティブ・ ヘルス特論
三浦 芳子	老年疾病特論
江口 春彦	小児診察・診断学特論、 小児NP探求セミナー
佐藤 圭右	小児診察・診断学特論、 小児実践演習、 小児NP演習
後藤 愛	初期体験実習 (NP)、 小児NP特論
別府 幹庸	小児診察・診断学特論
松本 康弘	小児薬理学演習
小野 重遠	疾病予防学特論 小児疾病特論
阿部 実	保健医療福祉政策論
福永 拙	小児NP演習
谷口 一郎	リプロダクティブ・ ヘルス特論
松田 貴雄	リプロダクティブ・ ヘルス特論
浜野 清子	地域保健特論
三浦 源太	疾病予防学特論

平川 英敏	薬剤マネジメント特論
藤内 修二	広域看護学概論、 健康危機管理論、 疾病予防学特論
池邊 淑子	疾病予防学特論
井上 貴史	リプロダクティブ・ ヘルステ論
堀 文彦	小児疾病特論
式田 由美子	小児NP特論
疋田 利恵	地域母子保健学特論
力徳 広子	地域母子保健学特論
佐藤 京子	地域保健学特論
實崎 美奈	ウイメンズヘルステ論

## 事務職員

総務グループ	事務局長	戸田 太治	H25. 3. 30	転出	
	課長補佐	朝倉 泰三	H24. 4. 1	転入	
	主幹	小玉 富瑞	H25. 3. 31	転出	
	副主幹	美登 弘美	H24. 4. 1	転入	
	副主幹	宮添 春彦	H24. 4. 1	転入	
	主査	池邊 賢一	H24. 4. 1	転入	
	主事	中野 麻梨子			
	主事	江本 華子			
	事務職員	釘宮 裕和			
	事務職員	池邊 尚美	H24. 4. 1	採用	
	事務職員	陸 陽			
	派遣職員	藤田 雅	H24. 7. 23	派遣	
	教務学生グループ	課長補佐	佐藤 俊実	H25. 3. 31	転出
		副主幹	薬師寺 啓子	H25. 3. 31	転出
主任		神崎 正太			
保健師		津留 由美	H24. 4. 1	採用	
事務職員		神崎 純子	H25. 3. 31	退職	
事務職員		佐藤 めぐみ	H24. 4. 1	採用	
図書館管理グループ	事務職員	佐藤 由美			
	非常勤職員	白川 裕子			
	非常勤職員	中野 智子	H25. 3. 31	退職	
	非常勤職員	工藤 信二			